橿原市埋蔵文化財調査報告　第４冊

藤 原 京 跡

－右京十一・十二条三坊、右京十二条三・四坊－

2012 年 3 月

奈良県橿原市教育委員会

序

ここに藤原京跡の発掘調査報告書を『橿原市埋蔵文化財調査報告 第４冊』として刊行します。

当教育委員会では、奈良県橿原市石川町地内において計画された２ヶ所の宅地造成工事に伴い、発掘調査を実施いたしました。本書ではその２件の発掘調査の報告を行います。

調査地は日本で最初の本格的な都城「藤原京」の南端近く、古代の道路である山田道に近接した場所に位置しています。調査地の「石川」という地名は『日本書紀』にも記載が見られ、非常に歴史の深い地域として知られています。

今回の調査では、藤原京の道路遺構や、寺院に関連すると考えられる遺物などが発見され、地域の歴史を知る上で貴重な成果を得ることができました。

最後になりましたが、現地の発掘調査の実施や本書の刊行にあたって御協力いただいた関係諸氏ならび諸機関に厚く御礼申し上げると共に、本書が多くの方々に活用され、遺跡の重要性を周知する機縁となることを願います。

平成 24 年 3 月 21 日

橿原市教育委員会
教育長　吉本重男

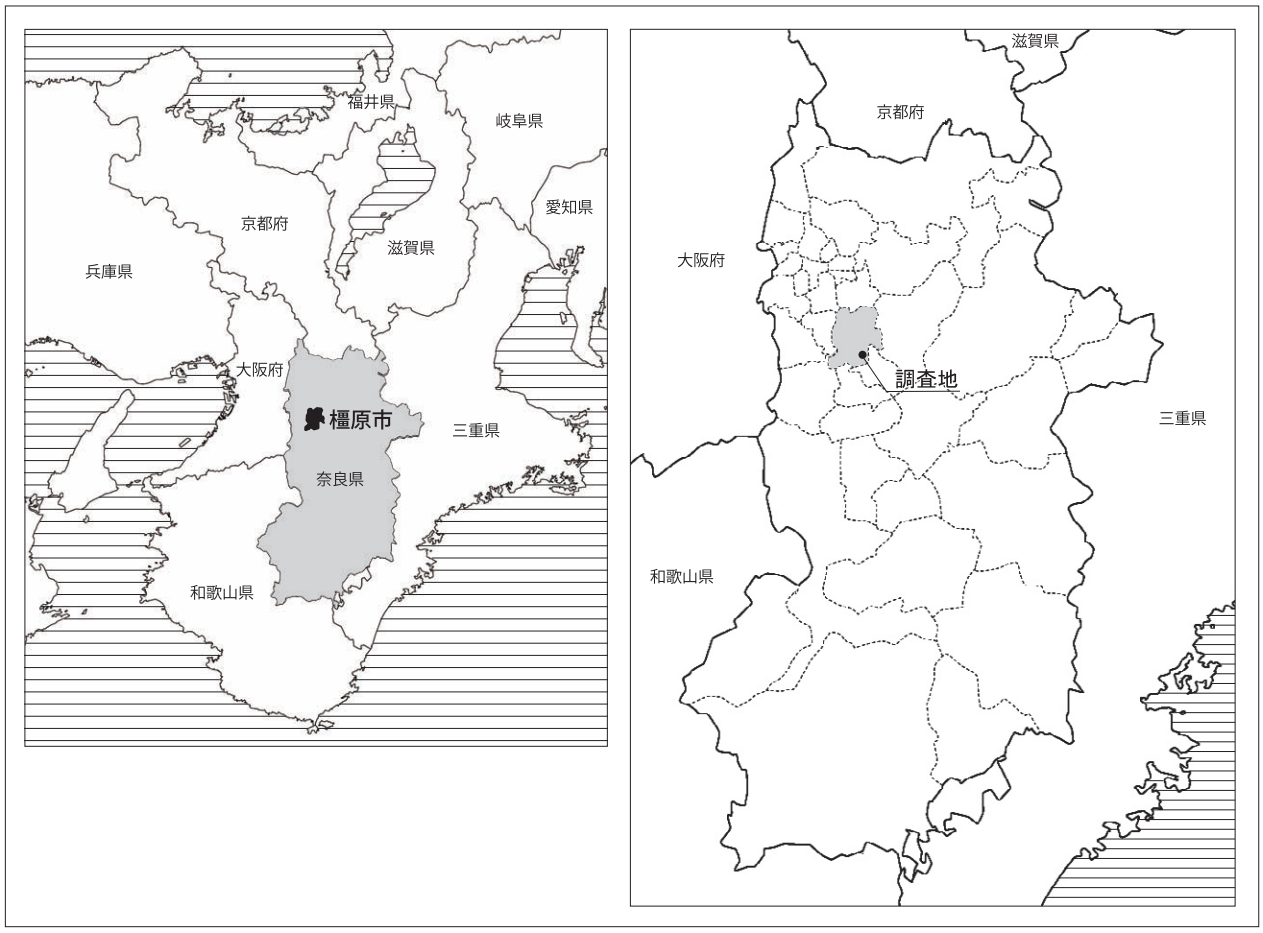

福井県
岐阜県
愛知県
京都府
滋賀県
兵庫県
大阪府
橿原市
三重県
奈良県
和歌山県
滋賀県
京都府
大阪府
調査地
三重県
和歌山県

図 1　調査地位置図

例　　言

1　本書は、藤原京右京十一・十二条三坊および右京十二条三・四坊の発掘調査報告書である。調査地はいずれも奈良県橿原市石川町に所在する。

2　発掘調査は、株式会社 井上地所 代表取締役 井上 猛 氏より分譲宅地造成工事に伴って提出された２件の埋蔵文化財発掘届出にもとづき、奈良県教育委員会の指導のもと奈良県橿原市教育委員会が実施した。

3　現地調査期間は、右京十一・十二条三坊の調査が平成 23（2011）年４月４日～同年５月２日、右京十二条三・四坊の調査が調査が平成 23（2011）年５月 10 日～同年５月 20 日である。また、遺物整理・報告書作成には平成 23 年度を充てた。

4　現地調査および遺物整理時の体制は、橿原市教育委員会　文化財局長　峙 親彦、文化財課長　竹田正則、 課長補佐　濱口和弘・髙瀬友己、保存係長　平岩欣太、事業調整係長　米田 一、 技術員　石坂泰士である。現地調査は右京十一・十二条三坊を石坂が、右京十二条三・四坊を平岩がそれぞれ担当した。

5　現地調査および整理・報告書作成にかかる費用は株式会社 井上地所が負担された。記して感謝申し上げたい。

6　現地調査および遺物整理を実施するにあたって、地元各位の多大な御協力を賜った。また、石川廃寺および出土瓦については近畿大学 大脇潔 氏に格別の御指導を賜った。記して感謝申し上げたい。

7　出土遺物をはじめ調査記録は、橿原市教育委員会で保管している。

8　本書所収の写真のうち、現場調査写真は現地調査担当者が撮影を行った。遺物写真はアートフォト右文 佐藤右文 氏が撮影を行った。

9　本書の編集および執筆は平岩・石坂が担当した。

凡　　例

1　本書で示す方位は座標北を使用した。座標値は世界測地系（平面直角座標第Ⅵ系）に基づく。

2　図版に掲載している遺物の縮尺率は任意である。

3　土層名における色調は『新版標準土色帖 24 版』（小山正忠・竹原秀雄　編著、日本色研事業株式会社　発行）を使用した。

4　遺構・遺物の図面縮尺は各図に示した。遺構断面図の標高値はいずれもメートル表記である。遺構断面図の斜線トーンは地山を示している。

5　遺構番号は各調査ごとに個別の番号を付与している。

6　遺物実測図の番号は本書全体の通し番号で示した。図版の遺物番号もこれに合わせている。１～78 が右京十一・十二条三坊調査の出土遺物、79 ～ 154 が右京十二条三・四坊調査の出土遺物である。

目　次

序
例言
凡例
目次
挿図目次
図版目次

第Ⅰ章　調査の概要
　第１節　調査に至る経緯と調査・整理体制・・・

挿　図　目　次

図１　調査地位置図・・・序裏
図２　調査地周辺の遺跡（Ｓ＝1/25,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
図３　調査地周辺図（Ｓ＝1/2,500）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
右京十一・十二条三坊の調査（橿教委 2011-1 次）
図４　調査区位置関係図（Ｓ＝1/500）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
図５　１トレンチ調査区東壁・東西畦 土層断面（Ｓ＝1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７
図６　２トレンチ調査区東壁・北壁 土層断面（Ｓ＝1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８
図７　１トレンチ 遺構平面図（Ｓ＝1/150）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
図８　１トレンチ 028-SD 南半部 ピット 平面・断面図（Ｓ＝1/40、1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・11
図９　２トレンチ 遺構平面図（Ｓ＝1/150）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
図 10　２トレンチ 遺構断面図（Ｓ＝1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
図 11　１・２トレンチ 遺構出土 須恵器（Ｓ＝1/4、1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
図 12　１トレンチⅢ層（整地層）出土 須恵器（Ｓ＝1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
図 13　２トレンチⅢ層（整地層）出土 須恵器（Ｓ＝1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
図 14　１・２トレンチ遺構出土 土師器（Ｓ＝1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
図 15　１・２トレンチⅢ層（整地層）出土 土師器（Ｓ＝1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
図 16　Ⅲ層（整地層）出土 弥生土器（Ｓ＝1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
図 17　023-SD 出土 瓦器（Ｓ＝1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
図 18　２トレンチ出土 土製品・石製品（Ｓ＝1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
図 19　１・２トレンチ出土 軒丸瓦（Ｓ＝1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
図 20　２トレンチ Ⅲ層（整地層）出土 軒平瓦（Ｓ＝1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
図 21　１トレンチ Ⅲ層（整地層）出土 丸瓦①（Ｓ＝1/5）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
図 22　１・２トレンチ Ⅲ層（整地層）出土 丸瓦②（Ｓ＝1/5）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
図 23　１トレンチ Ⅲ層（整地層）出土 丸瓦③（Ｓ＝1/5）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
図 24　１・２トレンチ Ⅲ層（整地層）出土 平瓦（Ｓ＝1/5）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
右京十二条三・四坊の調査（橿教委 2011-2 次）
図 25　南区 南壁 土層断面図（Ｓ＝1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
図 26　北区 北・東壁 土層断面図（Ｓ＝1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
図 27　南区 028-SX 平面・断面図（Ｓ＝1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
図 28　上層遺構平面図（Ｓ＝1/100）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
図 29　中層遺構平面図（Ｓ＝1/100）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
図 30　下層遺構平面図（Ｓ＝1/100）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
図 31　南区 035-SX 上層（整地層）出土 土器（Ｓ＝1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
図 32　南区 035-SX 下層（砂層）出土 土器（Ｓ＝1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
図 33　南区 028-SX 出土 土器（Ｓ＝1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
図 34　南区 036-SD 出土 土器（Ｓ＝1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
図 35　南区 032-PIT 出土 土器（Ｓ＝1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42

図　版　目　次

右京十一・十二条三坊の調査（橿教委 2011-1 次）
１トレンチ 上層遺構検出状況（北から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版１左上
１トレンチ 上層遺構完掘・下層遺構検出状況（北から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版１右上
１トレンチ 下層遺構完掘状況（北から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版１左下
１トレンチ 南半 整地層内 瓦出土状況（南から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版１右下

029‐SD 検出状況（東から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版２左上
1 トレンチ中央部 PIT 群（東から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版２右上
1 トレンチ南半 整地層 瓦出土状況（北東から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版２左中
028‐SD 完掘状況（南から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版２右中
1 トレンチ北部 東西畦土層断面（南から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版２下
2 トレンチ 上層遺構検出状況（北から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版３左上
2 トレンチ 上層遺構完掘状況（北から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版３右上
2 トレンチ 下層遺構検出状況（北から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版３左下
2 トレンチ 下層遺構完掘状況（北から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版３右下
2 トレンチ 下層遺構検出状況（整地層掘り下げ後。北から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版４左上
027‐SD 完掘状況（西から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版４右上
2 トレンチ北端 下層遺構検出状況（西から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版４右二段目
039‐SX 検出状況（西から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版４左中
039‐SX 完掘状況（西から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版４右三段目
055‐SD 軒丸瓦出土状況（東から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版４左下
036‐SD 土器出土状況（西から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版４右下
023‐SD 出土 軒丸瓦 ・・図版５上
055‐SK 出土 軒丸瓦 ・・図版５下
整地層出土 軒平瓦・・・図版６左上
整地層出土 須恵器・・・図版６右上
028‐SD 出土 須恵器 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版６左中
046‐SD 出土 須恵器 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版６中
036‐SD 出土 土師器 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版６中
整地層出土 土馬・・・図版６右中
整地層出土 土師器・・図版６下
整地層出土 須恵器・・図版７上
整地層出土 丸瓦・・・図版７下
整地層出土 丸瓦・平瓦・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版８
整地層出土 平瓦・・・図版９

右京十二条三・四坊の調査（橿教委 2011-2 次）

北・南区全景 下層遺構完掘状況（西から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版 10 上
南区全景 上層遺構完掘状況（西から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版 10 左下
南区全景 下層遺構完掘状況（西から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版 10 右下
南区 落ち込み 035-SX 完掘状況（南東から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版 11 上
南区 落ち込み 035-SX 土層断面（北西から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版 11 下
南区 土坑 028-SX 完掘状況（南から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版 12 上
北区全景 下層遺構検出状況（東から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版 12 下
032-PIT 出土 須恵器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版 13 左上
028-SX 出土 土師器・須恵器 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版 13 右上・下
035-SX 出土 土師器・須恵器 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版 14 上
035-SX 出土 須恵器 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版 14 下
035-SX 出土 須恵器 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版 15 上
035-SX 出土 土師器 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・図版 15 下

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯と調査・整理体制

藤原京は694年から710年まで営まれた日本で最初の本格的都城である。現在確認されている藤原京の規模は東西約5.3㎞、南北約4.8㎞である。現在の行政区域では橿原市東部、桜井市西部、高市郡明日香村北部にまたがっている。藤原京ではこれまでに多くの調査が行われ、様々な成果が得られている。

今回、橿原市の南部、石川町において２ヶ所で分譲宅地造成工事が計画された。計画地は橿原市石川町134-1・256-1・257-1・259-1および石川町408・409-1・410・414・443・444である。前者は平成22（2010）年９月21日付、後者は平成23（2011）年１月24日付でそれぞれ、株式会社　井上地所　代表取締役　井上猛 氏より埋蔵文化財発掘届出が提出された。遺跡名は前者が藤原京右京十一・十二条三坊、後者が藤原京右京十二条三・四坊である。

この届出を受けて、平成22（2010）年10月７日に藤原京右京十一・十二条三坊の試掘調査を当教育委員会が実施した。試掘調査では宅地内道路部分に設定した東・西２ヶ所の調査区において、古代を中心とする遺構・遺物が存在することを確認した。同様に、藤原京右京十二条三･四坊においても平成23（2011）年４月１日に当教育委員会が試掘調査を実施し、古代の遺構が存在することを確認した。これらの結果を受けて当教育委員会と事業者が協議を重ね、それぞれの発掘調査および整理作業に関する契約を締結することとなった。発掘調査の対象となるのは、いずれも公共下水管の敷設を伴う宅地内道路部分である。

当教育委員会では、各年度内に行った発掘調査名称を「西暦 - 調査次数」の形で示している。藤原京右京十一･十二条三坊の調査は「橿教委2011 - １次調査」という番号を付与している。また、藤原京右京十二条三・四坊の調査は「橿教委2011 - ２次調査」という番号を付与している。調査記録や出土遺物にはこの番号を記して整理・保管している。

２件の発掘調査は同一事業者による工事に伴うものであり、調査地も近接しており、本書において一括して報告を行う。右京十一・十二条三坊（橿教委2011 - １次）の調査内容については第Ⅱ章で、右京十二条三･四坊（橿教委2011 - ２次）の調査内容については第Ⅲ章で、それぞれ個別に報告する。

第２節　調査の経過

藤原京右京十一・十二条三坊の調査は平成23（2011）年４月４日から同年５月２日までの期間で実施、実動日数20日間を要した。調査の日々の記録は、以下の調査日誌抄録に掲げた。

4．4（月）重機掘削開始。1トレンチ終了。整地層に瓦多数。
4．5（火）2トレンチ重機掘削、終了。同様に瓦多数。
4．6（水）遺構検出写真撮影。耕作溝掘削開始。
4．7（木）耕作溝掘削終了。1トレンチ西端に南北溝あり。メッシュ杭打設作業。
4．8（金）雨天のため、作業なし。
4．11（月）上層遺構完掘写真撮影。
4．12（火）028-SD掘削。2トレンチ整地層の上層掘削。
4．13（水）023-SDから軒丸瓦出土。2トレンチ遺構面の再精査、遺構掘削。
4．14（木）028-SD下でピット複数検出。1トレンチ南半の整地層内瓦を平面検出。
4．15（金）1トレンチ遺構完掘。整地層の掘削を開始。
4．18（月）2トレンチ整地層上部をすき取り後、再度遺構検出写真撮影。東西溝、ピットなどの存在を確認。1トレンチ整地層掘削。下層に古墳時代堆積層。
4．19（火）2トレンチ遺構完掘写真撮影。
4．20（水）2トレンチ整地層掘掘削。
4．21（木）1・2トレンチ整地層掘削。
4．22（金）2トレンチ整地層除去後遺構検出。遺構なし。11時過ぎから雨。午後は作業中止。
4．25（月）1トレンチ整地層除去後遺構検出作業。遺構なし。
4．26（火）1トレンチ古墳時代堆積層掘削。下層に遺構なし。
4．27（水）調査区壁面写真撮影、図面作成。
4．28（木）図面記録作成。
4．29（金）重機による埋め戻し。
5．2（月）撤収作業。調査終了。

藤原京右京十二条三・四坊の調査は平成23（2011）年5月10日から同年5月20日までの期間で実施し、実動日数7日を要した。調査の日々の記録は、以下の調査日誌抄録に掲げた。

5．10（火）重機掘削。
5．11（水）雨天のため、作業なし。
5．12（木）雨天のため、作業なし。
5．13（金）上層遺構検出写真撮影。遺構掘削開始。
5．16（月）上層遺構掘削完了。上層遺構完掘写真撮影
5．17（火）028・035‐SX掘削。柱穴の検出及び断ち割り。
5．18（水）028・035‐SX掘削。028‐SX土器出土状況を記録。
5．19（木）035‐SX、036‐SD掘削。下層遺構完掘写真撮影。
5．20（金）完掘写真撮影。土層断面記録作成。調査終了。

第3節　地理的・歴史的環境

今回の調査地は橿原市石川町に所在する。橿原市は奈良盆地の南東部に位置している。市の南部には龍門山地から派生する丘陵地が広がっており、北に向かって緩やかに下降する斜面地形を経て、北に肥沃な沖積地が広がる。橿原市の南部に所在する石川町は、ちょうど丘陵地から沖積地へと地形が移り変わっていく一帯に位置している。調査地周辺は水田と宅地が混ざり合う住宅地であるが、近年は急速に宅地化が進行しつつある地域である。

右京十二条三・四坊調査地は低位丘陵北側の緩斜面上（標高約79.7 m）に位置している。一方、右京十一・十二条三坊調査地は平坦な水田地（標高約78.3 ～ 78.5 m）に位置している。ふたつの調査地は直線距離にして南北約200 m離れている。両調査地の間には県道124号線橿原神宮東口停車場飛鳥線が東西に通っている。近鉄橿原神宮前駅の東、丈六交差点から東にのびる、この県道は古代の道路である山田道を踏襲した道路である。調査地近辺では、この山田道が南側の丘陵地と北側の平坦地との境界になっている。

調査地の南東には石川池と呼ばれる溜池が存在し、その南東には孝元天皇陵が位置している。石川池は『日本書紀』や『古事記』、『万葉集』に剣池として記述が見られる長い歴史をもつ池である。甘樫丘から西～北西に派生する丘陵の間の谷筋にかつて流れていた小河川を堰き止めて造られた溜池であると考えられている。右京十一・十二条三坊調査地は石川池北西隅から北西にのびる低地部に位置する。調査地の小字名「浦坊」とあわせて、古くはこの谷筋に小河川が通っていたと考えられる。また、右京十一・十二条三坊調査地の東側、石川池の北側には標高約90 ～ 100 mの小高い丘陵が存在する。現在、丘陵上の北西には橿原市

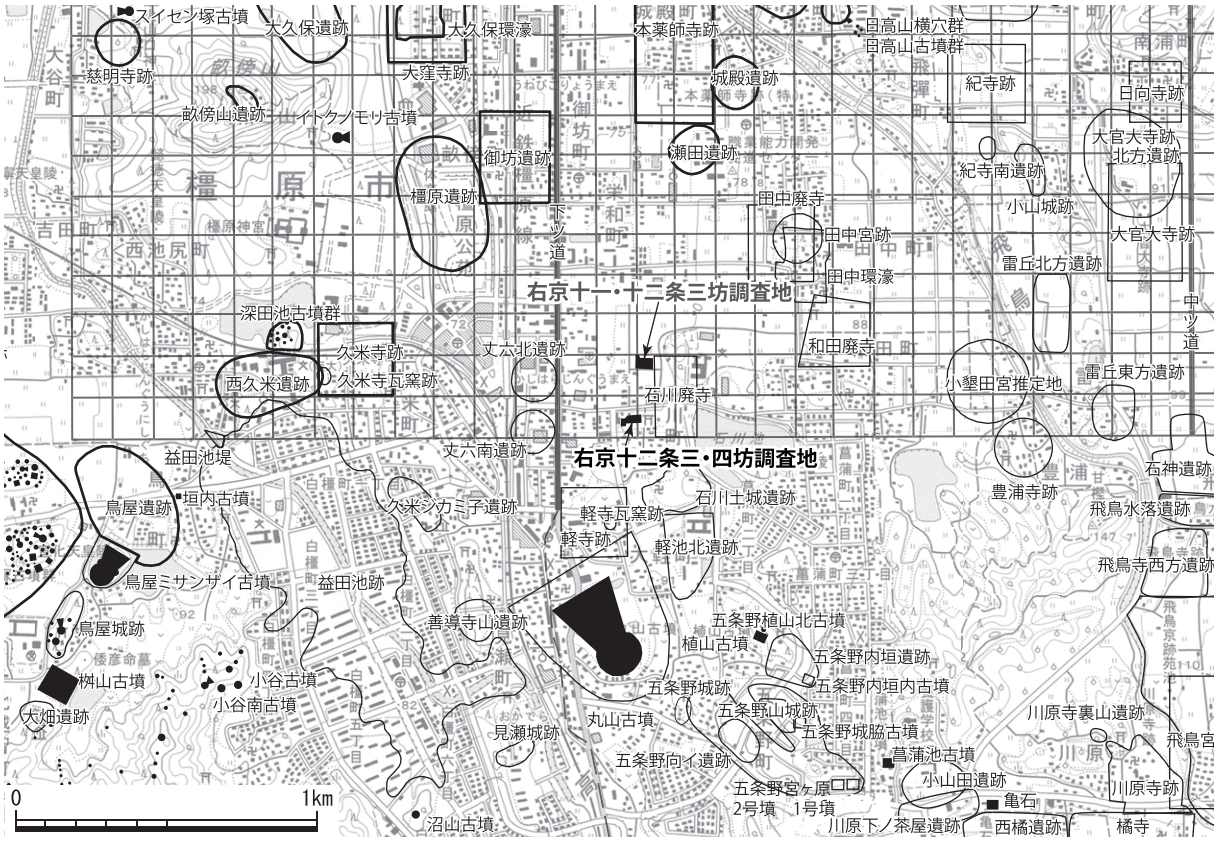


図２　調査地周辺の遺跡（Ｓ＝1/25,000）

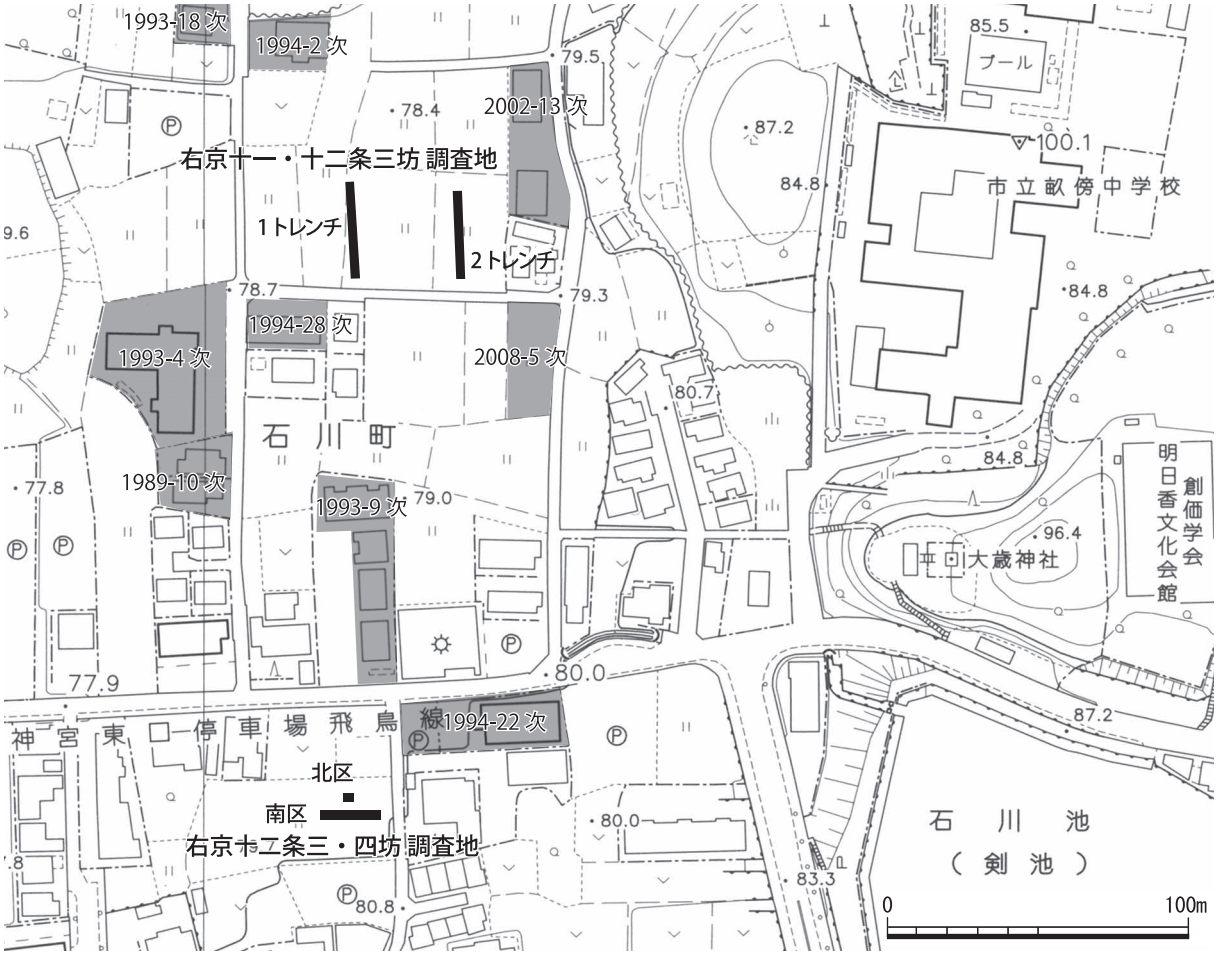


図３　調査地周辺図（Ｓ＝1/2,500。数字は橿原市教育委員会の調査次数）

立畝傍中学校が、南西には大歳神社が所在している。丘陵西辺の北半部分は傾斜のきつい崖面となっているが、西辺の南半部分は緩やかに南西～西方向に下る段々状の地形となっている。この段地形の一帯には「宮ノ浦」「宮ノ下」という小字名が付けられている。

両調査地より東側、「宮ノ浦」「宮ノ下」を中心とする一帯は古代の寺院跡である石川廃寺の範囲として遺跡地図に登録されている。石川廃寺という名称は現在の地名にもとづいて付けられたものである。かつては浦坊廃寺・ウラン坊廃寺などとも呼ばれていたことがある遺跡である。寺院の正確な位置や本来の名称をはじめ、寺院についての具体的な姿については断片的な情報が存在するだけである。大正時代には「宮ノ下」で礎石 6 個が発見されたことが記録されている。また、昭和 40 年代までは「宮ノ下」と「浦坊」の間の南北道路に花崗岩製の唐居敷が放置されていたという。これらの礎石や唐居敷は現在では失われており、簡単な記録のみが残されている。周辺では 7 世紀後半頃の瓦の出土が知られており、「宮ノ浦」「宮ノ下」周辺の畑地には、現在でも布目瓦の破片が多く散乱している。石川廃寺は『日本書紀』に記事が見られる蘇我馬子ゆかりの石川精舎、あるいは興福寺の前身である厩坂寺の候補地として名前が挙げられることが多い。いずれも古代史上において非常に重要な位置を占める寺院であり、その点において石川廃寺は注目を集めている。

先述のとおり、両調査地は藤原京の範囲内に含まれる。これまでに確認されている最も南の条坊道路は十二条大路である。両調査地は藤原京の南端付近に位置していることになる。とくに右京十二条三・四坊調査地は十二条大路から北に約 50 mの地点に位置している。両調査地の間に位置する山田道は西に約 250 mの地点で、古代の官道である下ツ道（藤原京西四坊大路）と交差する。下ツ道と山田道の交差点（現在の丈六交差点付近）は軽の衢（ちまた）と呼ばれ、その近辺は交通の要衝として飛鳥時代から栄えていたことが様々な記録に見られる。調査地一帯は軽の衢から山田道を伝って飛鳥方面に通り抜ける途上の宅地にあたり、その地理的な重要性は言うまでもない。また、大宝年間には「石川宮」と呼ばれる宮が存在していたことが出土した木簡から知られている。「石川宮」の具体的な位置や居住者については明らかになっていないが、調査地のある石川町近辺にその所在地を求める意見も多い。

右京十一・十二条三坊調査地の周囲では、当教育委員会が共同住宅や個人住宅の建設に伴う比較的小規模な発掘調査を実施している。以下に古代を中心に主な成果を述べる。橿教委 1993 － 4 次調査は調査地の南西約 80 mに位置する共同住宅建設に伴う調査である。飛鳥時代の石組暗渠や調査地東部に広がる整地層の存在を確認している。橿教委 1993 － 9 次調査は調査地の南約 70 mに位置する共同住宅建設に伴う調査である。重弧文軒平瓦を含む多量の瓦を含む藤原京整地層や西三坊大路東側溝と考えられる南北溝を確認している。橿教委 2002 － 13 次調査は調査地の北東約 30 mに位置する共同住宅建設に伴う調査である。調査地は丘陵縁辺部の微高地上である。小規模な調査ではあるが、7 世紀後半の整地層および大型の掘立柱建物を確認している。複弁蓮華文軒丸瓦と四重弧文軒平瓦が出土している。このように調査地の周囲では大規模な整地層の存在や飛鳥時代から藤原京期にかけての遺構が確認されている。この他では、調査地の北西約 150 mに位置する共同住宅の建設に伴う橿教委 2004 － 1 次調査において、藤原京期～奈良時代の最大幅約 17 mを測る大溝や掘立柱建物などの遺構を確認している。

第Ⅱ章　右京十一・十二条三坊の調査（橿教委 2011-1 次）

第 1 節　調査区の設定

敷地の東・西 2 ヶ所に敷設される南北道路部分に、それぞれ南北に長い調査区を設定した。調査区の名称は、西側の調査区を 1 トレンチ、東側の調査区を 2 トレンチとする。両調査区は東西に約 32 m離れている。敷設される道路はどちらも北でやや西に振れており、それに従って調査区も北で約 2 ～ 4°西に振れる形状となっている。

調査区の規模は、1 トレンチが東西幅 3 m・南北長 32 m・面積 96 ㎡、2 トレンチが東西幅 3 m・南北長 29 m・面積 87 ㎡、合計面積 183 ㎡である。本調査に先立って実施した試掘調査区は、1 トレンチでは調査区東辺沿い、2 トレンチでは調査区東半部内にそれぞれ位置している。1 トレンチ南半の南北溝状の撹乱坑は試掘調査区の跡である。

調査地は藤原京の条坊復元では右京十一条三坊南西坪および十二条三坊北西坪にあたる。ただし十一条三坊部分については、敷地北西隅のわずかに飛び出た一角に含まれるのみであり、調査区を設定した範囲内には含まれていない。調査地の西辺沿いには西三坊大路が通っており、調査区を設定した位置は右京十二条三坊北西坪の北西隅部分にあたる。また、調査地の南東の一帯には古代の寺院である石川廃寺が存在すると考えられている。調査地は石川廃寺推定域の北西隅に接する地点にあたる。

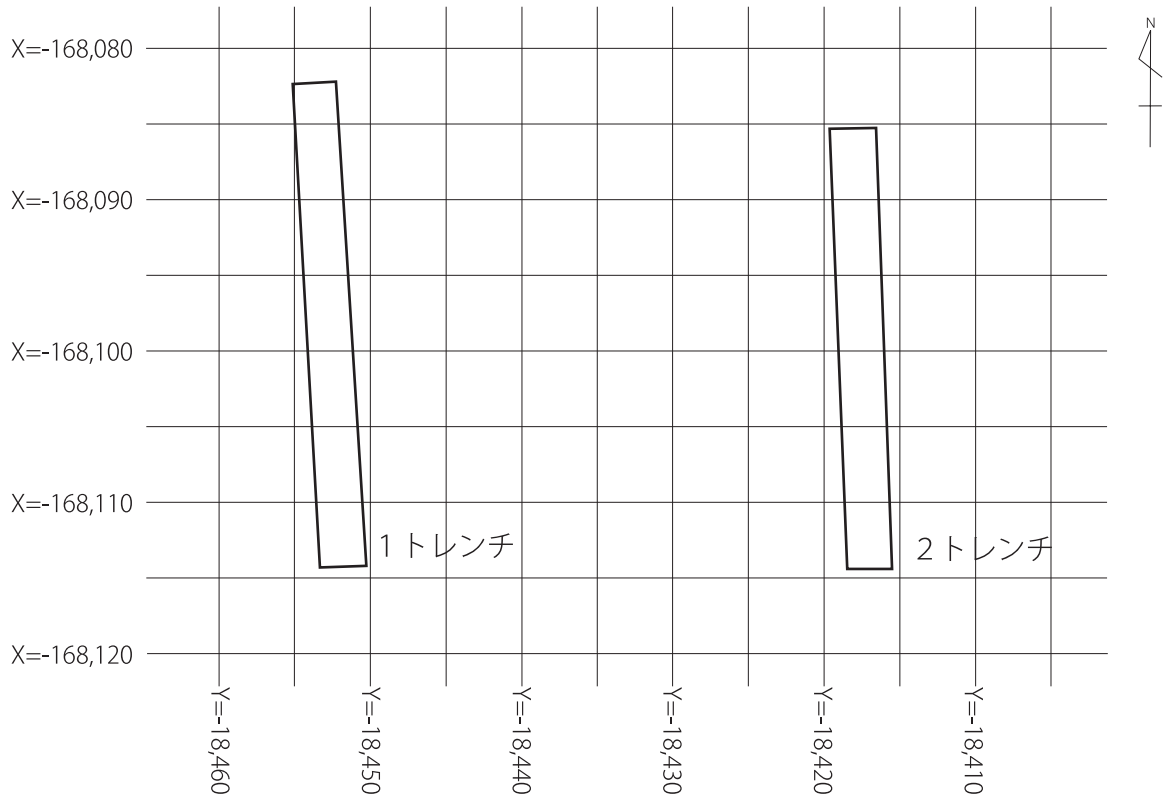


図 4　調査区位置関係図（S ＝ 1/500）

第２節　層序

調査区内の基本層序は１トレンチと２トレンチでおおむね共通する。ただし、各層の細かな土質や２トレンチではⅣ層を欠く点など、若干の差異も存在する。以下にその詳細を述べる。

Ⅰ層：現代の水田耕作土（1 トレンチ：1 層。2 トレンチ：1 層）
Ⅱ層：中世以降の耕作土（1 トレンチ：2 ～ 5 層。2 トレンチ：2・3・38 ～ 40 層）
Ⅲ層：藤原京整地層（1 トレンチ：7 ～ 17・23 層。2 トレンチ：25 ～ 34 層）
Ⅳ層：古墳時代後期の堆積土（1 トレンチ：18・19 層）
Ⅴ層：地山。古墳時代以前の堆積土（1 トレンチ：20 ～ 22 層。2 トレンチ：35 ～ 37 層）

各トレンチの層番号は図 5・6 を参照

Ⅰ層は現代の水田耕作土である。Ⅰ層上面が調査時点での地表面である。厚さは 0.1 ～ 0.2 m。調査地は南北に長い水田三枚が東西に並んでおり、東から西に向かって標高が段々に低くなる地形である。Ⅰ層上面の標高は 1 トレンチが約 78.3 m、2 トレンチが約 78.5 mである。

Ⅱ層は中世以降の耕作層であり、調査区全体に広がっている。いわゆる素掘り耕作溝はこの下層部分にあたる。厚さは 0.15 ～ 0.25 m。灰色・黄灰色系の粘質土である。須恵器・土師器・瓦器・瓦などが出土する。これらの遺物の多くは下層の藤原京期遺構に由来するもので、Ⅱ層の詳細な時期を特定することは難しい。

Ⅲ層は藤原京の整地層である。調査区全域に広がっている。Ⅲ層上面が遺構の検出面である。上面の標高は 1 トレンチが 77.9 ～ 78.0 m、2 トレンチが 78.10 ～ 78.15 mである。いずれも現地表面（水田上面）から 0.3 ～ 0.4 mの深さである。Ⅲ層の厚さは 1 トレンチで 0.25 ～ 0.40 m、2 トレンチで 0.15 ～ 0.60 mである。2 トレンチでは下層の地山面（Ⅴ層上面）の標高が北側ほど高くなっており、それにともなって整地層の厚さは北側ほど薄くなっている。整地層上面は後世の耕作によって削平を受けており、当初の厚さはこれ以上であったと考えられる。

整地層は褐灰色・灰褐色・灰黄褐色系の粘質土および砂質土の混合からなる。いずれも粘土のブロックや少量の炭化物を含む。下層はシルト質、あるいは粘土質が強い。全体に上層のほうが堅く締まりがいい土質である傾向をもつ。各層は厚さ 0.05 ～ 0.20 mの単位で盛られている。両調査区とも土層の堆積状況から、南から北に向かって順に土が盛られたことがうかがえる。整地層およびその上面の遺構からは須恵器・土師器・瓦などの遺物が出土している。とくに瓦は多量である。遺物の出土量は上層が特に多いが、下層からも一定量出土している。出土遺物からは整地層内での時期差は見出し難い。瓦は盛土を施す際に周辺部にあったものを投棄したと考えられる。1 トレンチ南半部では瓦が面的に広がって出土している場所が存在する（図版 2 中段左。12 層上面での検出）。

Ⅳ層は古墳時代後期の堆積層である。1 トレンチの中央部付近に見られる灰黄褐色・青灰色の微砂質粘土層である。厚さは最大 0.35 mである。古墳時代後期の土師器・須恵器が数点出土している。

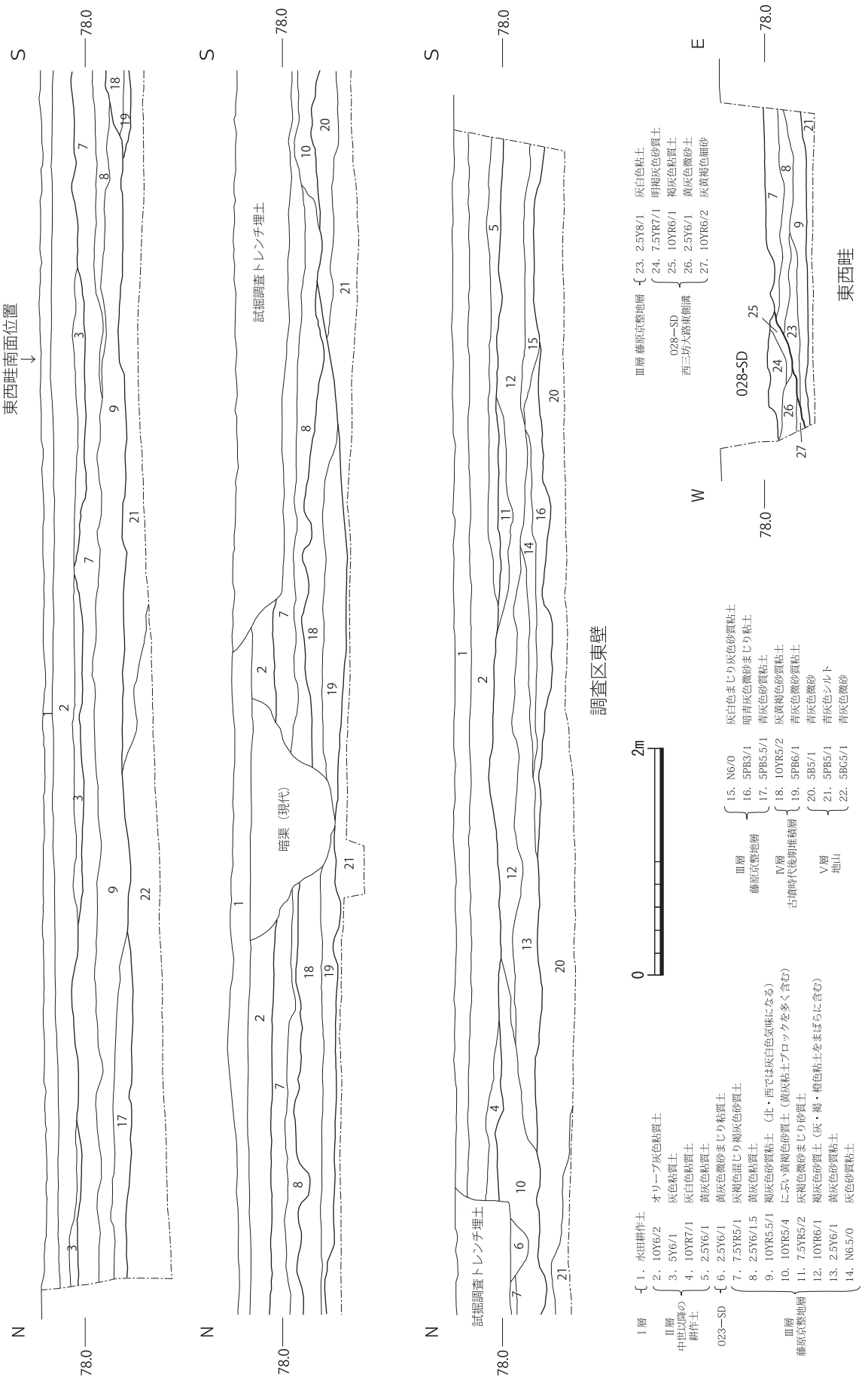
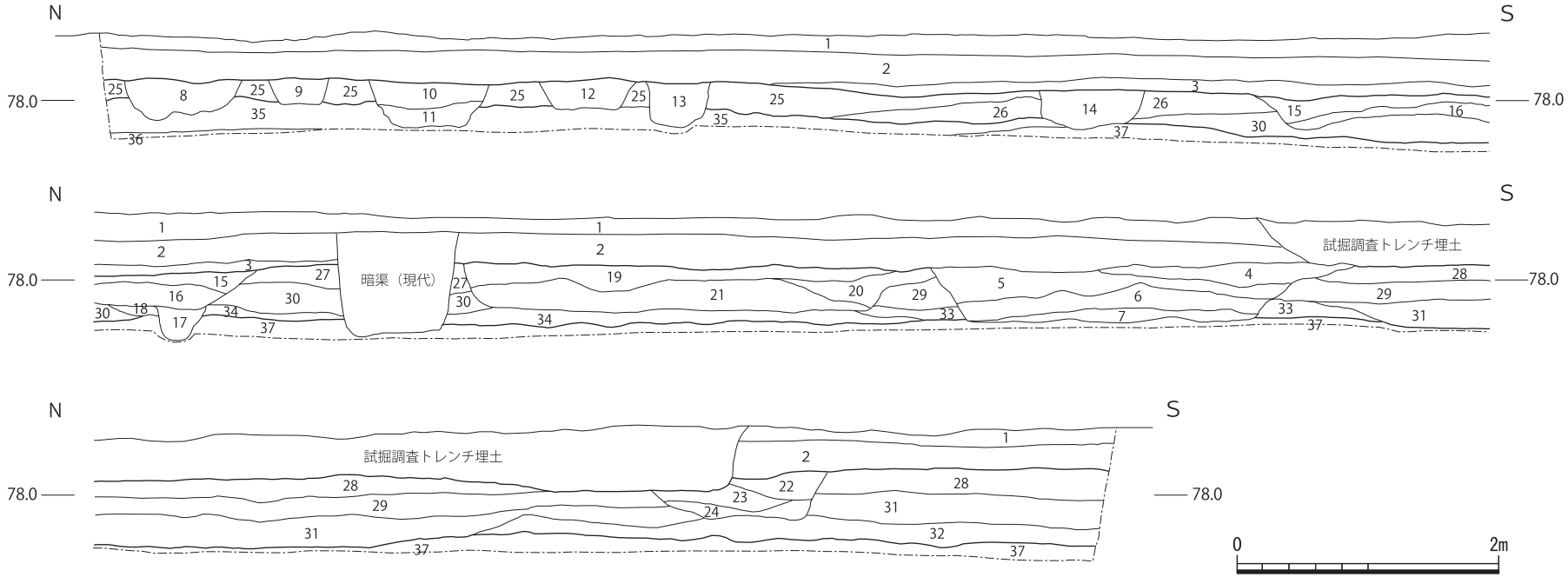
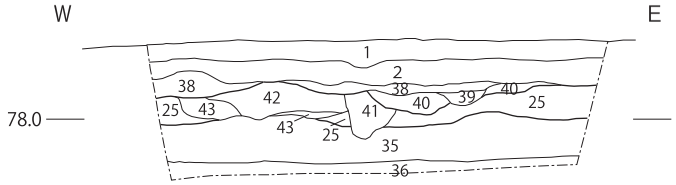


図５　１トレンチ調査区東壁・東西畦 土層断面（Ｓ＝1/50）



調査区東壁



調査区北壁

Ⅰ層
1．水田耕作土

Ⅱ層
2．7.5Y5/3　灰オリーブ色砂質土
3．7.5Y5/1　灰色粘質土

027－SD
4．10YR6/1　褐灰色砂質土
5．10YR6/1　褐灰色粘質土　（炭化物をまばらに含む）
6．10YR6/1　褐灰色微砂質土　（にぶい黄橙色粘土ブロック混じり）
7．7.5YR7/1　明褐灰色粘質土　（にぶい黄橙色粘土ブロック混じり）

044－SD
8．7.5YR5/1　褐灰色砂質土　（灰黄褐色粘土ブロックをわずかに含む）

043－SD
9．2.5Y5/1　黄灰色砂質粘土

058－SD
10．10YR5/1.5　褐灰色砂質土
11．10YR6/2　褐灰色粘土まじり灰黄褐色粘質土

042－SD
12．7.5YR5/1　褐灰色砂質粘質土　（炭化物をまばらに含む）

041－SD
13．7.5YR5/1　褐灰色粘質土　（炭化物をまばらに含む）

050－SD
14．10YR5/1　褐色まじり褐灰色砂質土　（炭化物をまばらに含む）

040－SD
15．2.5Y5/2　暗灰黄色微砂質土
16．2.5Y4.5/2　暗灰黄色微砂　（黄灰色粘土ブロックをまばらに含む）

047－SD
17．5B5/1　青灰色粘質土
18．10YR3/1　灰褐色まじり黒褐色粘質土

039－SX
19．7.5YR3.5/1　褐灰色砂質土

039－SX
20．10YR5/1　褐灰色砂質土
21．7.5YR5/6　明褐色細砂混じり粘土　（粘土ブロックを含む）

036－SD
22．10YR5/2　灰黄褐色砂質土
23．10YR5/1　褐灰色粘質土　（炭化物をわずかに含む）
24．5Y6/1　灰色シルト質土

Ⅲ層
藤原京
整地層
25．10YR5/1.5　褐灰色粘質土　（にぶい褐色粘土ブロックをまばらに含む）
26．10YR5/1.5　褐灰色砂質土　（にぶい褐色粘土ブロックをまばらに含む）
27．10YR4/1　褐灰色砂質粘土
28．7.5YR4.5/1　褐灰色砂質土　（褐灰色粘土ブロックを含む）
29．10YR5/1　褐灰色粘質土
30．10YR5/2　灰黄褐色微砂質土　（黄橙色粘土ブロックをわずかに含む）
31．10YR4/1　褐灰色粘質土　（褐色微砂混じり）
32．2.5Y5/1　黄灰色粘質土　（同色微砂混じり）
33．7.5YR5/2　灰褐色微砂土
34．N4/0　灰色シルト質粘土

Ⅴ層
地山
35．10YR6/4　にぶい黄橙色土
36．10YR5/1　褐灰色シルト質粘土
37．5B4.5/1　青灰色微砂～シルト

中世耕作溝
38．5Y6/1　灰色粘質土
39．5Y6/2　灰オリーブ色粘質土
40．2.5Y6/1　黄灰色粘質土

045－SD
41．10YR4.5/1　褐灰色砂質土

046－SD
42．10YR5/1　褐灰色砂質土
43．10YR5/1　褐灰色粘質土

図6　2トレンチ調査区東壁・北壁 土層断面（S＝1/50）

Ⅴ層は地山層である。堆積時期は古墳時代以前であると考えられる。遺物は出土しない。1トレンチのⅤ層は青灰色のシルト・微砂層からなる。上面の標高は 77.5 ～ 77.6 mである。微砂層は湧水量が多い。1 トレンチのⅤ層は河川堆積層であると考えられる。Ⅳ層はこの河川堆積の最終段階の堆積層である可能性が考えられる。2 トレンチのⅤ層は青灰色の微砂～シルト（下層）および、にぶい黄橙色土からなる。上面の標高は 77.6 ～ 77.9 mであり、北側ほど高い。Ⅴ層内でも上層のにぶい黄橙色土（図 6 - 35 層）は 2 トレンチ北端部付近のみに存在し、Ⅴ層中では唯一安定した地盤を形成する土質である。地山面ではこの一帯のみが微高地状になる。現在の地形においても、東の丘陵から張り出した微高地が調査地の北東に存在している。下層の微砂～シルト層は 1 トレンチのⅤ層と同様の河川堆積層であると考えられるが、両者の時期的な関係は不明である。

第 3 節　遺構

調査は 1 トレンチと 2 トレンチを併行して進めた。遺構番号は両調査区での通し番号で、概ね検出順に番号を付与している。以下に調査区ごとにその内容を述べる。

1トレンチ

1 トレンチの遺構は中世と藤原京期の二時期に分かれる。いずれもⅢ層上面から掘り込まれた遺構である。図 7 では中世以降の遺構を上層遺構、藤原京期の遺構を下層遺構として分けて図示している。以下に時期ごとにその詳細を述べる。なお、調査区中央部および北西隅に存在する撹乱溝はそれぞれ現代の暗渠によるものである。

Ⅲ層上面での調査を終え、調査区全体でⅢ層を掘削した後にⅣ層およびⅤ層の上面で遺構検出作業を行ったが、遺構は存在しなかった。

○ 中世

耕作溝と溝 1 条がある。

耕作溝

いわゆる素掘り耕作溝である。いずれも南北方向の溝である。方位は北でやや東に振れる。幅 0.2 m前後の規模が主である。深さは最大でも 0.1 m未満であり、残存状況は悪い。調査区の南端部一帯には耕作溝が存在していないが、これは耕作溝よりも新しい時期の耕作層がやや深い位置にまで広く及んでいるためである。耕作溝からは須恵器・土師器・瓦器・瓦が出土している。出土量は瓦がもっとも多く、次いで須恵器・土師器が多いが、これらの多くは遺構基盤層であるⅢ層（藤原京整地層）に由来するものである。耕作溝の時期を示す遺物としては瓦器が挙げられるが、小片が数点出土しているのみで詳細な時期は不明である。023 - SD との前後関係から、13 世紀以降の遺構であると考えられる。

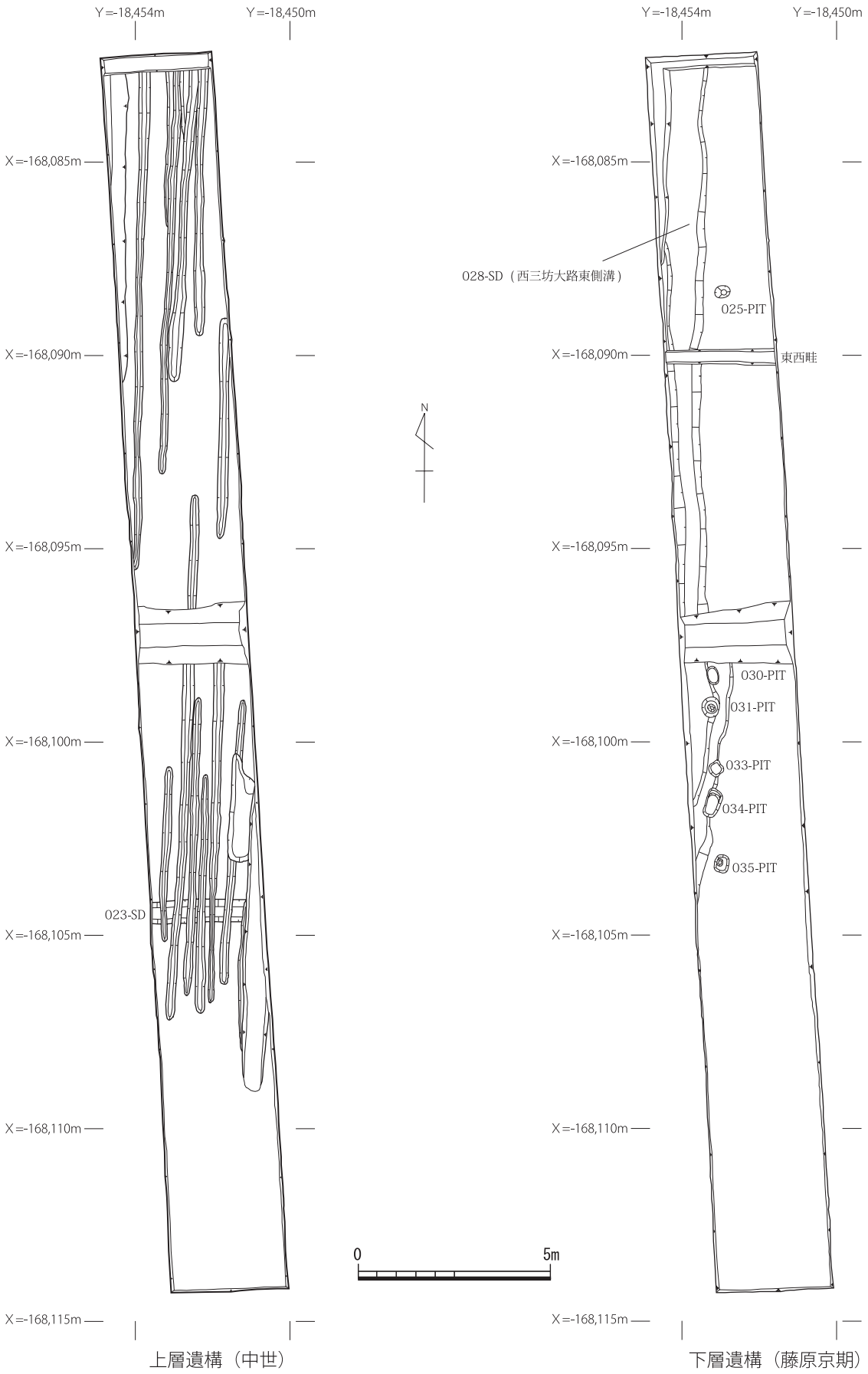


図７　１トレンチ 遺構平面図（S＝1/150）

溝（023‐SD）

023‐SD は幅約 0.6 m、深さ約 0.2 mを測る東西方向の溝である。耕作溝よりも古い遺構である。断面の形状はやや外にひらくU字状を呈する。瓦器と瓦が出土している。瓦の中には軒丸瓦（60）が含まれる。出土した瓦器から、13 世紀頃の遺構であると考えられる。

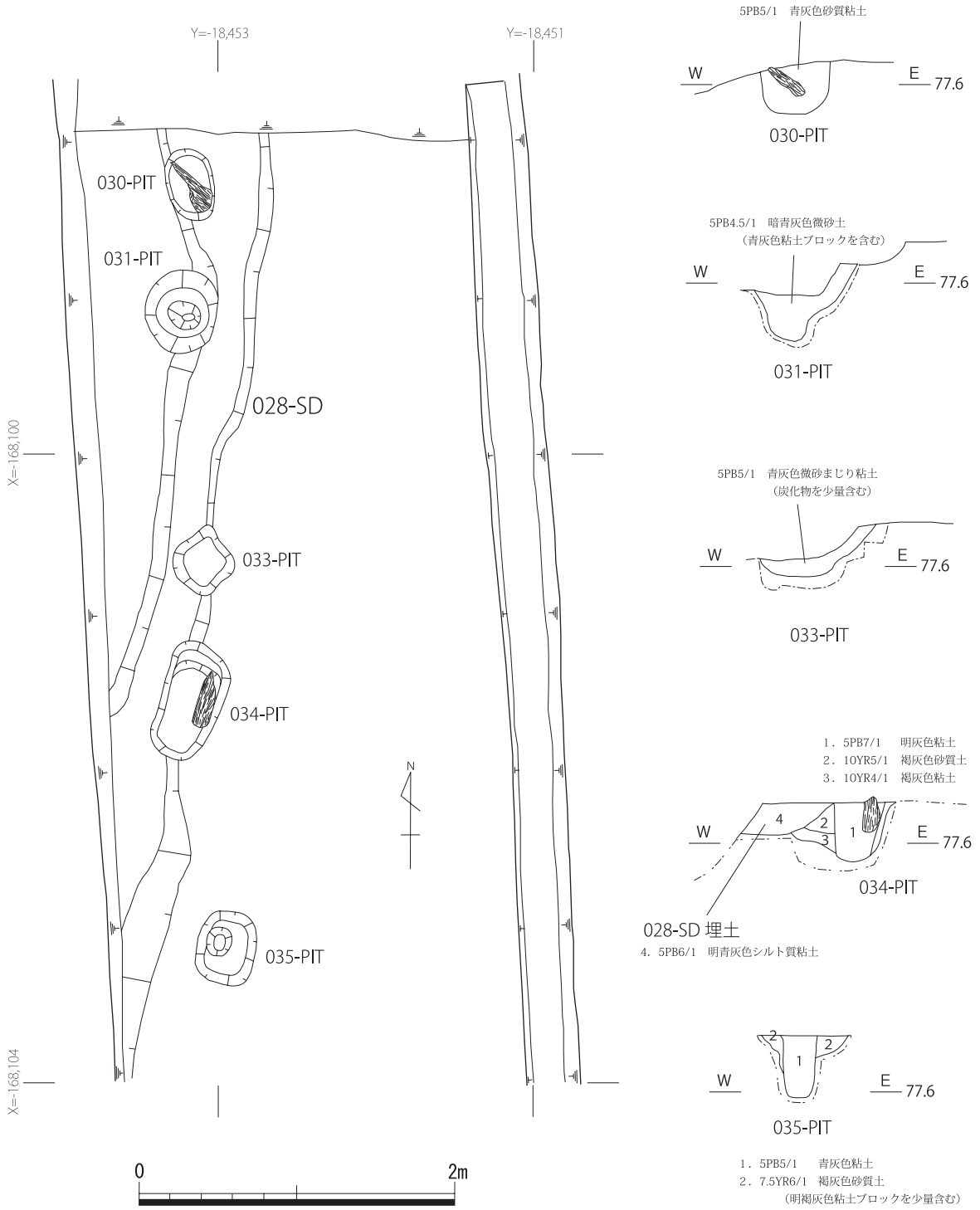


図８　1 トレンチ 028-SD 南半部　ピット 平面・断面図（平面：S ＝ 1/40、断面：S ＝ 1/20）

○ 藤原京期

南北溝１条とピット６基がある。

南北溝（028‐SD）

028‐SD は調査区西端で検出した南北方向の溝である。検出幅約 1.3 m、検出長 21.8 m、深さ約 0.25 mを測る。溝の西側は現代の暗渠によって破壊されており、本来の規模は不明である。溝の東肩ラインはわずかに蛇行し、南端付近は東に 0.5 mほど浅く膨れる。断面の形状は幅広のＵ字状で、南半部では中央部が一段低くなる。

藤原京期の須恵器・土師器が出土している。須恵器には「京」の字（※「口」が「日」となる異字体）が墨書された皿の破片を含む。その他、Ⅲ層（整地層）に由来する瓦も出土している。

028‐SD は出土遺物および検出位置（詳細は第Ⅳ章で述べる）から、藤原京西三坊大路の東側溝であると考えられる。

ピット（025・030・031・033・034・035‐PIT）

調査区北部で１基、中央部で５基、合計６基のピットがある。

025‐PIT は調査区北半で検出した直径約 0.35 m、深さ約 0.4 mの円形ピットである。周辺に同様のピットは見られず、単独で存在している。

030・031・033・034・035‐PIT は調査区中央で検出している（図 8）。これらのピットは 028‐SD の東肩付近に南北に並ぶ。ピットの形状は円形、楕円形、隅丸方形などそれぞれ異なる。平面形は約 0.4 m前後の規模が主である。030・034‐PIT には幅約 0.1 ～ 0.15 m、厚さ約３㎝の小板材が大きく傾いた状態で遺存する。溝の外に位置する 035‐PIT を除くと、いずれもピット内の埋土は 028‐SD の最終堆積よりも古いことを確認している。ただし 030・034‐PIT の板材先端はわずかに 028‐SD 内に突き出した状態で出土している。おそらくこれらのピットと 028‐SD は同時期に存在していたものと考えられる。道路側溝に関わる何らかの施設であった可能性が考えられるが、詳細は不明である。

２トレンチ

２トレンチの遺構は中世と藤原京期の二時期に分かれる。いずれもⅢ層上面から掘り込まれた遺構である。図９では中世の遺構を上層遺構、藤原京期の遺構を下層遺構として分けて図示している。以下に時期ごとにその詳細を述べる。なお、調査区中央部に存在する東西方向の撹乱溝は現代の土管を伴う暗渠である。１トレンチ中央の暗渠と一連のものであると考えられる。

○ 中世

耕作溝と溝１条がある。

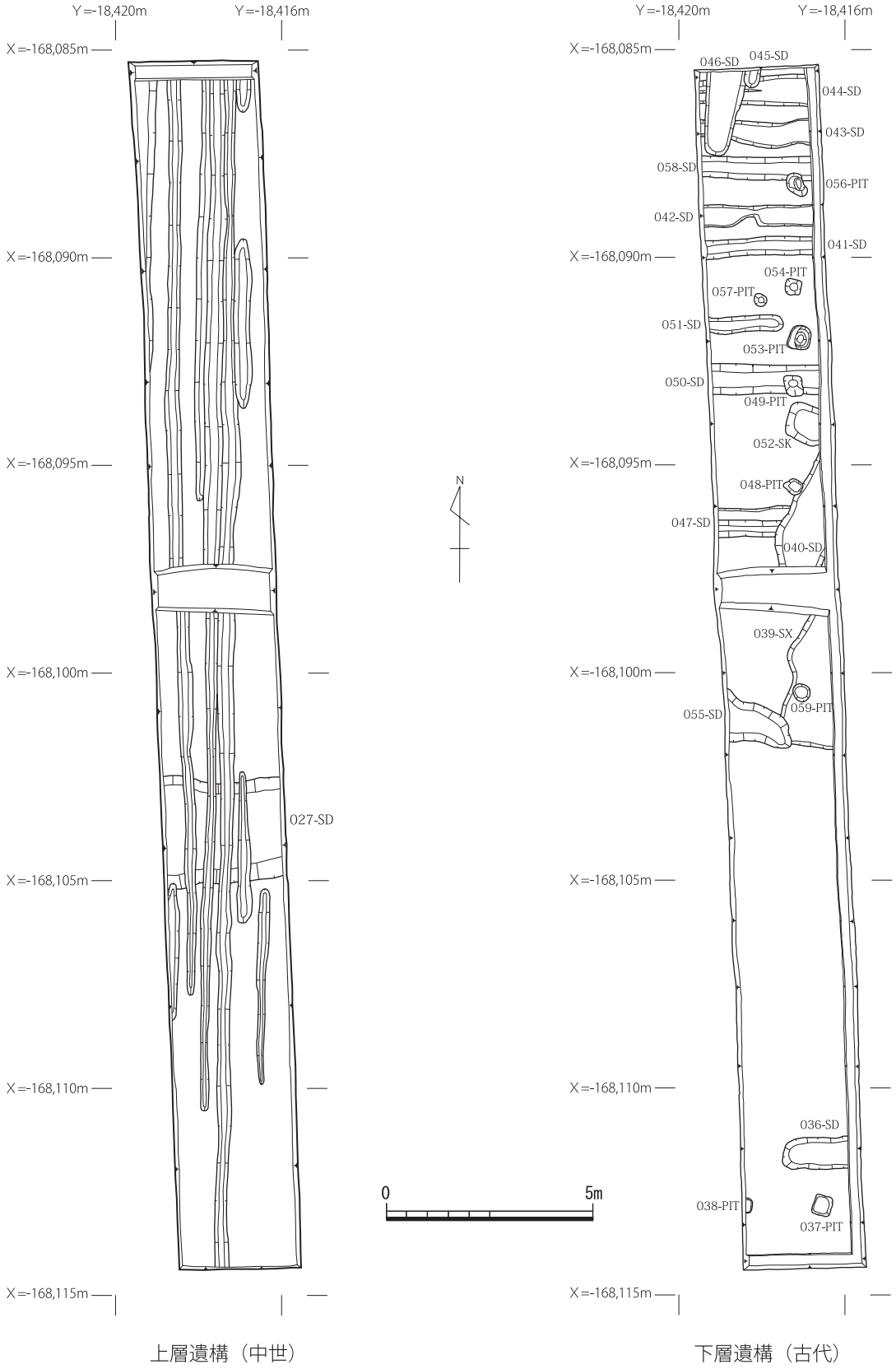


図９　２トレンチ 遺構平面図（S＝1/150）

耕作溝

いわゆる素掘り耕作溝である。ほぼ正方位を志向して掘られる。幅 0.2 ～ 0.3 m前後の規模が主である。深さは最大で約 0.15 mであり、1 トレンチの耕作溝と比較してやや残存状況が良い。1 トレンチと同様、耕作溝からは須恵器・土師器・瓦器・瓦が出土している。中世以降の遺構であると考えられるが、詳細な時期は不明である。埋土は 1 トレンチの耕作溝とほぼ同様であり、時期も近いと考えられる。

溝（027 - SD）

027 - SD は幅約 2.7 m、深さ約 0.45 mを測る東西方向の溝である。耕作溝よりも古い時期の遺構である。断面形は底面が平坦で幅広いU字状である。埋土の下層には粘土ブロックが多く含まれ、人為的に埋められたと考えられる。

出土遺物には土師器羽釜、鞴羽口、石錘がある。耕作溝や古代の遺構からは遺構基盤層であるⅢ層（整地層）中に含まれる瓦の破片が出土することが多いが、027 - SD からは瓦が出土していない。遺構の規模を考慮すると、溝の利用時および埋め戻し時に瓦を取り除いている可能性が高い。

○ 古代

溝 13 条、土坑 1 基、ピット 9 基、落ち込み 1 基がある。これらの遺構の一部は埋土の共通性からⅢ層上面での検出が困難であった。そのため、Ⅲ層をある程度掘り下げた段階で再検出作業を行っている。遺構は調査区の北半部を中心に存在する。

これらの遺構は藤原京期以降、中世よりも古い時期の遺構である。埋土の状況や出土する破片資料などから、藤原京期をはじめとする古代の遺構である可能性が高いが、詳細な時期は不明なものが多い。

溝（036・040 ～ 047・050・051・055・058 - SD）

溝は 13 条ある。うち 8 条は調査区北半部に位置する東西方向の溝である。これらの東西溝は他の溝やピットより古い遺構である。

036 - SD は調査区南端に位置する、上幅約 1.2 m、下幅約 0.7 m、深さ約 0.35 m、断面U字状の東西溝である。溝の底面には若干の凹凸が見られる。底面から土師器の大型の坏が出土している（図版 4 下段右、図 14 - 33）。8 世紀代の遺構であると考えられる。

040 - SD は調査区中央に位置する、東西 047 - SD より新しい遺構である。北東－南西方向にのびる、深さ最大約 0.25 mの浅い落ち込み状の溝である。溝の底部は北東側がやや浅い。古代の須恵器および瓦が出土している。

041 ～ 044・050・051・058 - SD は調査区の北半部に位置する東西方向の溝である。溝の規模は幅約 0.5 ～ 1.0 m、深さ約 0.2 ～ 0.35 mを測る。断面の形状は底面が平坦なU字形を呈するものが主である。いずれの溝も埋土はⅢ層（整地層）と非常によく似ており、Ⅲ層

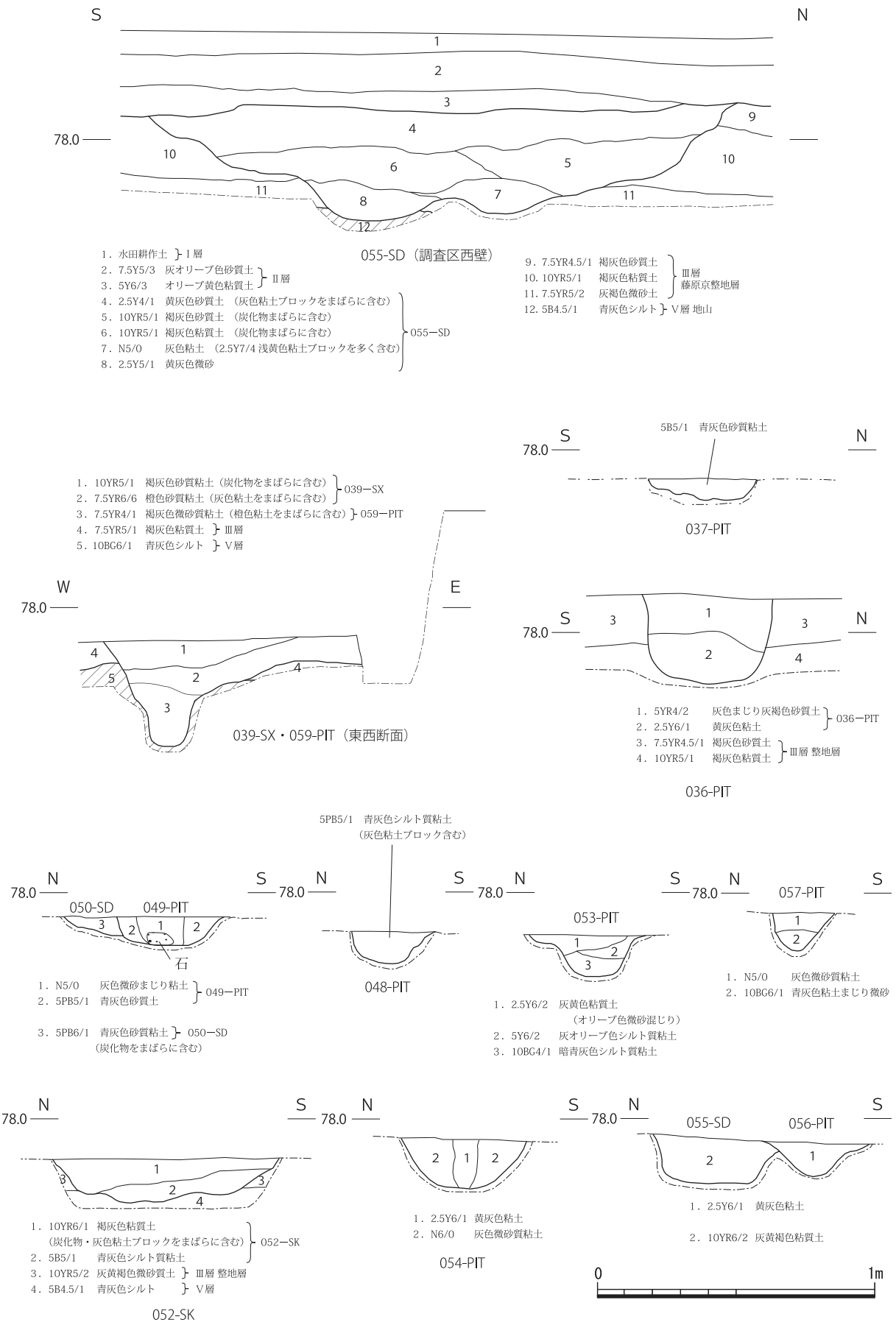


図 10　2 トレンチ遺構断面図（S ＝ 1/20）

をある程度除去した段階で検出できたものが多い。これらの溝は同様の形状をもち、数十㎝間隔で併走しているが、溝同士の関係は不明である。051‐SDのみは調査区内で東端を確認している。これらの東西溝からは須恵器・土師器・瓦が出土している。

045・046‐SDは調査区北端に位置する南北方向の溝である。いずれも東西方向の溝よりも新しい。また、045より046のほうが新しい遺構である。045‐SDは幅約0.3 m、深さ約0.3 mを測る。土師器・瓦の小片が出土している。046‐SDは幅約1.1 m、深さ約0.2 mを測る。藤原京期の須恵器蓋が出土している（図11‐4）。

047‐SDは調査区の中央部、040‐SD下で検出した東西溝である。幅約0.7 m、深さ約0.5 mを測る。溝の北半は一段浅くなっている。瓦が出土している。

055‐SDは調査区中央部に位置する溝である。埋土がⅢ層と酷似しており、Ⅲ層を約0.2 m除去した段階で遺構を検出している。そのため、遺構上半部の状況は調査区西壁の土層断面観察による（図10上）。溝の上幅は約2.1 m、深さは約0.4 m、断面の形状は小さな段をもつ緩やかなV字状を呈する。須恵器・土師器・瓦が出土している。瓦には軒丸瓦が含まれる。

土坑（052‐SK）

調査区北半部に位置する隅丸方形の土坑である。一辺約0.8 m、深さ約0.2 mを測る。古代と考えられる土師器の細片が出土している。

ピット（037・038・048・049・053・054・056・057・059‐PIT）

037・038‐PITは調査区の南端に位置し、一辺約0.4 mの方形のピットである。2基は東西に並ぶ。037‐PITは整地層除去後に検出しており、上部の状況は不明であるが底面高や形状が038‐PITと類似しており、一連の柱穴である可能性が考えられる。

048・049・053・054・056・057‐PITは調査区北半に位置する。うち049・056‐PITは東西溝よりも新しい遺構である。ピットの直径は約0.4 ～ 0.5 mである。057‐PITを除く5基はほぼ南北に並んでいる。このうち048・049・054・056の4基は約2.4 m間隔で並んでおり、一連の構造物である可能性が考えられる。049‐PITの底面には礎板と考えられる直径約10㎝の平たい石が残されている。

059-PITは039-SX底面西側で検出した直径約0.3mの円形ピットである。039-SXの埋土は059-PITに向かって全体に落ちくぼんでいる。

落ち込み（039‐SX）

調査区中央部に位置する南北約3.2 m、東西約1.4 m、深さ約0.3 mの用途不明の落ち込みである。断面の形状は底部が広いU字状を呈する。落ち込みは人為的に埋められている。西端部分には1ヶ所、ピット状に落ちくぼむ部分が存在する。古代に属すと考えられる須恵器・土師器・瓦が出土しているが、詳細な時期は不明である。

第４節　遺物

出土した遺物には土器（須恵器・土師器・弥生土器・瓦器）、土製品（土馬・土錘・鞴羽口）、石製品（石錘）、瓦がある。出土量はコンテナ約 75 箱分である。その大半を瓦が占める。

遺構別では、整地層（Ⅲ層）からの出土が最も多い。他の遺構からの出土遺物にも、整地層を掘り返したことによって混ざり込んだと考えられる遺物が多い。なお、古代に属すと考えられる遺構は埋土が整地層と非常によく似ており、整地層を若干掘り下げた後に検出できた遺構も存在する。そのため、整地層出土として取り上げた遺物の中には、本来これらの遺構に由来する遺物が混入している可能性を有している。

ここでは遺物種ごとにその詳細を述べる。出土遺構・層位についてはその都度触れることとする。

土器

須恵器（図 1－1 ～ 7、図 2－8 ～ 20、図 3－21 ～ 30）

1・2 は 1 トレンチ 028 - SD からの出土である。1 は蓋である。形状は全体に大きく歪んでいる。口縁直径 10.5 ㎝、高さ 2.8 ㎝。つまみの頂部は丸みを帯び、頸部がわずかにくびれる。外面上半に反時計回りの回転ヘラケズリを施し、他はナデ調整で仕上げる。断面三角形の小さなかえりがつく。2 は厚さ約 0.5 ㎝の平らな破片である。坏ないし皿の底部であると考えられる。外面に「京」の字（※「口」が「日」となる異字体）が墨書されている。字の大きさは縦 2.5 ㎝・横 1.5 ㎝である。外面（墨書面）はやや粗いケズリ、内面はナデ調整を施す。

3 は 2 トレンチ 046 - SD から出土した蓋である。口縁直径 21.8 ㎝、高さ 2.4 ㎝を測る。頂部はほぼ平坦で、中央がややくぼむ。扁平なつまみをもつ。つまみは内部が全体にくぼみ、中心部がわずかに隆起する。外面は反時計回りのヘラケズリの後、回転ナデで仕上げる。中心部付近にはヘラケズリによる礫の移動による深い溝が明瞭に残る。

4 は 2 トレンチ 055 - SD から出土した蓋である。復元口縁直径は 18.0 ㎝である。断面三角形のかえりをもつ。

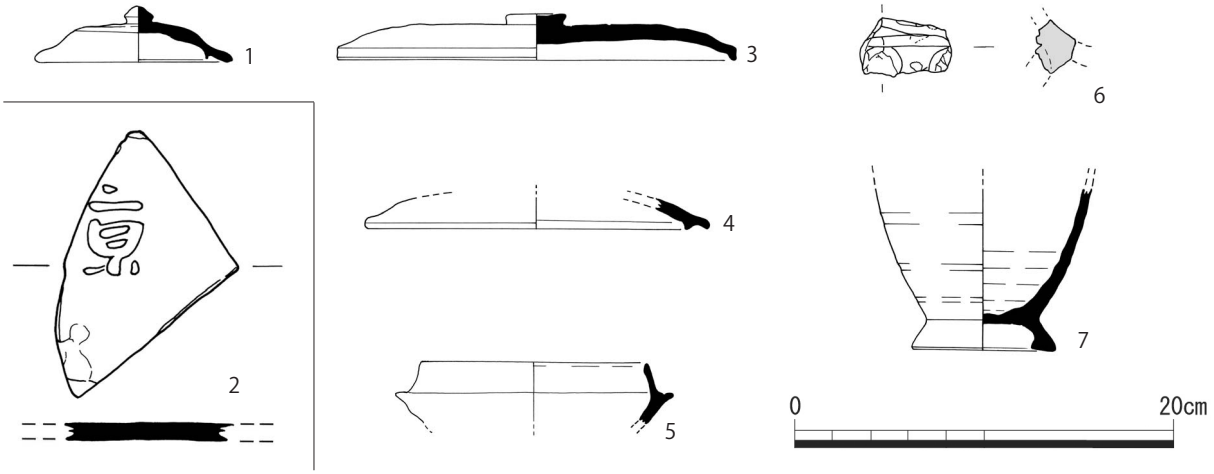


図 11　1・2 トレンチ 遺構出土　須恵器（Ｓ＝ 1/4。2 のみ Ｓ＝ 1/2）

5は1トレンチⅣ層から出土した坏身である。口縁端部は内側にわずかに稜をもつ。時期は6世紀前半であると考えられる。Ⅳ層からは6世紀代と考えられる須恵器の小片が数点出土している。

6は2トレンチⅡ層（中世耕作層）から出土した硯の破片である。脚部の上端と考えられる丸い突起が1.8㎝間隔で左右に並んで貼り付けられている。蹄脚硯である可能性が考えられる。

7は1トレンチ耕作溝から出土した高台付の壺の底部である。高台は下半が断面三角形にひらき、幅広の底面をもつ。高台外面には部分的に自然釉が付着している。縦長の体部をもつ。体部は内外面を回転ナデ調整で仕上げており、ナデによる段が内外面に残る。

8～20は1トレンチⅢ層（整地層）からの出土である。8は瓶類の口縁部である。外面口縁部下には沈線が巡る。内面には口縁部と体部の接合痕が残る。9は壺の口縁部である。口縁部は外反して上半が大きくひらく。口縁端部は外側に幅広の面をもたせる。内面には多量の漆が付着する（図版6右上）。漆は厚く層をなしており、下半部は塊状になっている。漆は下端の破面にも付着しており、破片状態で漏斗のように用いていたことがうかがえる。漆の中には少量の草も混入している。10は蓋である。復元口縁直径は11.2㎝である。外面上部には反時計回りの回転ヘラケズリを施す。11は小型の壺である。外傾する短い口縁部をもち、口縁端部はやや鋭くおさめる。口縁部と体部の境界はなだらかで、器面は内外面とも丁寧なナデ調整で仕上げる。12は高台をもつ壺の底部である。高台断面形が底面のやや狭い台形状を呈する。高台は体部に粘土紐を付け足して作られており、外面にその接合痕が明瞭に残る。13は小型の平底の坏である。口縁端部はわずかに外側に折り返す。全体にナデ調整を施すが、仕上げはあまく、ケズリの痕跡や余剰粘土が器面に残る。14は蓋である。頂部は平坦で、中心部が上方に高く突出する扁平なつまみをもつ。外面には反時計回りの回転ヘラケズリを施す。15は蓋である。中央部がややくぼむ平坦な頂部をもち、中心から約5㎝外に下方に折れ曲がる稜をもつ。つまみは14よりも中心部の突起がやや低い。全体にナデ調整を施す。16は皿状の破片である。復元口縁直径は15.4㎝を測る。調査区中央の撹乱溝付近からの出土であり、混入品の可能性がある。17は高台の破片である。高台は高さ約0.8㎝、断面の形状は台形である。18は蓋のつまみである。14・15と同様の扁平なつまみだが、やや肉厚である。19は坏の蓋の破片である。下方に突き出るかえりをもつ。20は把手である。ほぼ平坦な体部に、厚さ0.5～0.7㎝の断面方形の把手を取り付けている。把手はケズリによって外面・側面を平坦に仕上げている。把手の孔の直径

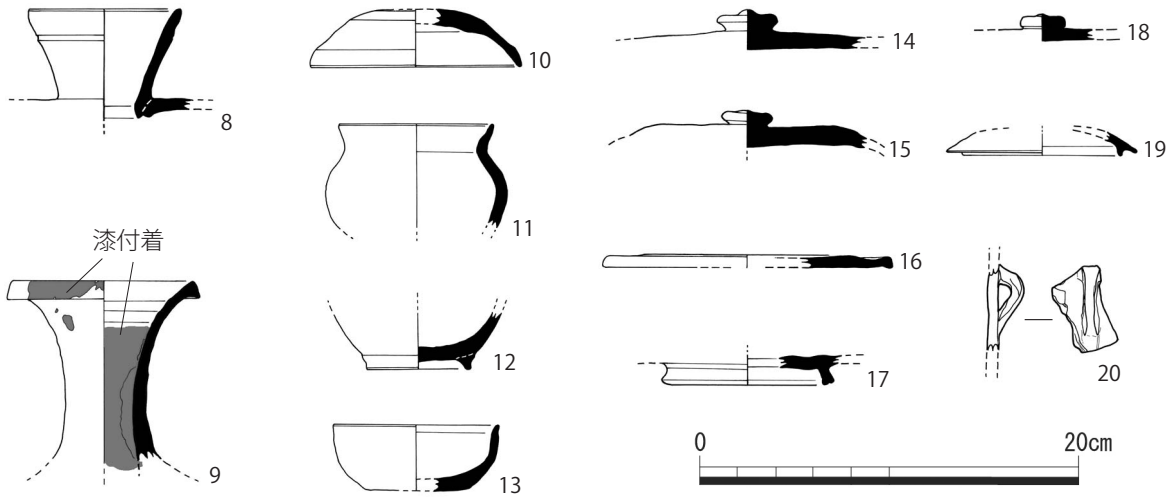
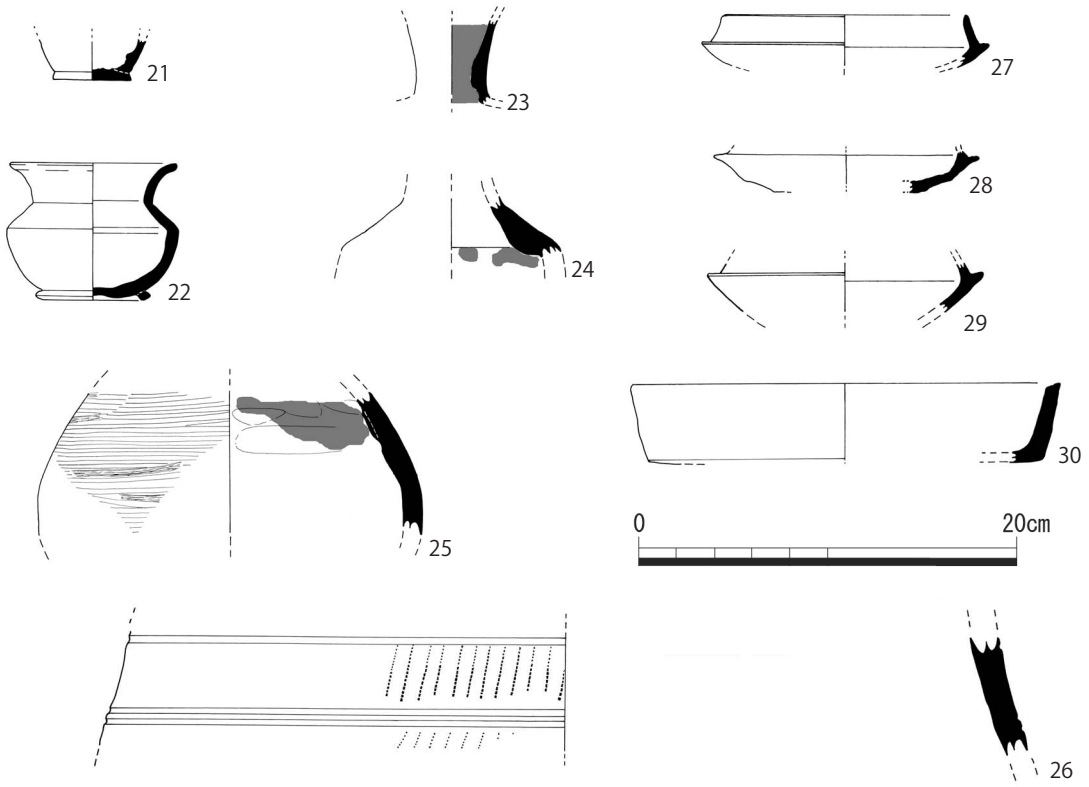


図12　1トレンチⅢ層（整地層）出土　須恵器（S＝1/4）



23 ～ 25 のトーンは漆付着部分

図 13　2 トレンチⅢ層（整地層）出土　須恵器（S ＝ 1/4）

は最大で約 0.6 ㎝である。

21 ～ 30 は 2 トレンチⅢ層（整地層）からの出土である。21 は小型の壺の底部である。底部は直径 4.2 ㎝の円形の平底で、裾が外側に小さくひらく。底部外面には静止糸切り痕が残る。また、底部内面には同心円状の当て具痕がある。内外面ともに底部と体部の接合痕が残る。22 は小型の壺である。古代の遺構が多い調査区北半の整地層上層からの出土であり、本来は整地層上面の遺構に属すものである可能性が高い。肩部に明瞭な稜をもつ体部、外反してひらく口縁部をもつ。高台は断面台形で、やや押し潰れている。内外面とも丁寧なナデ調整で仕上げる。底部中央はやや内側にくぼむ。外面には部分的に自然釉が付着する。23 は壺もしくは瓶類の頸部である。下端部には体部との接合痕が残る。内面全体および外面のごく一部に漆が薄く付着する。24 は壺の肩部であると考えられる。体部内面および上端部の破面に漆が付着する。25 は壺の体部であると考えられる。体部は下膨れの形状であると推測される。外面には横方向の強いハケ調整を施す。内面上半には粘土紐接合の段が残る。内面の上端および隣接する破面には漆が付着する。26 は大型の器台であると考えられる。外面には同一の工具による右上がりの刺突文が横並びになって巡る。同様の文様が沈線を挟んで上・下に存在する。外面の刺突文と沈線内および内面には釉が付着する。時期は古墳時代に遡る可能性が高い。27 は坏身である。内傾して立ち上がる口縁部をもつ。復元口縁直径は 14.2 ㎝である。28・29 は 27 よりも口縁部の内傾の度合いがやや強い坏身である。27 ～ 29 の時期は 6 世紀後半頃であると考えられる。30 は大型の皿であると考えられる。非常に厚手である。復元口縁直径は 22.8 ㎝である。口縁部はわずかに内湾気味に外傾して立ち上がる。端部は平坦面をもち内側に傾斜させる。内外面ともナデ調整で仕上げるが、外面にはわずかにケズリの痕跡が残る。

土師器（図 14－31 ～ 34、図 15－35 ～ 52）

31 は 1 トレンチ 028 - SD から出土した甕の口縁部である。外反気味の口縁部をもち、端部は肥厚させて内側に折り返す。口縁部と体部の境界は内外面ともなだらかである。外面には縦方向の粗いハケ調整を施した後、頸部より上には横方向のナデを施すが、頸部にはハケの痕が部分的に残る。内面にはナデ調整を施す。

32 は 2 トレンチ 027 - SD から出土した土師質の羽釜である。口縁部はわずかに内傾し、端部には平坦面をもたせる。鍔は口縁から約 1.7 ㎝下に取り付く。体部は上端に最大径をもつ砲弾形であると推測される。胎土は 1 ～ 2 ㎜大の礫をまばらに含む。時期は 13 世紀頃であると考えられる。

33 は 2 トレンチ 041 - SD から出土した甕の口縁部である。31 とほぼ同様の形状をもつが、口縁部と体部の境界の稜は 33 の方がやや明瞭である。外面には横方向のナデ調整を施すが、口縁部の一部に縦方向のハケの痕が残る。体部も同様のハケ調整を施していた可能性がある。体部内面には横方向のハケ調整の痕がわずかに残る。ハケの単位は外面より細かい。体部外面には黒斑が残る。

34 は 2 トレンチ 036 - SD の底面から出土した高台をもつ坏である。破片状態で出土したが、ほぼ全体が残っている。口縁直径 21.6 ㎝、底部径 12.0 ㎝、高さ 6.4 ～ 7.7 ㎝を測る。上端のラインはやや傾斜する。口縁部は下半が内湾し、上半は直線的に外傾して立ち上がる。口縁端部は丸く上方に小さく折り返し、内側に線をもつ。高台は裾がやや外側にひらく台形である。底部は中央に向かってわずかにくぼむ。調整は表面の磨滅により不明である。時期は 8 世紀であると考えられる。

35 ～ 45 は 1 トレンチⅢ層（整地層）からの出土である。35 は高坏の脚部である。裾部に向かって外反してひらく短い柱状部をもつ。脚部上半は中実である。柱状部外面には縦方向のケズリの痕が残る。坏底部はわずかに中央がくぼむ。36 は高坏の脚部である。ヘラケズリによって断面七角形に面取りがなされた柱状部をもつ。各面の幅は不均等である。柱状部は上部がやや太い。38 は甕の上半部である。外湾してひらく短い口縁部をもつ。口縁端部は内側に肥厚させ、外面にわずかにくぼむ平坦面をもたせる。体部外面および口縁部内面には斜め方向のハケ調整を施す。口縁部のハケは単位が粗い。外面には全体に煤が付着する。39 は皿である。外反する口縁部をもつ。復元口縁径 10.4 ㎝、高さ 1.8 ㎝である。調整は表面の磨滅により不明である。40 は坏の底部である。丸みを帯びた

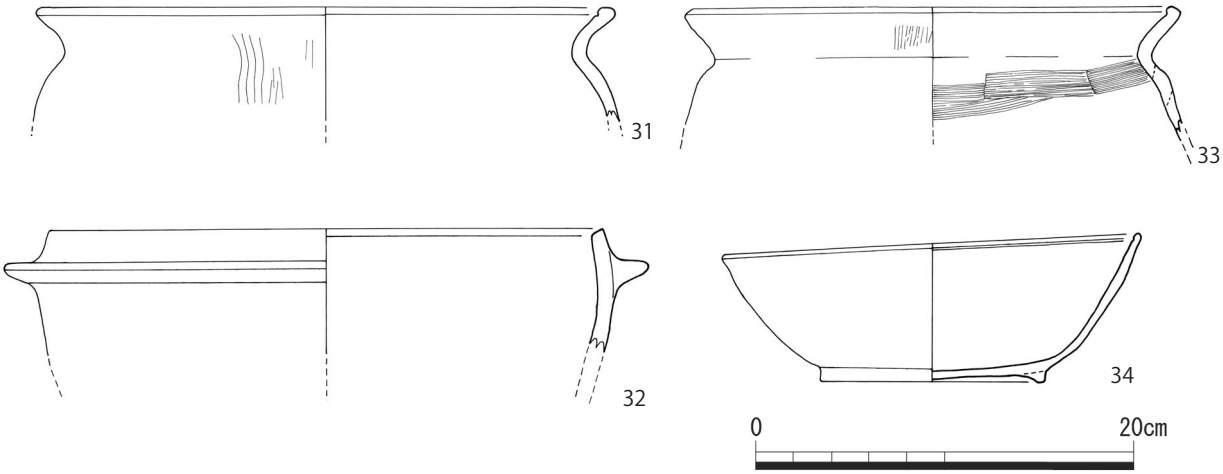


図 14　1・2 トレンチ遺構出土　土師器（S ＝ 1/4）

高さ 0.4 ㎝の高台をもつ。41 は埦の底部である。裾が外側にひらく細長い断面三角形の高台をもつ。37・42 は甑・鍋類の把手である。37 は外側がわずかに上方に立ち上がる形状である。42 は平面形が半円形である。外側が上方に大きく立ち上がる。把手上面には指頭圧痕が明瞭に残る。43 は鉢である。下半部は内湾し、上半部は垂直気味に立ち上がる。口縁端部は外側に小さく折り返し、丸くおさめる。調整は表面の磨滅により不明である。44 は鉢である。形状は弧を描き上部が内側に内傾する。口縁端部には平坦面をもたせる。内外面にミガキを施す。ミガキは外面が横方向、内面が放射状に上下二段である。45 は埦の破片である。復元口径は 19.8 ㎝である。口縁端部は外側に小さく折り返し

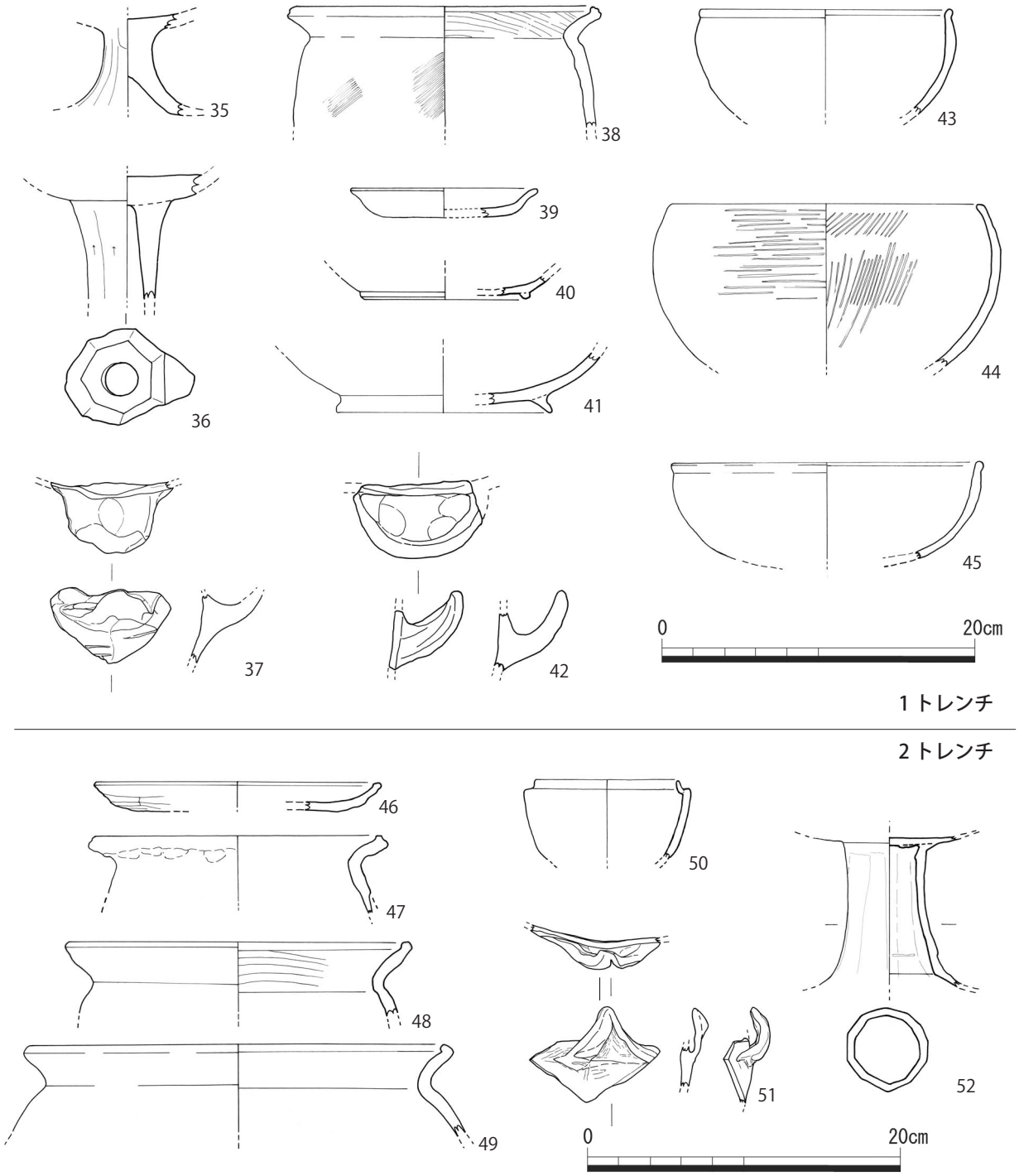


図 15　1・2 トレンチⅢ層（整地層）出土　土師器（S ＝ 1/4）

丸くおさめる。調整は表面の磨滅により不明である。

46 ～ 52 は 2 トレンチⅢ層（整地層）からの出土である。46 は皿の破片である。口縁端部は内側に肥厚させて丸くおさめる。外面には粗いケズリを施す。全体によく焼きしめられており、色調は暗褐色を呈する。47 ～ 49 は甕の口縁部である。47 は外反気味に大きく外にひらく口縁部をもつ。口縁端部は内側に肥厚させ、外面に平坦面をもたせる。口縁部中ほどには粘土紐を継ぎ足した際の指押えの痕跡が残る。体部外面には部分的に煤が付着する。48 は直線的に外傾する口縁部をもつ。端部は内側に肥厚させ丸くおさめる。口縁部内面に単位の大きいハケ調整を施す。49 は外反する口縁部をもち、端部は内側に厚く肥厚して丸くおさめる。口縁部にはやや強めのナデ調整を施し、体部との境を比較的明瞭にしている。50 は蓋受けのような短い口縁部をもつ壺である。口縁端部はやや鋭くまとめる。51 は把手である。厚さ 0.4 ㎝程度の薄い板を垂直に立ち上がらせ、縁辺部を外側に折り返している。側面観は三角形を呈する。体部との接合はハケ調整の後、ナデ調整を用いているが、接合痕は明瞭に残る。52 は高坏の脚部である。柱状部はヘラケズリによる面取りがなされ、断面形は十一角形となる。各面の幅は中段で約 1.0 ～ 1.5 ㎝とばらつきがある。柱状部は下半がわずかに広がり、裾部は屈曲して大きくひらくと考えられる。上部まで中空の脚部に、薄い坏底部を接合している。

弥生土器（図 16－53・54）

53 は 1 トレンチⅢ層（整地層）から出土した甕の底部である。平底で中央部がくぼむ。外面にはハケ調整を施す。内面にはハケ調整を施し、工具の静止痕も残る。54 は 2 トレンチⅢ層（整地層）から出土した甕の底部である。平底で底部は中央が平面半円状にわずかにくぼむ。外面には黒斑がつく。

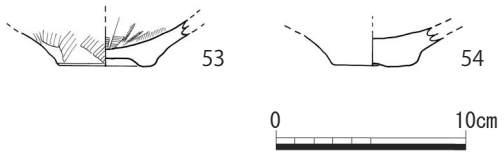


図 16　Ⅲ層（整地層）出土 弥生土器（S ＝ 1/4）

瓦器（図 17－55）

55 は 1 トレンチ 023 - SD から出土した埦である。口径 11.8 ㎝、器高 3.8 ㎝を測る。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は横方向のナデ調整によってわずかに外反する。内面の口縁部下にはわずかに段をもつ。断面三角形のごく小さな高台がつく。内面には横方向のヘラミガキをやや粗く施す。外面は表面の磨滅により調整は不明であるが、指頭圧痕が部分的に残る。時期は 13 世紀であると考えられる。

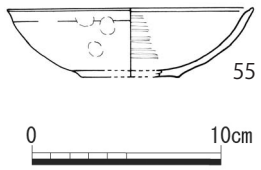


図 17　023-SD 出土瓦器（S ＝ 1/4）

土製品（図 18－56・57・59）

56 は 2 トレンチⅢ層（整地層）から出土した土馬である。頭部・尾部端・右前脚・右後脚・左前脚端・左後脚端を欠く。頸部背面には粘土を引き延ばしてたてがみを作り出す。頸部の断面形は三角形を呈する。背は横方向に強くナデつけてわずかにくぼませる。全体はナデ調整で仕上げる。

57 は 2 トレンチ耕作溝から出土した土錘である。長さ 3.9 ㎝、直径 1.4 ㎝を測る。中ほどが膨ら

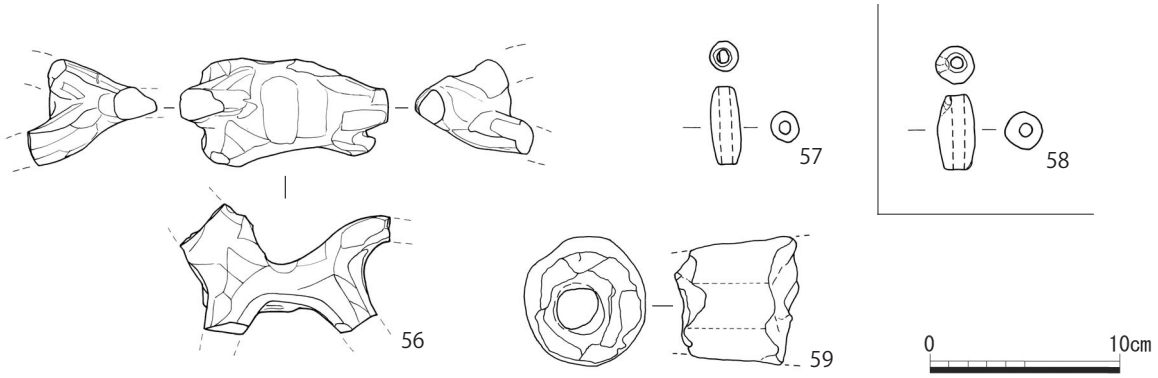


図 18　2 トレンチ出土　土製品・石製品（S ＝ 1/4。58 のみ石製品）

む円柱状で、中心に直径 0.5 ㎝の孔が貫通する。重量は 8.5 g である。

59 は 2 トレンチ 027-SD から出土した鞴の羽口の破片である。先細りの円柱形で、最大径 6.1 ㎝、孔の直径 2.1 ㎝を測る。径が細い側（図の左側）は暗灰色、径が太い側（図の右側）は明赤褐色に変色している。胎土には 1 ～ 2 ㎜大の礫を多く含む。

石製品（図 18－58）

58 は 2 トレンチ 027 - SD から出土した滑石製の石錘である。長さ 3.6 ㎝、直径 1.7 ㎝を測り、57 の土錘と比較してやや寸胴である。中心に直径 0.6 ㎝の孔が貫通する。重量は 12.0 g である。

瓦（図 19 ～ 図 24）

今回の調査では多量の瓦が出土している。数量はコンテナにして約 70 箱、破片の点数にして約 6,000 点を数える。その大半は 1・2 トレンチⅢ層（整地層）からの出土で約 5,200 点を数える。他の遺構から出土した瓦も元々はⅢ層に由来するものである可能性が高い。調査区別の出土量では、1 トレンチⅢ層が約 2,450 点、2 トレンチⅢ層が約 2,750 点と、2 トレンチがわずかに多い。出土した瓦は基本的に凹面に布目の圧痕が残るいわゆる布目瓦である瓦の種類が判別できる破片は約 3,000 点である。

軒丸瓦（図 19－60 ～ 63）

60 ～ 63 は軒丸瓦の瓦当部である。明確に軒丸瓦であると判別できる資料はこの 4 点のみである。

60 は 1 トレンチ 023 - SD から出土した瓦当部である。丸瓦部は失われている。瓦当部は全体の 6 割が遺存する。瓦当文様は複弁八弁蓮華文である。間弁は独立する。中房は 1 ・ 6 の二重に蓮子をおく。蓮子に周環は伴わない。縦の中軸線上に蓮子が 3 つ並ぶ。外区は一重で、外側に向かって低くなる。この部分は瓦当中心部や瓦当裏面と同じ焼成状態であり、本来存在していた外区の粘土が剥離後に焼成された可能性がある。花弁や蓮子には粘土の欠損や皺が見られ、全体に笵型への粘土の押し込みが弱いことがうかがえる。瓦当裏面には粘土の剥離痕が見られる。当該箇所は丸瓦部との接合面の

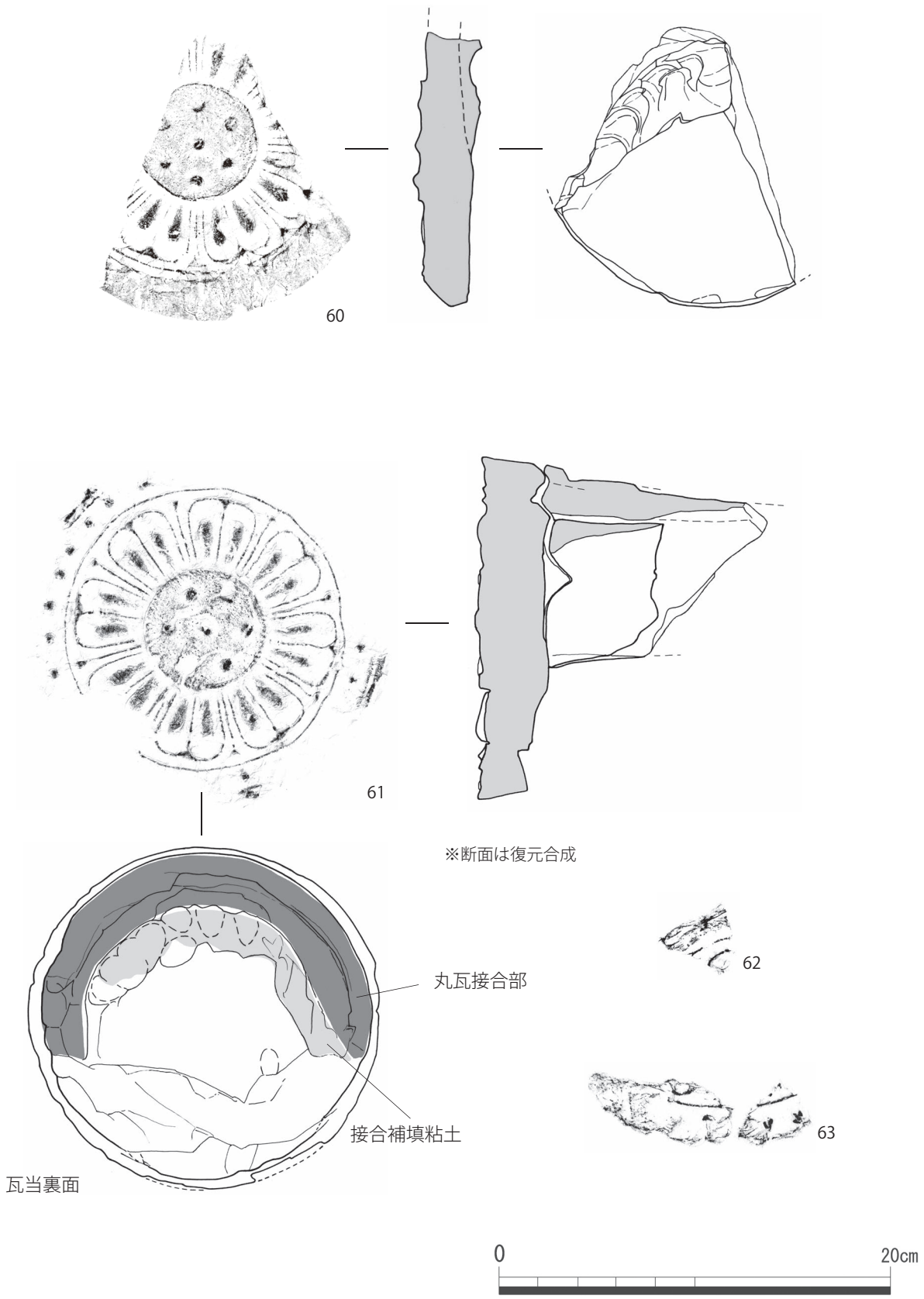


図 19　1・2 トレンチ出土　軒丸瓦（S ＝ 1/3）

やや下に位置し、丸瓦本体を接合した後に下側に粘土を付加して補強を行った部分である可能性が高い。剥離部分には連続して指で押さえつけた痕が残る。粘土を付加した際に上から指で連続して押し込んだ痕であると想定される。

61 は 2 トレンチ 055 - SD からの出土である。瓦当部および丸瓦部との接合部分が残る。瓦当部の直径は 17.6 ㎝を測る。瓦当文様は複弁八弁蓮華文である。間弁は独立する。中房は 1 ・ 6 の二重に蓮子をおく。蓮子に周環は伴わない。中房・花弁の基本的な構成は 60 と同じであるが、60 とは異なり縦の中軸線上に蓮子が並ばず、文様全体が約 30°回転している。外区には直径 0.6 ～ 0.7 ㎝大の珠文が巡る。珠文の数は 40 前後であると推測される。瓦当の向かって右下側は花弁や圏線、珠文に焼成前の潰れ・歪みが目立つ。瓦当部と丸瓦部が剥離した状態で出土しており、瓦当裏面の丸瓦との接合痕が観察できる。丸瓦本体を挟み込む形で上下に粘土を補填して瓦当部との接合を行っている。うち凹面側の補填粘土は剥離した状態で出土している。粘土の貼り付け後に上から押した指の痕が剥離した瓦当裏面にも残る。調整は瓦当側面、特に下半部にはケズリの痕跡が残る。瓦当側面上部には板状の工具を押し付けたような幅 6.0 ㎝、深さ 0.6 ㎝の段が存在する。

62・63 は 2 トレンチⅢ層から出土した瓦当の破片である。62 は複弁部分であると考えられる。63 は複弁および外区の珠文である。62・63 の形状や法量はおおむね 60・61 と同様である。

今回出土した軒丸瓦はいずれも川原寺式に含まれると考えられる。川原寺の創建以降、7 世紀後半

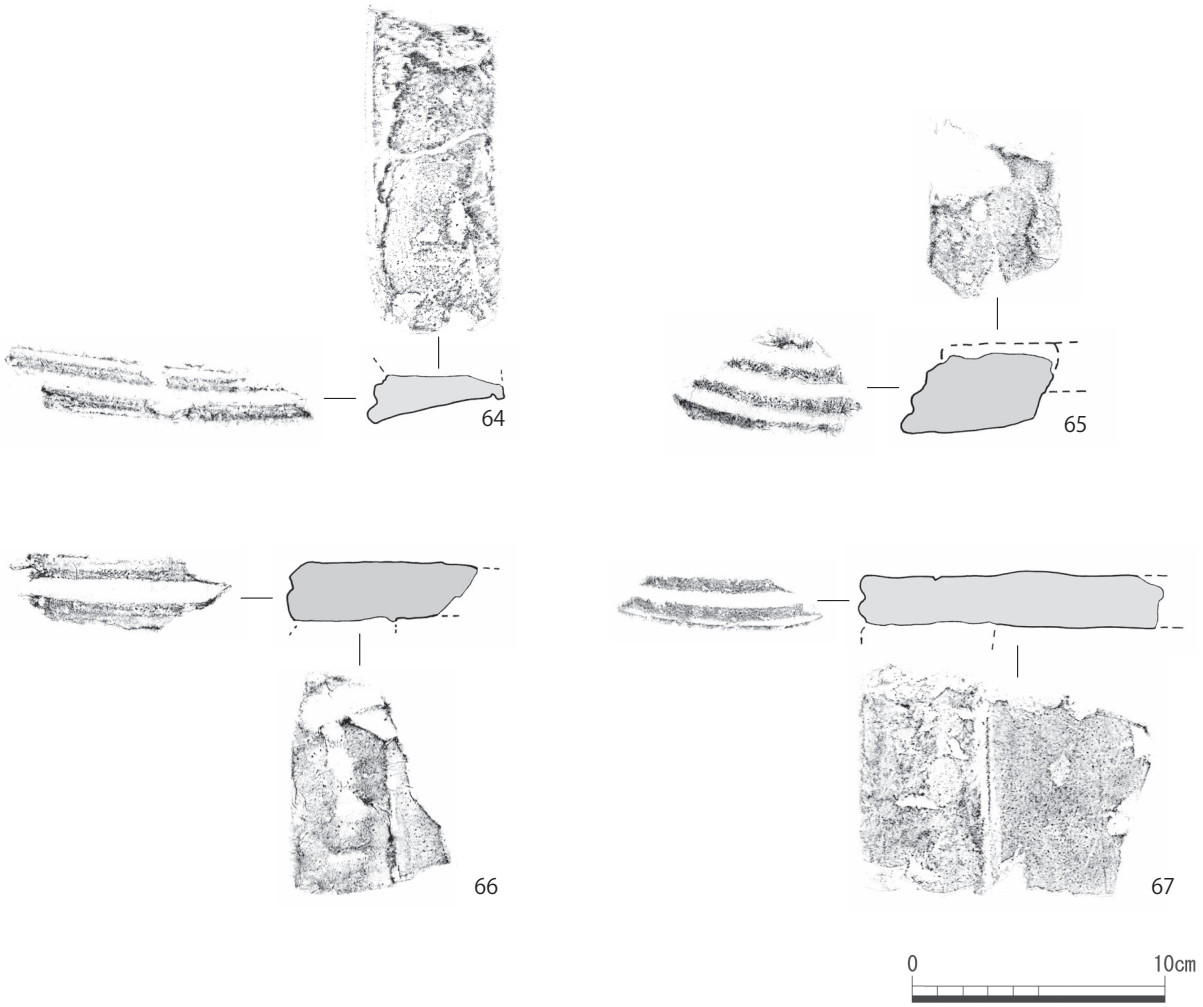


図 20　2 トレンチⅢ層（整地層）出土　軒平瓦（S ＝ 1/3）

にこの種の瓦が各地で用いられるようになる。今回出土した資料もそのひとつとして捉えられるだろう。

軒平瓦（図 20－64 ～ 67）

64 ～ 67 は軒平瓦の瓦当面を含む破片である。明確に軒平瓦であると判別できる資料はこの 4 点のみである。いずれも 2 トレンチⅢ層（整地層）からの出土である。

64 は本体から剥離した下顎部の破片である。大きさから四重弧文であると推測される。凹線は太く底面は平坦である。65 は上端部をわずかに欠く四重弧文の破片である。凹線はやや太く丸い。66 は下顎部を欠く。他よりも凹線・弧線の幅がやや広く、四重弧文であるか三重弧文であるか判別が困難である。下顎部の剥離面には接合を補助すると考えられる 0.5 ～ 1.0 ㎝大の刺突が三ヶ所にある。67 は下顎部を欠く。四重弧文であると考えられる。凹線は太く底面は平坦である。凹面には布目、幅 0.3 ㎝大の紐目、およびそれらをナデ消した跡が残る。

重弧文軒平瓦は川原式軒丸瓦に伴う軒平瓦として一般的な形式である。周辺部における調査でも重弧文軒平瓦は出土している。

丸瓦（図 21－68、図 22－69 ～ 71、図 23－72）

丸瓦と判断できる破片は約 600 点出土している。出土した丸瓦は玉縁式である。ここでは出土した丸瓦の形態や調整の特徴が把握できる資料を中心に報告する。68 ～ 72 はいずれもⅢ層（整地層）からの出土で、71 のみが 2 トレンチ、他はすべて 1 トレンチからの出土である。丸瓦は玉縁部がくびれた模骨に一連で粘土を巻きつけた後、凸面側に粘土を足して連結面をつくる。

68 は今回出土した丸瓦の中で唯一、ほぼ全体の形状が分かる資料である。全長 43.7 ㎝、玉縁長 5.9 ㎝、筒部最大幅 18.0 ㎝、玉縁幅 13.4 ㎝を測る。側面全体と玉縁端面、連結面はケズリで平坦に仕上げる。凹面には布目および紐目が残る。凸面は表面の磨滅が激しく細かな調整は観察困難だが、主にナデ調整を施す。69 は筒部である。粘土板での成形である。側面はケズリの後、ナデ調整を施す。凹面は布目で、端約 3 ㎝の範囲には横方向のケズリを施す。凸面は粗い縄目タタキの後、全体を縦方向のナデ調整によって仕上げるが、端部には部分的にタタキの痕が残る。70 は筒部である。焼成がやや甘い。側面はケズリによる面取りを行うが、稜の仕上げは 68・69 と比較して甘い。凹面には布目および紐目が残る。凸面は全体を横方向のナデ調整で仕上げる。71 は玉縁部と筒部上半である。玉縁部先端は細くすぼまる。側面はケズリを施す。筒部側面と玉縁部側面は一連ではなく、玉縁部側面が大きく削り取られ角度が変わる。凹面には布目および紐目が残り、粘土の絞り目も目立つ。凸面は全体にナデ調整で仕上げる。72 は玉縁部と筒部上半である。凸面は連結部に足された粘土の一部が剥離している。凹面には布目が残る。凸面は縄目タタキの後、ナデ調整で仕上げる。部分的にケズリの痕跡も認められる。

平瓦（図 24－73 ～ 78）

平瓦と判断できる破片は約 2,400 点出土している。全体の形状がわかる資料は 73 のみである。凸面の調整が出土した平瓦の特徴を示す資料を中心に報告する。73 ～ 78 はいずれもⅢ層（整地層）からの出土である。73・75 が 1 トレンチ、残りが 2 トレンチからの出土である。出土した平瓦はい

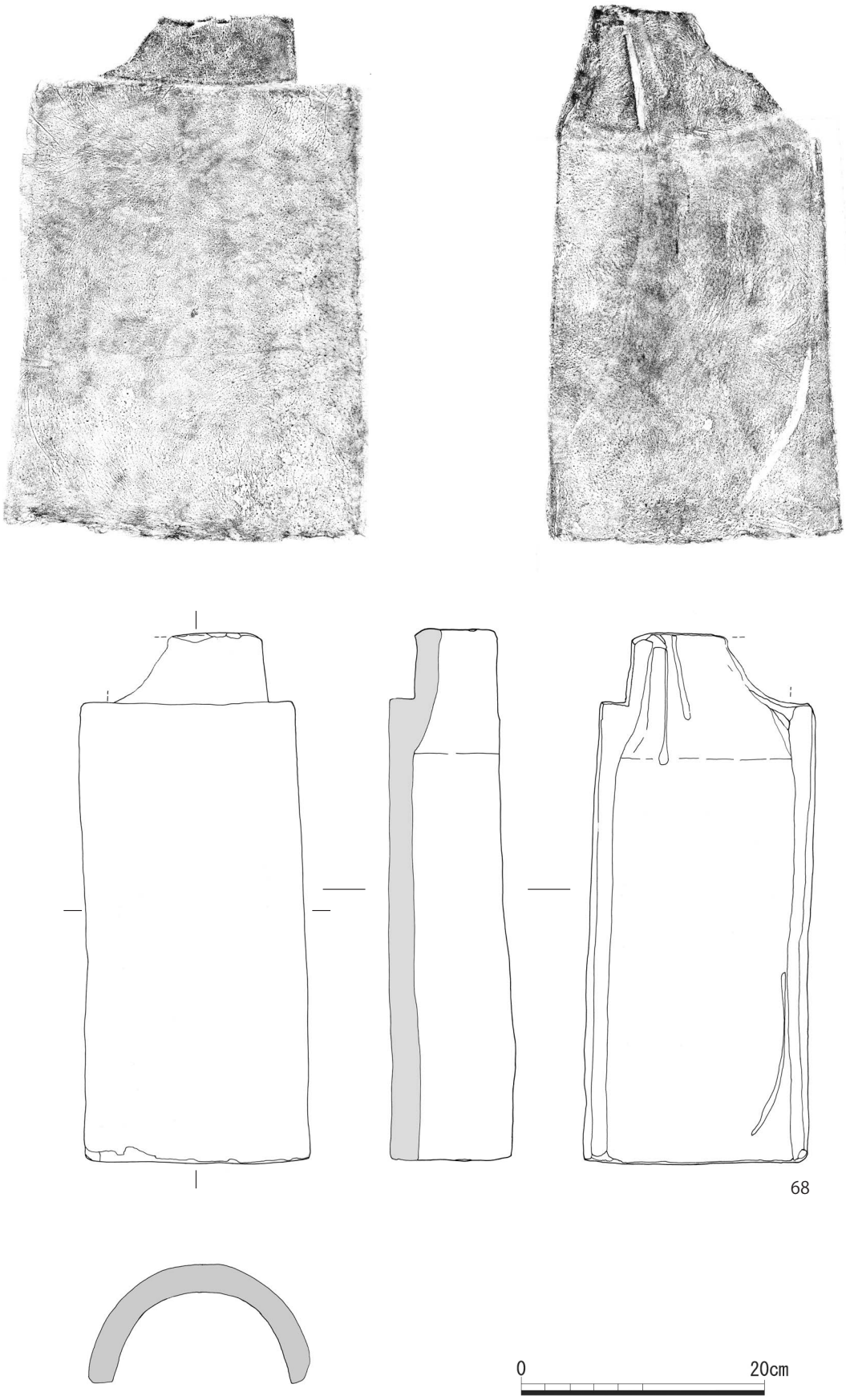


図 21　1 トレンチ Ⅲ 層（整地層）出土 丸瓦①（S ＝ 1/5）

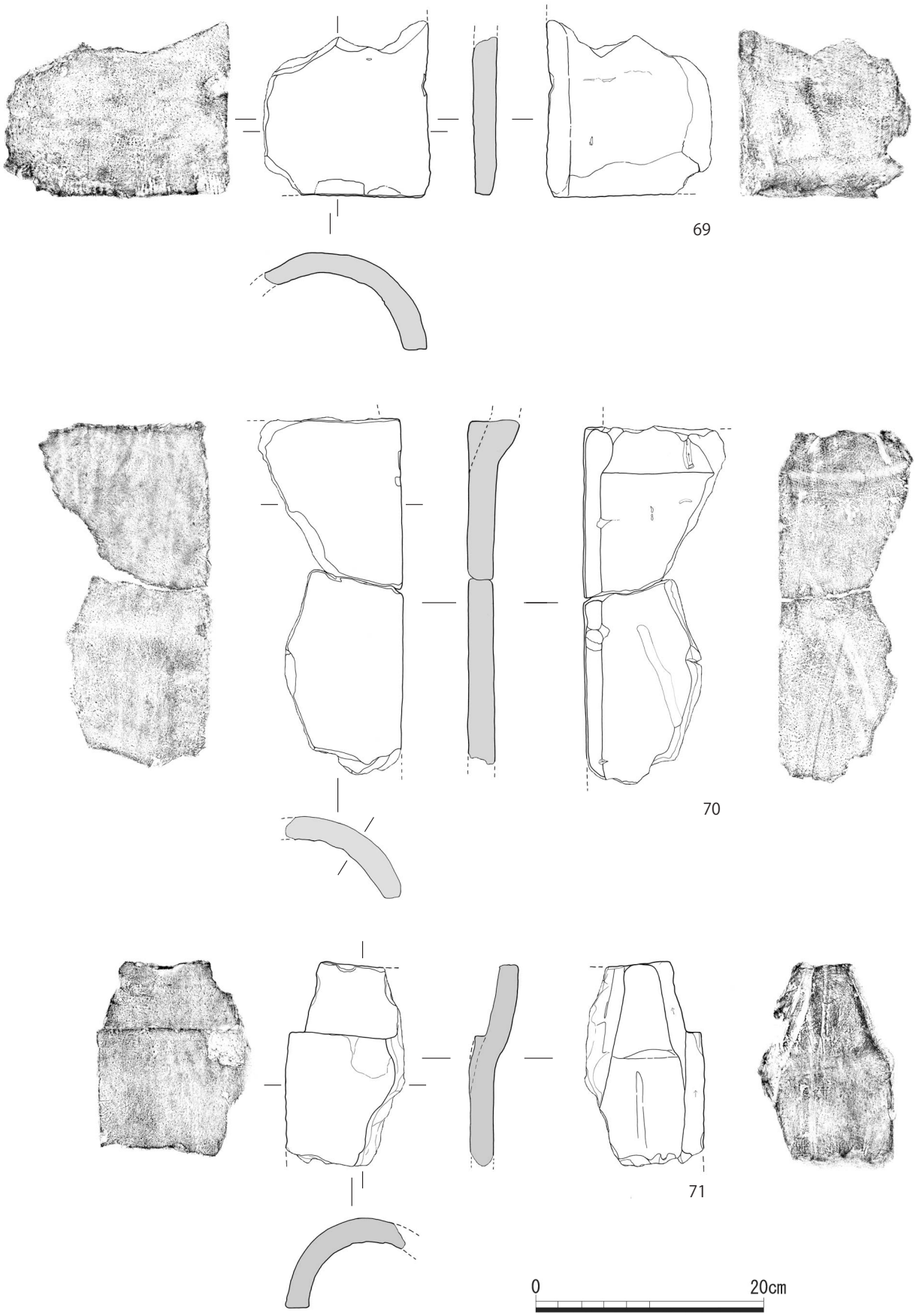


図 22　1・2 トレンチ Ⅲ層（整地層）出土 丸瓦②（S ＝ 1/5）

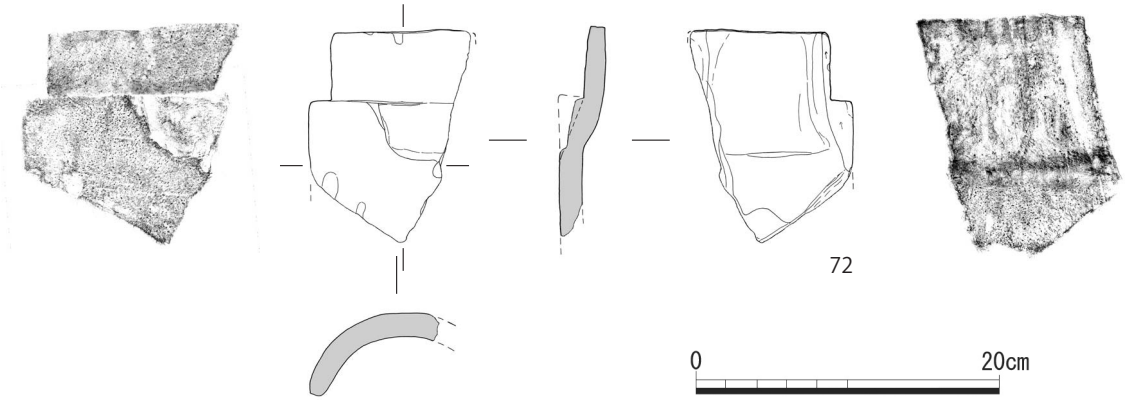


図 23　1 トレンチ Ⅲ層（整地層）出土 丸瓦③（S ＝ 1/5）

ずれも桶巻き作りのようである。

73 は全長 39.6 ㎝、広端幅 28.8 ㎝、狭端幅 26.1 ㎝、厚さ 1.7 ～ 2.3 ㎝を測る。端面・側面はいずれもケズリによって面取りを施す。凹面は全体にナデ調整を施しており、縄目はごく一部に残るのみである。凸面も全体にナデ調整を施す。74 は凹面には縄目が残り、縁辺部のみこれをナデ消す。凸面には縦方向の縄目タタキが明瞭に残る。75 も凸面に縦方向の縄目タタキが良好に残る。タタキ板の単位は横幅約 5 ㎝である。74・75 と同様に縄目タタキがよく残る破片は平瓦全体の約 40％にあたる。76 は凸面に菱形の格子目タタキを施すもののうち、格子目線が非常に太い（幅 5 ～ 8 ㎜）資料である。同様の格子目タタキをもつ瓦は 3 点のみで平瓦全体の 0.1％でしかない。この種の格子目タタキをもつ資料はいずれも 2 トレンチ上層からの出土であり、後世の遺構からの混入である可能性もある。77 は凸面に 74・75 より縄目の単位がやや大きいタタキを施す。凹面は縄目が部分的にナデ消えているが、これは意図的なナデ消しではなく作業工程中にかき消えたもののようである。78 は 76 よりも格子目線が細い（幅約 1 ～ 2 ㎜）格子タタキを施す。同様の格子目タタキをもつ平瓦は全体の約 9％である。これらのほか、凸面全体にナデ調整を施す平瓦が全体の約 42％、ナデ調整下にわずかに縄目タタキが残る資料が全体の約 9％存在する。

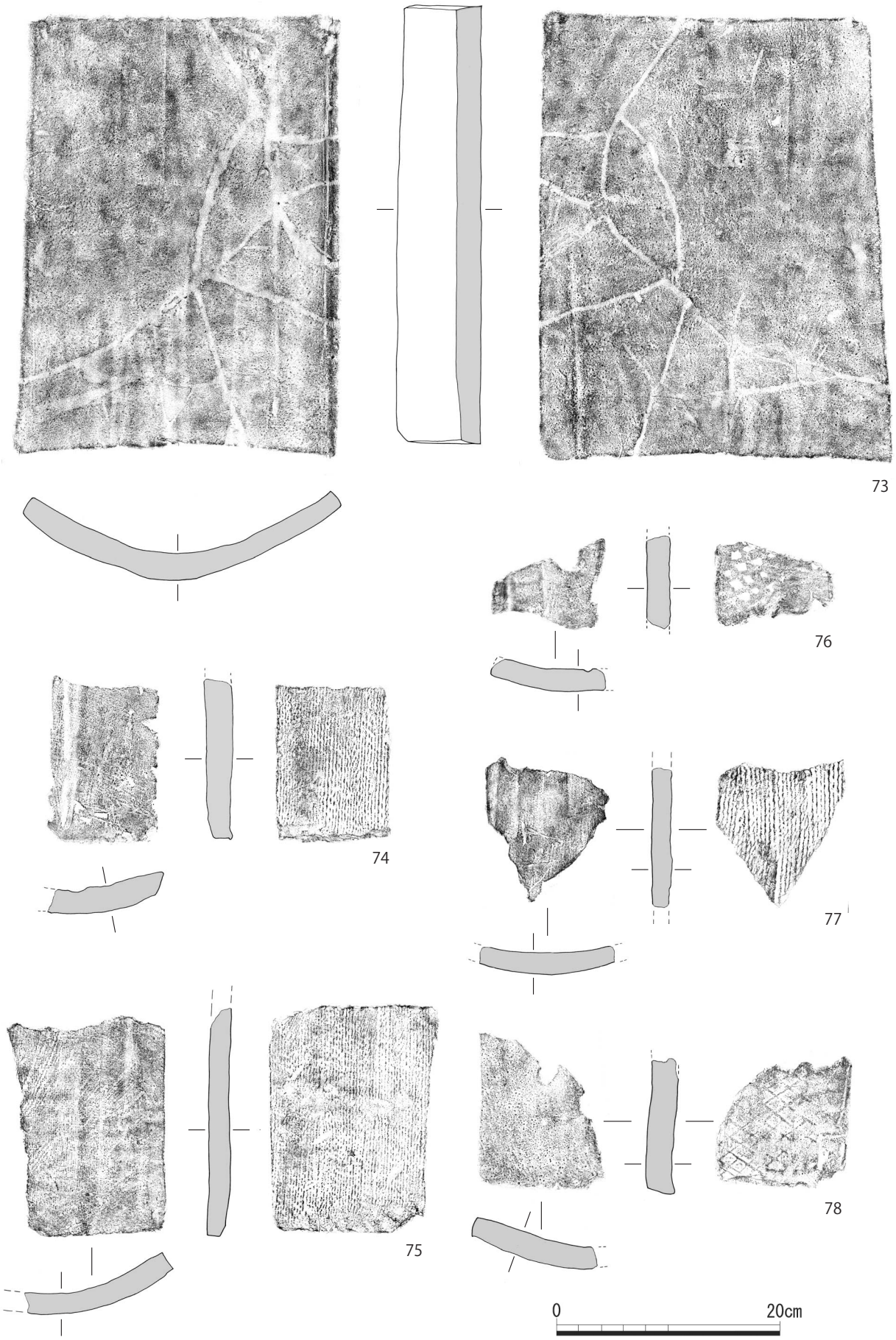


図 24　1・2 トレンチ Ⅲ層（整地層）出土 平瓦（S ＝ 1/5）

第Ⅲ章　右京十二条三・四坊の調査（橿教委 2011 - 2 次）

第 1 節　調査区の設定

調査は、重機により遺構面上面まで掘削を行い、その後、人力により遺構精査及び遺構の掘り下げを行った。また、調査の記録は、検出または掘り下げを行った遺構の平面実測と断ち割りを含む土層の断面実測、写真撮影により行った。

今回の調査区の設定は、事前に実施した試掘調査結果を基に行った。試掘調査は、対象地のほぼ中央に藤原京の条坊「西三坊大路」想定線が通ることから、この遺構の確認を主たる目的として実施した。試掘調査区は、道路予定地（以下、「1 区」。）とその北側の宅地部分（以下、「2 区」。）の 2 ヶ所で行った。それぞれ遺構が確認され、2 区では西三坊大路の東側溝と考えられる南北溝を検出した。

以上の試掘調査の結果を基に設定したのが、南・北区の 2 ヶ所の調査区である。
南区は道路予定地の東半部で設定した東西長 20 m、南北幅 3 m、面積 60 ㎡の調査区である。藤原京西三坊大路の想定線上にあたり、この遺構の検出を目的として設定した。

当初の予定では、南区のみが本調査地点であった。しかし、南区を重機により掘削し遺構検出を行ったところ、予想された西三坊大路の東側溝と考えられる南北溝が確認されなかった為、試掘調査 2 区を再掘削し同遺構の確認を行った。これが北区（東西幅 2.7 m、南北長 3.0 m、面積 8.1 ㎡）である。なお、北区は試掘調査で検出された遺構を再確認するために設定したもので、遺構の掘り下げは上層遺構である素掘溝のみ行い、中・下層遺構については遺構検出に止めた。ただし、土層による遺構の新旧関係を確認するため、東・北壁で断ち割り調査を実施した。

第 2 節　層序

調査地周辺は、南方から幾筋かの尾根状の丘陵が南北方向に延びる地形て、調査地と石川池（剣池）との間には 1 条の谷が形成されている。調査地の地形は丘陵北端部にあたり、南区西半部では現耕土直下から地山（花崗岩質風化土）、北区では地山は深く落ち込んでおり、基本的に東・北方向に向かって低くなる。

ここでは、遺構の掘り下げを行った南区の土層を基本層序として取り上げることとする。
Ⅰ層は、現代の耕土（灰オリーブ色粘質土）である。調査が行われるまで畑であったが、縁辺部に残る畦の痕跡からみて、元々は水田として利用されていた。層厚 0.1 ～ 0.2 mを測る。
Ⅱ層は、床土あるいは旧耕土（黄褐・暗灰黄色粘質土）である。層厚 0.05 ～ 0.20 mを測る。
Ⅲ層は、明黄褐色粘質土（地山：花崗岩質風化土）で、各遺構面の基盤層となる。なお、北区でⅢ層に相当する土層は、にぶい黄褐色粘質土である。層厚 0.3 ～ 0.4 mを測る。

第３節　遺構

遺構は全てⅢ 層上面で検出された。ここでは、遺構の重複状況や年代などから上・中・下層遺構に分けて報告を行う。それぞれの年代は、上層遺構は中世以降、中層遺構は７世紀後半～８世紀初頭、下層遺構は７世紀前半である。

ａ）上層遺構

素掘溝

南・北区全域で確認した耕作に伴うと考えられる溝である。南区で南北方向 20 条、東西方向６条、北区で東西方向１条を確認した。幅 0.2 ～ 1.0 m、深さ 0.05 ～ 0.15 m を残す。南北方向の溝が新しく東西方向が古い。

ｂ）中層遺構

土坑 028 - SX

南区西端部に位置する。楕円形を呈する土坑で南半部のみを検出した。検出面での規模は長径 2.0 m以上、短径 2.2 m、深さ 0.7 mを測る。埋土は大きく上下２層に分けられる。下層は自然に埋没した土層で、砂混じりの粘土あるいは粘質土が堆積する。上層は、遺物を含み人為的に埋め立てられた土層である。５層で藤原宮期の土器がまとまって出土しているが、これは埋め立てに伴い破損したものを廃棄したと考えられる。

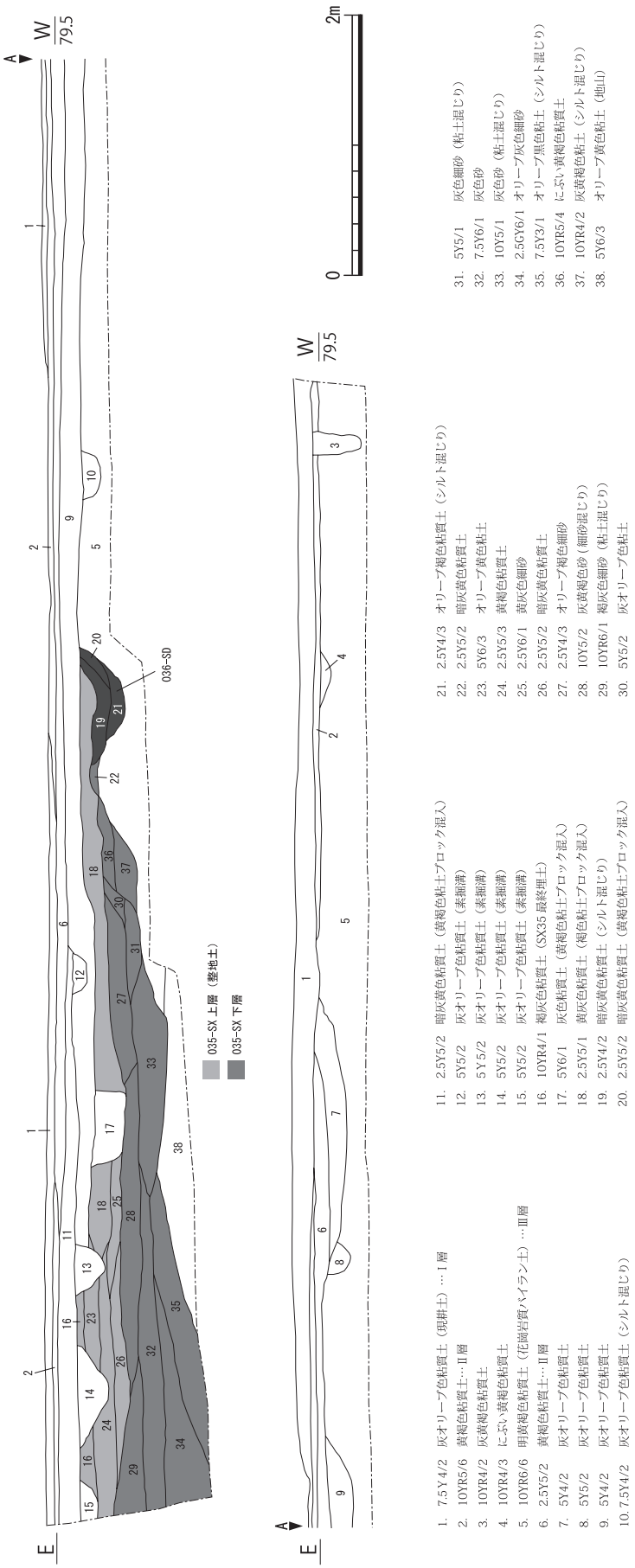


図 25　南区　南壁　土層断面図（S = 1/50）

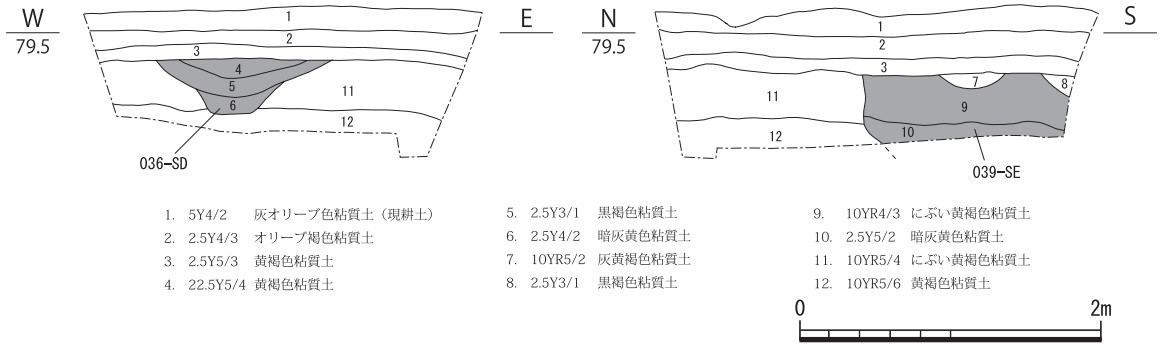


図 26　北区　北・東壁　土層断面図（S ＝ 1/50）

柱穴 029 ～ 034 - PIT

南区東部に位置する。いずれも 035 - SX の最終埋土を掘り込んでいることから、藤原宮期あるいはそれ以降のものと考えられる。平面形は一辺 0.3 ～ 0.8 mの隅丸方形又は円形を呈し、深さ 0.1 ～ 0.3 mを測る。033・034 - PIT のみ柱間約 1.8 mを測り、一連の構造物である可能性がある。それ以外は、密集しており、数時期の建物に伴うものと考えられる。

井戸 039 - SE

北区中央に位置する。直径 2.0 m以上、深さ 0.4 m以上を測る。東壁部分の断ち割り時に井戸枠とみられる横材が出土した。また、断ち割り時の出土遺物から藤原宮期の遺構と考えられる。

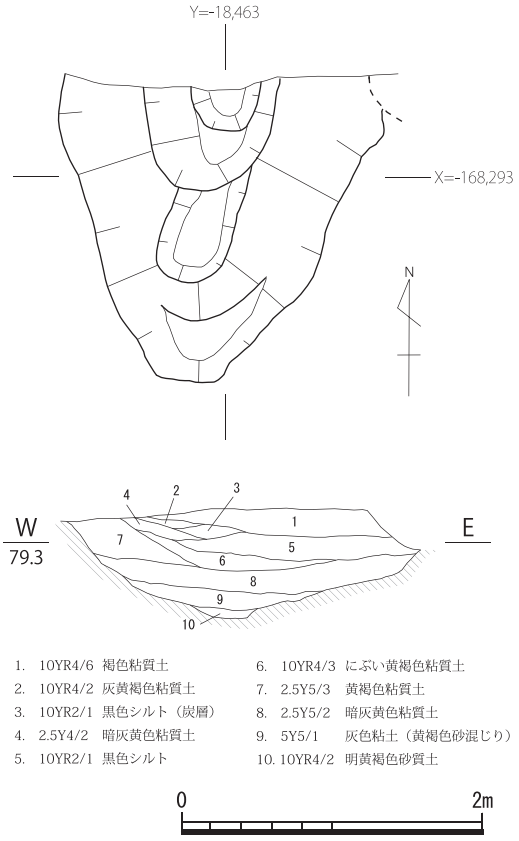


図 27　南区　028 - SX 平面・断面図（S ＝ 1/50）

c ）下層遺構

落込み 035 - SX

南区東部に位置する、幅 3.3 m以上、深さ 1.0 m以上の落ち込みである。東に向かって徐々に深くなる。埋土は大きく上下 2 層に分けられる。下層は、主に流水により堆積した土層で、灰黄・褐灰・灰色の砂層や細砂等からなる。また、細砂・砂層の下位にはオリーブ黒色粘土の堆積も認められる。下層の層厚は 0.6 m以上を測る。上層は、黄灰・黄褐色粘質土等で、粘土ブロックが混入することから、人為的に埋め立てた整地土であると考えられる。上層からは主に 7 世紀前半の遺物が出土している。

斜行溝 036 - SD

035 - SX の西端部から北区にかけて延びる溝である。検出幅 0.25 ～ 0.40 m、深さ 0.3 m を測る。最終埋土は 035 - SX と同じであり、出土遺物から 7 世紀前半頃の遺構と考えられる。

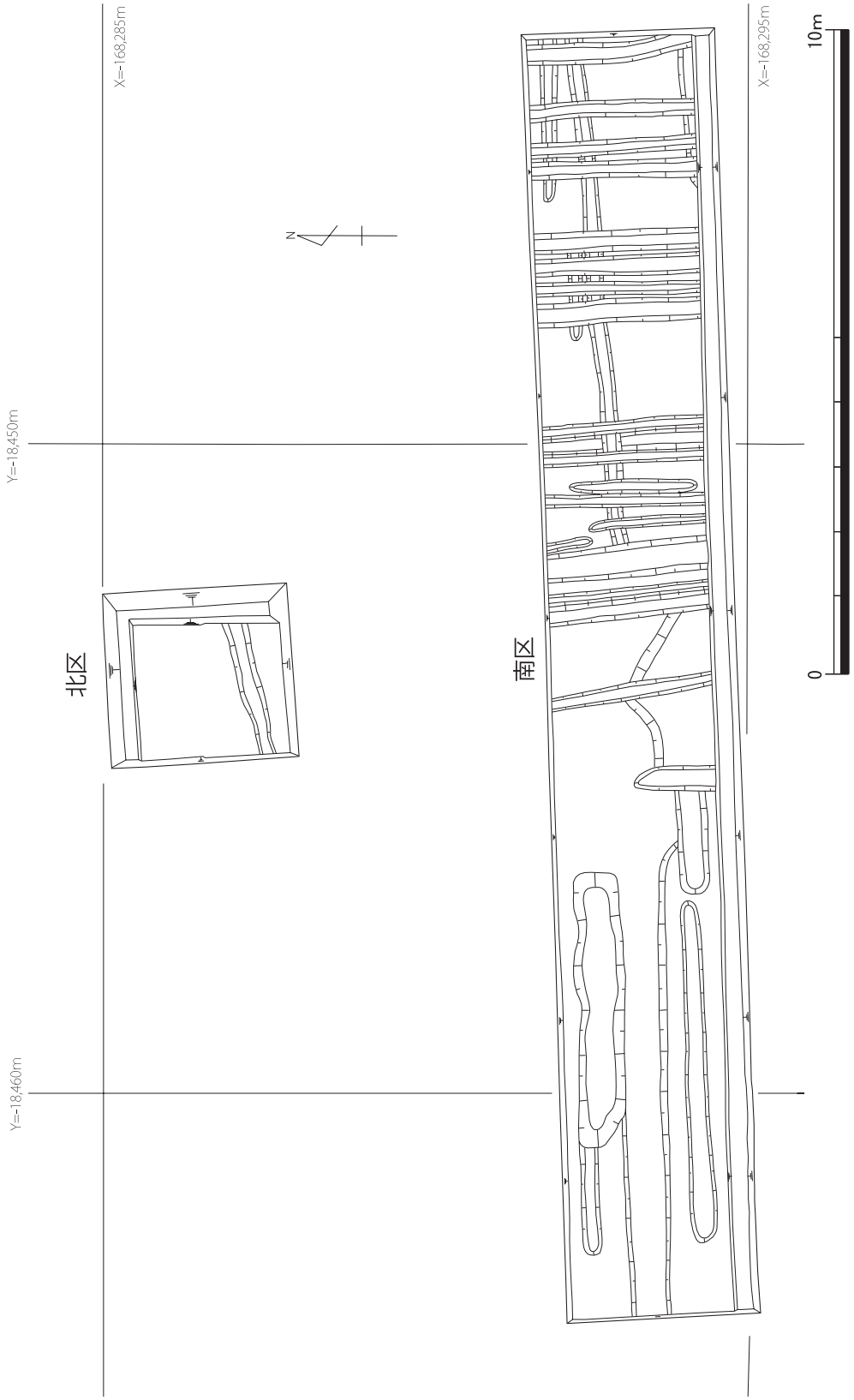


図 28　上層遺構平面図（S = 1/100）

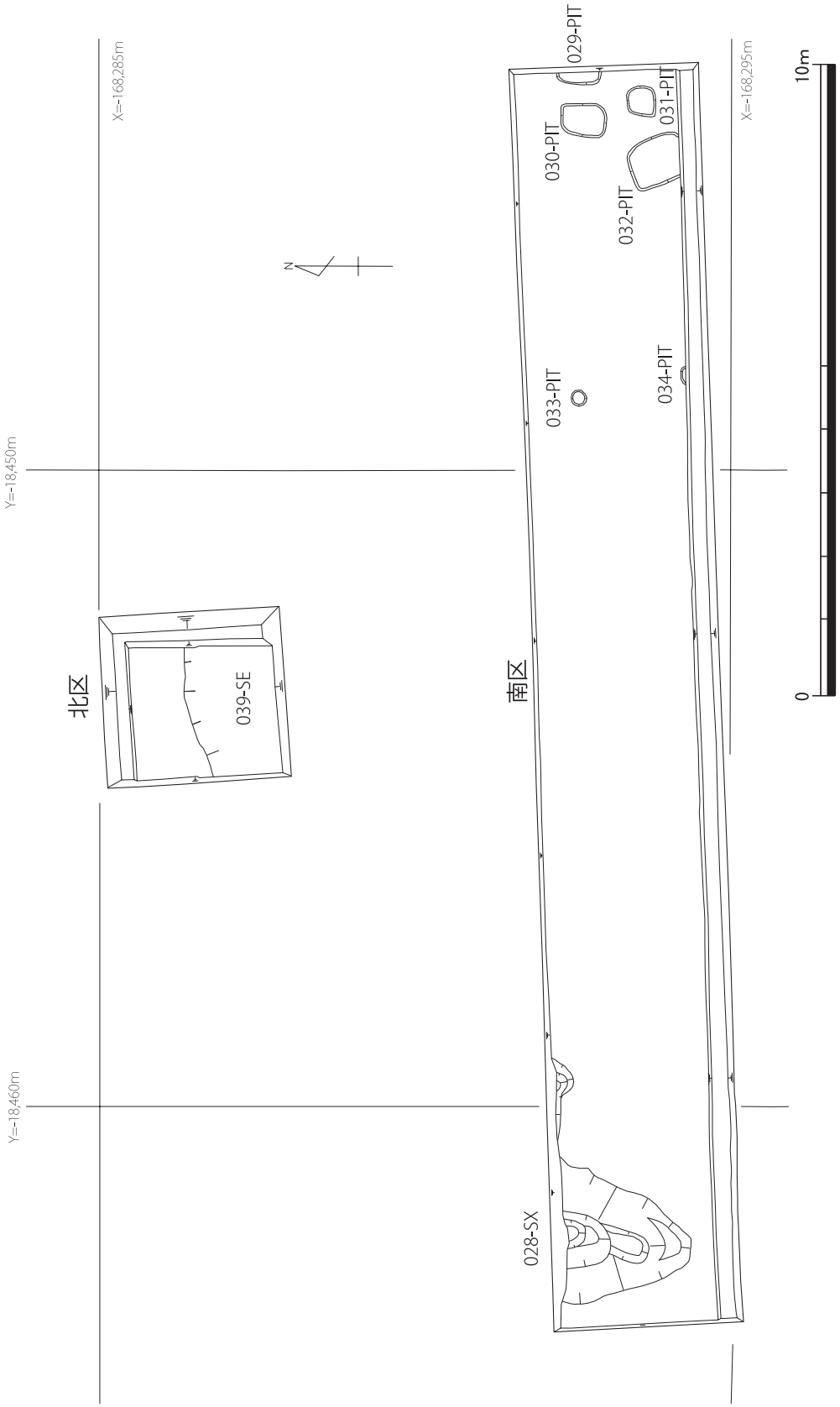


図 29　中層遺構平面図（S = 1/100）

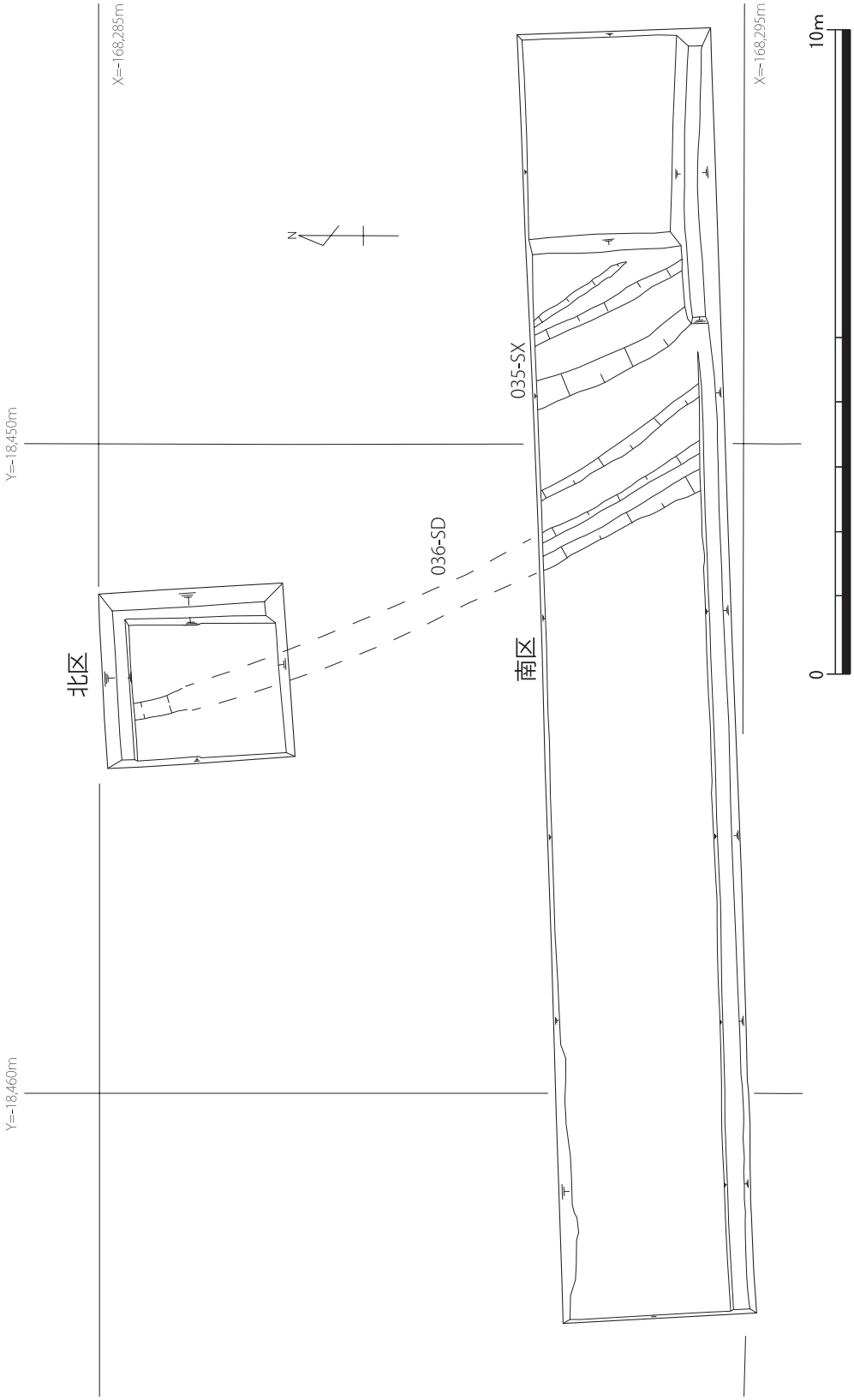


図 30　下層遺構平面図（S = 1/100）

第 4 節　遺物

035 - SX 出土土器（図 31－79 ～ 108、図 32－109 ～ 135）

南区東部で確認された遺構である。ここでは、上層の整地土と下層の砂層に分けて報告する。

上層（整地土）

79 ～ 89 は須恵器。

79 は坏蓋。頂部は丸みをもつ。外面上部は回転ヘラケズリ及び、その他はナデによる調整。口縁直径 11.2 ㎝、器高 3.5 ㎝。80 ～ 82 は蓋坏。かえりをもつ。底部外面はヘラ切り、その他はナデによる調整を施す。80 は口縁直径 9.4 ㎝、器高 2.5 ㎝。81 は口縁直径 11.4 ㎝、器高 3.1 ㎝。82 は口縁直径 10.0 ㎝、器高 3.4 ㎝。

83・84 は坏 G 蓋。83 は頂部がわずかに丸みをもつ。つまみの頂部は平坦で頸部のくびれも少ない。回転ヘラケズリ後、ナデによる調整を施す。かえり端部は口縁部よりわずかに上に位置する。口縁直径 10.9 ㎝、器高 2.7 ㎝。84 は頂部のつまみが欠損する。回転ヘラケズリ後全面ヨコナデを施す。口縁直径 11.1 ㎝、器高 2.4 ㎝。85 は坏。外傾気味に立ち上がる口縁をもつ。底部外面はヘラ切り、その他はヨコナデによる調整。口縁直径 8.2 ㎝、器高 3.4 ㎝。

86 はハソウ。丸底で球形の底部。肩部に 1 条の沈線を施し、そのやや下に直径 1.4 ㎝の円孔を穿つ。体部下半から底部にかけてヘラ削りによる調整。体部最大径 8.6 ㎝。

87 は鉢。円盤状の底部に外傾する口縁からなる。底面はヘラ切り、その他はナデによる調整。底部直径 9.4 ㎝。

88 は鉢。外傾する口縁をもつ。口縁外面に強いナデを 1 条施す。口縁部下半部にヘラ記号が残る。口縁直径 13.8 ㎝。

89 は壺の底部。体部には短い脚部が付く。体部に 2 条の沈線を施す。体部径 13.6 ㎝、脚部径 8.4 ㎝、脚部高 2.1 ㎝。

90 ～ 107 は土師器。

90 ～ 92 は坏。口縁部外面にナデを施し、底部との境に稜をなす。90・91 ともに口縁直径 1.0 ㎝、器高 3.0 ㎝。92 は口縁直径 10.9 ㎝、器高 2.8 ㎝。

93 は坏。底部と口縁部の境が緩く屈曲する。口縁直径 14.0 ㎝、器高 3.2 ㎝。

94 ～ 98 は坏。95・96 は内面に 1 段の放射状暗文を施す。94 は口径 13.0 ㎝、器高 2.8 ㎝。

95 は口縁直径 10.2 ㎝、器高 3.2 ㎝。96 は口縁直径 11.2 ㎝、器高 3.9 ㎝。97 は口縁直径 13.4 ㎝、器高 4.7 ㎝。98 は口縁直径 14.4 ㎝、器高 4.2 ㎝。

99 は坏。平らな底部と外傾する口縁部からなる。口縁端部は内側に折り曲げ、わずかに肥厚する。内面には 2 段放射状暗文を施す。外面上部はヘラ磨き、下半部はケズリによる調整である。口縁直径 18.6 ㎝、器高 4.5 ㎝。

100 は皿。外面にヘラ磨きを施す。復元口縁直径 21.6 ㎝、器高 3.0 ㎝。

101 は皿。口縁部が大きく外反する。口縁端部は内面に折り曲げ、わずかに肥厚する。復元口縁直径 27.2 ㎝。

103 は小型の壺。短い口縁は外反し全体に肥厚する。底部は平坦で中心部がわずかに凹む。全面ナデによる調整である。口縁直径 10.4 ㎝、器高 7.4 ㎝。

104 は小型の甕。丸く膨らんだ体部に短く外反する口縁をもつ。体部外面はハケ、その他はナデによる調整である。口縁直径 11.0 ㎝。

105 は鉢。口縁部は欠損。平坦な底部に直立気味に立ち上がる体部をもつ。底部外面に木の葉状の沈線を施す。全面ナデによる調整。底部直径 7.0 ㎝。

102・106 ～ 108 は甕。102 は丸く膨らんだ体部に外反する口縁をもつ。口縁端部は内面に折り返し肥厚させる。体部外面にハケによる調整を残す。復元口縁直径 24.4 ㎝。106 は大

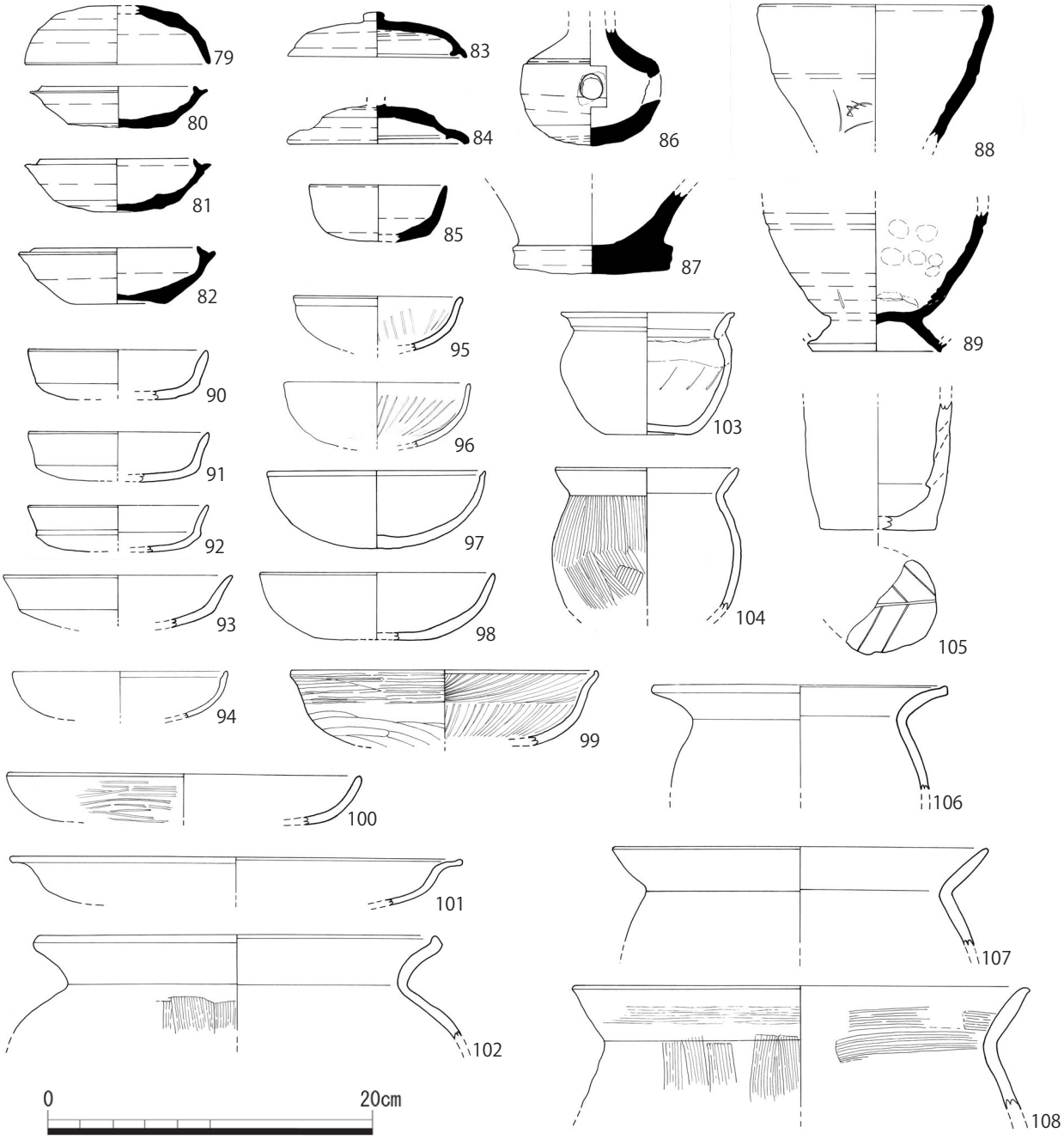


図 31　南区 035 - SX 上層（整地層）出土土器（S ＝ 1/4）

きく外反する口縁部をもつ。口縁端部はわずかに肥厚する。全面ナデによる調整である。復元口縁直径 18.0 ㎝。107 はくの字に屈曲する口縁部をもつ。全面ナデによる調整である。復元口縁直径 23.0 ㎝。108 もくの字に屈曲す口縁部をもつ。外面は口縁部がヨコハケ、体部がタテハケ、内面は口縁部がヨコハケ、その他はナデによる調整である。復元口縁直径 27.2 ㎝。

下層（砂層）

109 ～ 121 は須恵器。

109 は坏蓋。口縁部と頂部の境に段がつく。外面上部は回転ヘラケズリ、その他はヨコナデによる調整である。復元口縁直径 12.0 ㎝。110 は坏蓋。頂部と口縁部の境にわずかに段を残す。頂部は回転ヘラケズリ、その他はヨコナデによる調整である。口縁直径 15.0 ㎝、器高 4.9 ㎝。

111 は無蓋高坏。坏部は浅く口縁部は外反し、底部との境に稜がつく。頂部のみ回転ヘラケズリで、その他はヨコナデを施す。

112・113 は坏身。112 は内傾して立ち上がる口縁部をもつ。外面上部は回転ヘラケズリ、それ以外はヨコナデによる調整である。復元口縁直径 11.1 ㎝。113 は 112 より強く内傾する口縁部をもつ。復元口縁直径 11.4 ㎝。

114 は鉢。口縁部は外傾気味に立ち上がる。口縁端部は外面で肥厚する。口縁直径 12.0 ㎝。

115 は坏蓋。頂部と口縁部の境がわずかに屈曲する。頂部は回転ヘラケズリ、その他はヨコナデによる調整である。復元口縁直径 9.8 ㎝。

116 ～ 118 はハソウ。116 は体部が楕円形で底部は丸底である。頸部のくびれは少なく、わずかに屈曲して口縁部へ続く。肩部には 2 条の沈線間に櫛描波状文を施す。口縁直径 7.0 ㎝、胴部直径 10.6 ㎝、器高 10.1 ㎝。117 は楕円形の体部に、尖り気味の底部をもつ。体部中央に列点文、頸部に櫛描波状文を巡らせる。胴部直径 11.1 ㎝。118 は球形の体部に細頸をもつ。体部中央に刺突文を巡らせる。胴部直径 8.5 ㎝。

119 ～ 121 は甕。119 は大きく外反する口縁部をもつ。外面の口縁端部よりやや下がった位置に 1 条の突帯を巡らせる。口縁直径 25.7 ㎝。120 は口縁端部が外側に大きく肥厚する。口縁直径 23.9 ㎝。121 は口縁部を欠損する胴部片。外面は叩き、内面はナデによる調整である。胴部直径 28.8 ㎝。

122 ～ 135 は土師器。

122 ～ 124 は坏。122 は口縁部外面にナデを施し、底部との境に稜をなす。底部はヘラケズリ調整である。口縁直径 9.8 ㎝、器高 3.0 ㎝。123 は底部にわずかに平坦面をもつ。内面に 1 段の放射状暗文を施す。外面の口縁部はナデ、底部はヘラケズリ調整である。口縁直径 11.0 ㎝、器高 3.4 ㎝。124 は口縁と底部の境に稜をなす。内面及び外面の口縁部はナデ、底部はヘラケズリ調整である。口縁直径 13.4 ㎝、器高 3.7 ㎝。

125・126・128・129 は甕。125 は丸みを帯びた体部に外反する口縁をもつ。内外面ともにハケによる調整を施す。口縁直径 11.0 ㎝。126 は体部が球形、口縁は外反し口縁端部はつまみ上げる。外面はハケによる調整を施す。口縁直径 15.1 ㎝、器高 13.9 ㎝。128 は口縁が外反し、肥厚気味の口縁は端部でやや薄くなる。内外面ともにハケによる調整を残す。口

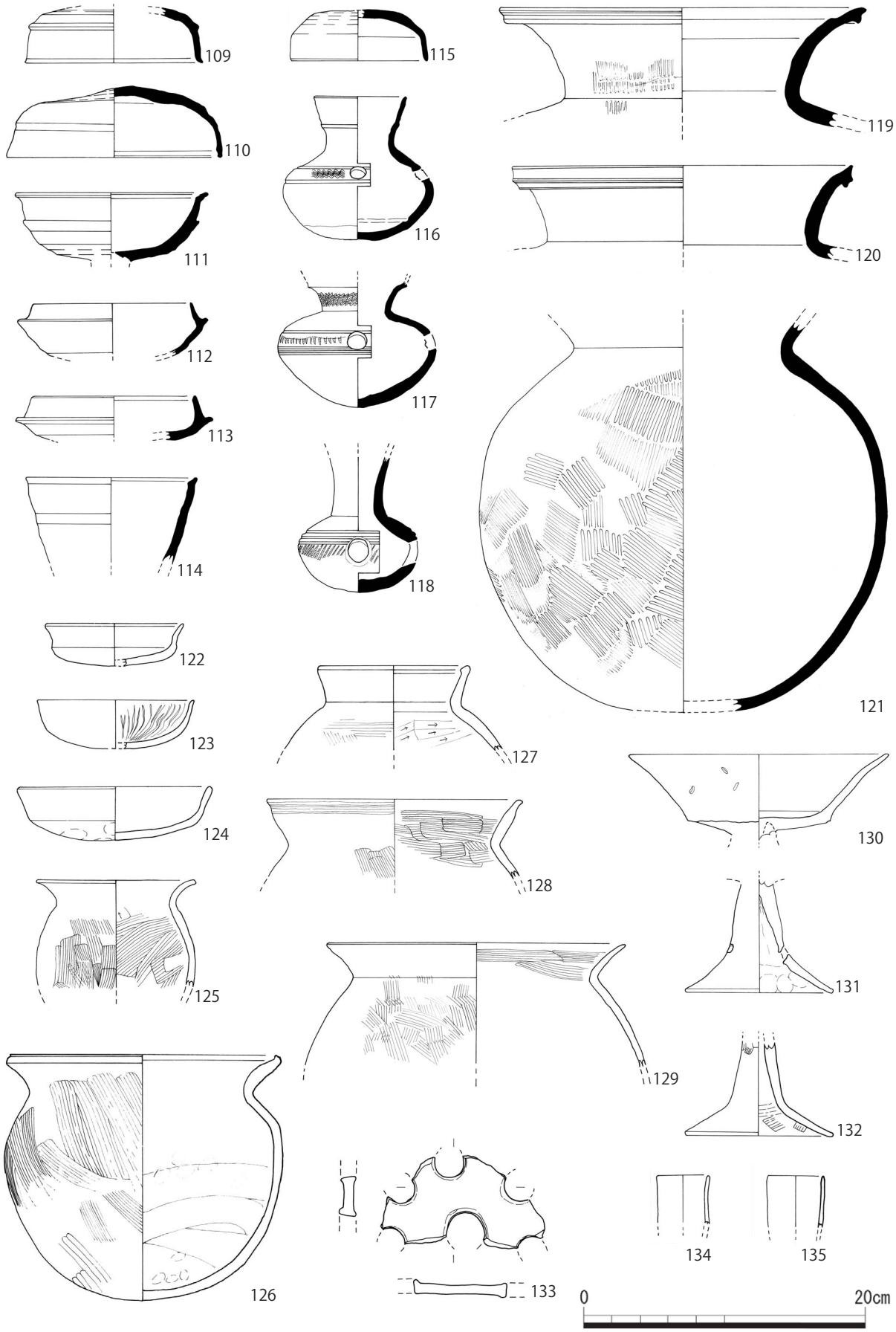


図 32　南区 035 - SX 下層（砂層）出土土器（S = 1/4）

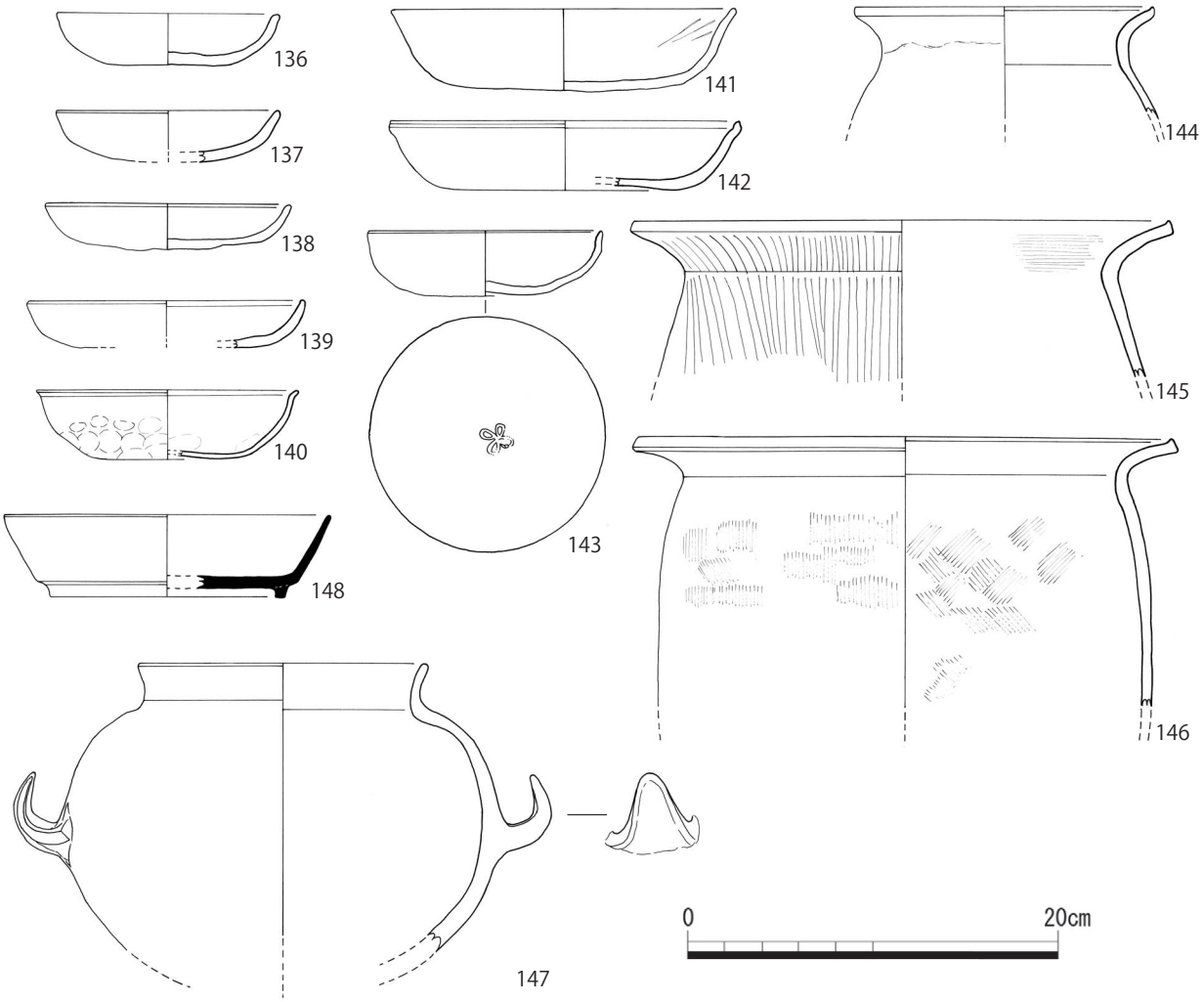


図 33　南区　028 - SX 出土土器（S ＝ 1/4）

縁直径 18.0 ㎝。129 は丸く膨らんだ体部に外反する口縁をもつ。口縁端部は丸くおさめる。内外面ともハケによる調整である。口縁直径 20.9 ㎝。

127 は壺。直立気味の短い口縁をもつ。口縁端部は内面側に肥厚する。口縁直径 10.5 ㎝。

130 ～ 132 は高坏。130 は坏部のみで、外反ぎみの口縁部をもつ。口縁直径 18.3 ㎝。131・132 は脚部。131 は円形透を施す。底部直径 10.2 ㎝。132 は裾部が屈曲気味にひらく。内面にハケによる調整を残す。底部直径 10.3 ㎝。

133 は甑の底部。平底で、底部中央と周縁部に円孔 6 個が残存している。

134・135 は製塩土器で円筒形を呈する。

028 - SX 出土土器（図 33－136 ～ 148）

136 ～ 147 は土師器。

136 ～ 143 は坏。136 は平底気味の底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる。口縁端部は面取りを施しわずかに内傾する。内外面ともにナデによる調整である。口縁直径 11.8 ㎝、器高 2.7 ㎝。137 は外傾気味に立ち上がる口縁部をもつ。内外面ともにナデによる調整。復元口縁直径 12.0 ㎝。138 は平らな底部をもつ。口縁直径 13.2 ㎝、器高 2.5 ㎝。139 は平

らな底部をもつ。口縁直径 15.0 ㎝、器高 2.4 ㎝。140 は内湾気味に立ち上がる口縁で、端部で外反する。坏部は深い。口縁直径 13.9 ㎝、器高 3.6 ㎝。

141 は平らな底部に外傾して立ち上がる口縁部をもつ。2 段放射状暗文を施す。口縁直径 18.4 ㎝、器高 4.3 ㎝。142 は凹底気味の底部に外傾する口縁部をもつ。内外面ともにナデによる調整である。口縁直径 18.1 ㎝、器高 3.6 ㎝。143 は凹底から丸く屈曲しながら直立する口縁部へ続く。外面底部中央には 4 葉状の墨書を残す。口縁直径 12.6 ㎝、器高 3.5 ㎝。

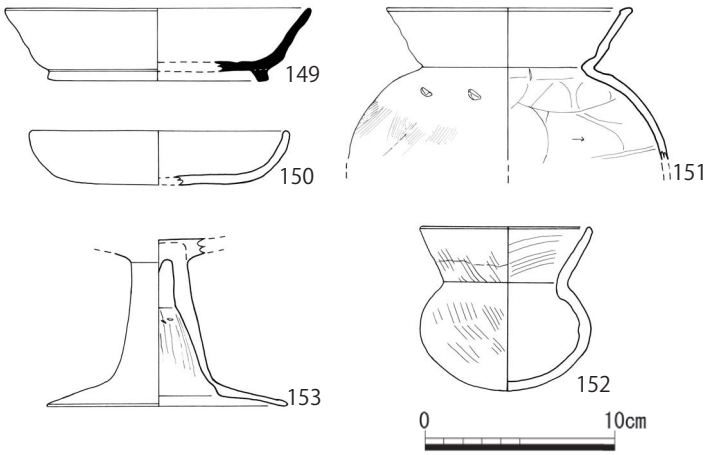


図 34　南区 036 - SD 出土土器（S = 1/4）

144 ～ 146 は甕。144 は外反する口縁で端部は内面に折り返しわずかに肥厚する。口縁直径 16.0 ㎝。145 は大きく外反する口縁部で端部は内面に折り返し肥厚する。外面は縦位のハケによる調整である。口縁直径 28.6 ㎝。146 は直角気味に外反する口縁で、端部で内面に肥厚する。外面に縦位のハケによる調整を残す。口縁直径 28.6 ㎝。

147 は壺。丸く膨らんだ体部にわずかに外反する口縁部をもつ。強く折り曲げた三角把手を体部に付す。

148 は須恵器の坏。平らな底部に外傾する口縁部をもつ。断面が逆台形の高台を付す。口縁直径 17.4 ㎝、器高 4.4 ㎝。

036 - SD 出土土器（図 34－149 ～ 153）

149 は須恵器の坏。平らな底部に高台を付す。外傾する口縁部は端部を丸くおさめる。口縁直径 16.0 ㎝。

150 ～ 152 は土師器。

150 は坏。平らな底部に内湾気味に立ち上がる口縁部をもつ。口縁直径 13.4 ㎝。

151 は甕。丸く膨らんだ体部に外傾する口縁部をもつ。口縁端部はわずかに肥厚する。口径 12.6 ㎝。152 は小型丸底壺。球形の体部に外傾する口縁部をもつ。外面にはハケによる調整を残す。口縁直径 8.8 ㎝、器高 8.6 ㎝。153 は高坏の脚部。裾部で大きく開く。底部直径 12.6 ㎝。

032 - PIT 出土土器（図 35－154）

154 は 032 - PIT 埋土から出土した須恵器のハソウ。体部中央に凹線間に列点文を巡らせる。内面に漆が付着している。また、円孔に差して使用していた木片が残る。

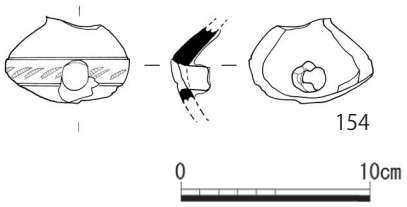


図 35　南区 032 - PIT 出土土器（S = 1/4）

第Ⅳ章　総括

第 1 節　右京十一・十二条三坊の調査

藤原京関連

藤原京の整地層および藤原京期を中心とする古代の遺構を確認することができた。

1 トレンチ西端に位置する 028‐SD は幅 1.3 m以上の南北溝である。藤原京期の遺物が出土しており、その中には「京」の字（※「口」が「日」となる異字体）が墨書された須恵器片も含まれる。028‐SD は西三坊大路東側溝の想定線付近に位置している。調査地近辺での西三坊大路東側溝の検出例としては、右京九条三・四坊（奈良文化財研究所 飛鳥藤原第 88 次調査）での例が挙げられる。検出された東側溝 SD3761 の側溝心座標値は X ＝－ 167,423.37 m・Y ＝－ 18,458.44 mである（世界測地系に換算）。一方、今回の調査で検出した 028‐SD は西肩が破壊されており溝の全体像は不明であるが、おおむね X ＝－ 168,084.00 m・Y ＝－ 18,454.00 m付近が溝心になると考えられる。両地点の方位の振れはＮ－ 0°　23′　07″－Ｗである。これまでの調査で西三坊大路西側溝の振れは北で約 25 分強、西に振れることが指摘されており、今回算出された数値もほぼそれに合致する。これらのことから、028‐SD は西三坊大路の東側溝である可能性が高いと言える。また、1 トレンチ中央部では東側溝に関わる何らかの構造物である可能性をもつピット群を検出している。

2 トレンチでは藤原京期および 8 世紀代を中心とする遺構の存在を確認している。遺構には溝、土坑、ピット、落ち込みがある。調査区の幅が狭いこともあり、それぞれの遺構の詳細な時期や機能については不明なものが多いが、藤原京期以降、調査地一帯を広く宅地として利用していたことは確かである。

これらの遺構を構築する前段階として、調査地周辺一帯の広い範囲で整地が行われている。整地層の厚さは最大約 0.6 m、平均して約 0.3 mに及ぶ。現地表面から遺構面までの深度（約 0.3 ～ 0.4 m）を考慮すると、当初の整地層はさらに厚かった可能性が高い。整地層下の堆積土（Ⅳ・Ⅴ層。古墳時代以前）は、調査地北東隅の一角を除いて、地盤が軟弱な河川堆積層である。整地以前の調査地は東側の丘陵と西側の微高地に挟まれた谷間であったと考えられる。現地形や地名、周辺での発掘調査成果もこのことを示している。そのような谷間を藤原京の宅地として利用するにあたって、大規模な整地造成工事を行っているのである。

石川廃寺関連

今回の調査では石川廃寺に直接関わる遺構は存在していない。しかし藤原京の整地層から多量の瓦が出土したことは、近辺に瓦葺建物を伴う寺院が存在していた可能性が高いことを示している。出土した瓦の時期は 7 世紀後半であると考えられる。瓦は整地層全体から出土している。基本的に瓦の遺存状態は悪く、整地に際して、周辺で不要になったものを廃棄したものと考えられる。整地以前の調査地は地盤が軟弱な谷間であり、寺院の立地としては適していない。石川廃寺の位置については、従来からの指摘どおり、調査地の東から南東にかけての丘陵西側一帯であったと考える方が妥当であろう。調査では漆が付着した須恵器や鞴羽口も出土している。これらの生産関係の遺物も寺院に由来

するものである可能性がある。

石川廃寺は、蘇我馬子ゆかりの石川精舎の候補地として、その名前が挙げられている。7 世紀後半には瓦葺建物を伴う寺院が調査地周辺に存在していた可能性が高い。また、整地層（Ⅲ層）および下層の堆積層（Ⅳ層）からは 6 世紀～ 7 世紀前半の土器も一定量出土しており、7 世紀前半以前から調査地周辺において何らかの活動が行われていたこともうかがえる。ただし、7 世紀前半に遡る瓦は出土していない。石川廃寺の正確な位置や成立の時期や過程についてはなお不明な点を多く残すが、今回の調査で得られた情報は石川廃寺の実態を解き明かす手掛かりとなる。

出土した瓦は川原寺式の範疇に含まれる資料である。川原寺は石川廃寺から直線距離にして南東に約 2 ㎞の位置に所在する。川原寺の正確な創建時期は明らかではないが、660 年代である可能性が高いとされている。その後、7 世紀後半を中心に各地で川原寺式の瓦が用いられるようになる。今回出土した瓦は、瓦当文様や製作技法、出土状況などの要素をふまえると 670・680 年代に製作された可能性がもっとも高いと考えられる。

第 2 節　右京十二条三・四坊の調査

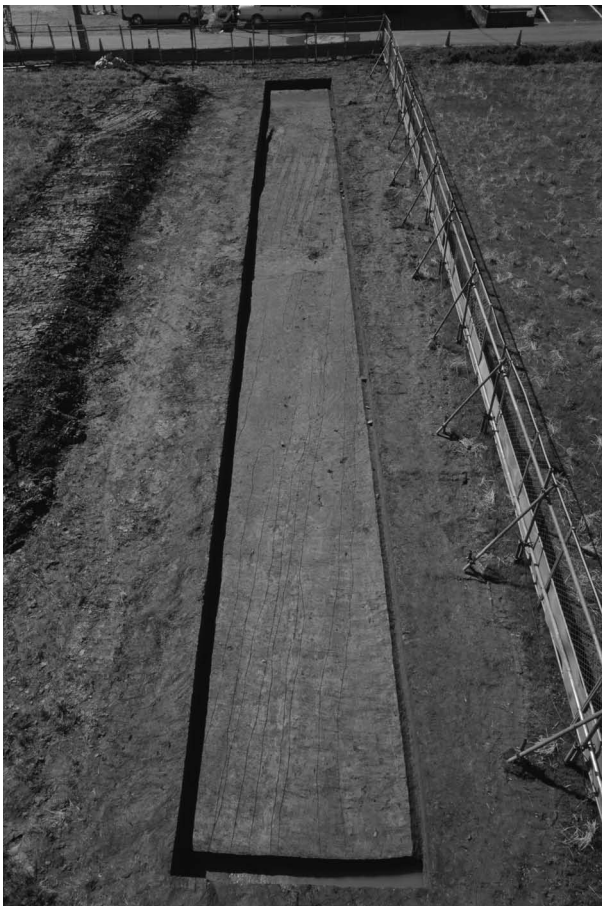
右京十二条三・四坊の調査成果は、以下の通りである。

試掘調査で見つかった西三坊大路と考えられた溝は斜行溝 036‐SD であり、条坊遺構でないことが明らかとなった。また、想定線上で西三坊大路は確認されなかった。これまで西三坊大路は、第Ⅱ章の報告であるように、今回の調査地より北に約 200 mの地点で東側溝と考えられる溝が確認されており（橿教委 2011-1 次）、近隣まで施工されていた事が判明している。今回の調査で確認されなかった原因の一つとして、今回の調査地が南から延びる丘陵の北端部にあたるため元々の地形が高く、後世の開発により浅い遺構は削平されたと考えられる。

調査事例が少ない藤原京の南京極付近で井戸と柱穴を確認し、当該期の遺構の存在を明らかにすることができた。

7 世紀前半の遺構を確認した。当該地の開発が藤原京以前に行われていたことを示すもので、「石川」の古代の歴史を考える上でも重要であると考えられる。

図　版



1トレンチ　上層遺構検出状況（北から）

1トレンチ　上層遺構完掘・下層遺構検出状況（北から）

1トレンチ　下層遺構完掘状況（北から）

1トレンチ南半　整地層内 瓦出土状況（南から）

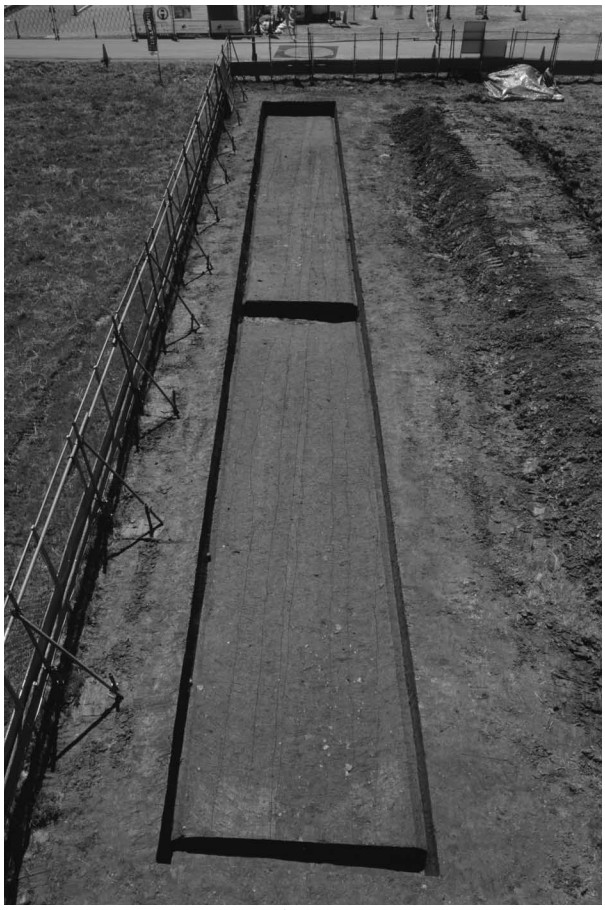
029‐SD 検出状況（東から）

1 トレンチ中央部　PIT 群（東から）

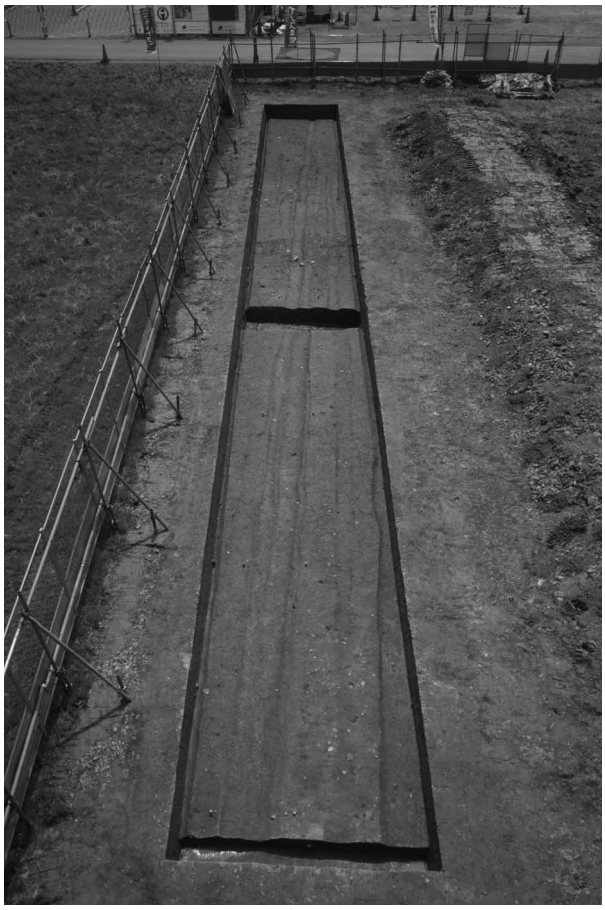
1 トレンチ南半 整地層 瓦出土状況（北東から）

028‐SD 完掘状況（南から）

1 トレンチ北部　東西畦土層断面（南から）



2トレンチ　上層遺構検出状況（北から）



2トレンチ　上層遺構完掘状況（北から）

2トレンチ　下層遺構検出状況（北から）

2トレンチ　下層遺構完掘状況（北から）

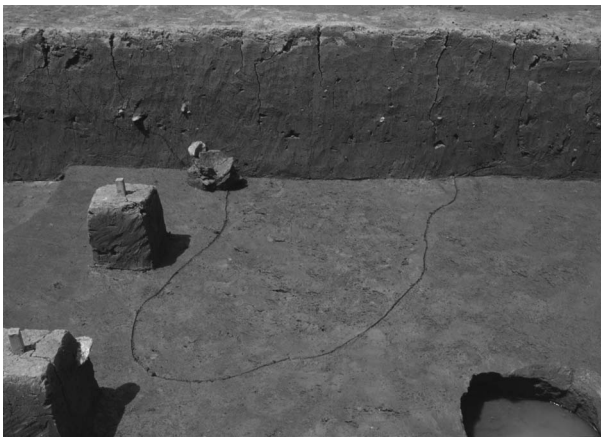
下層遺構検出状況（整地層掘り下げ後の再検出。北から）

027 - SD 完掘状況（西から）

2トレンチ北端　下層遺構検出状況（西から）

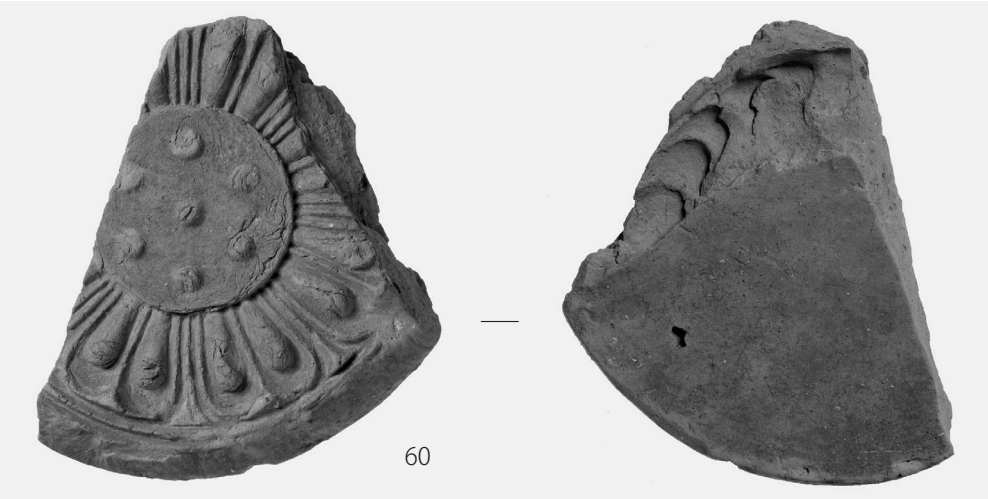
039 - SX 検出状況（西から）

039 - SX 完掘状況（西から）

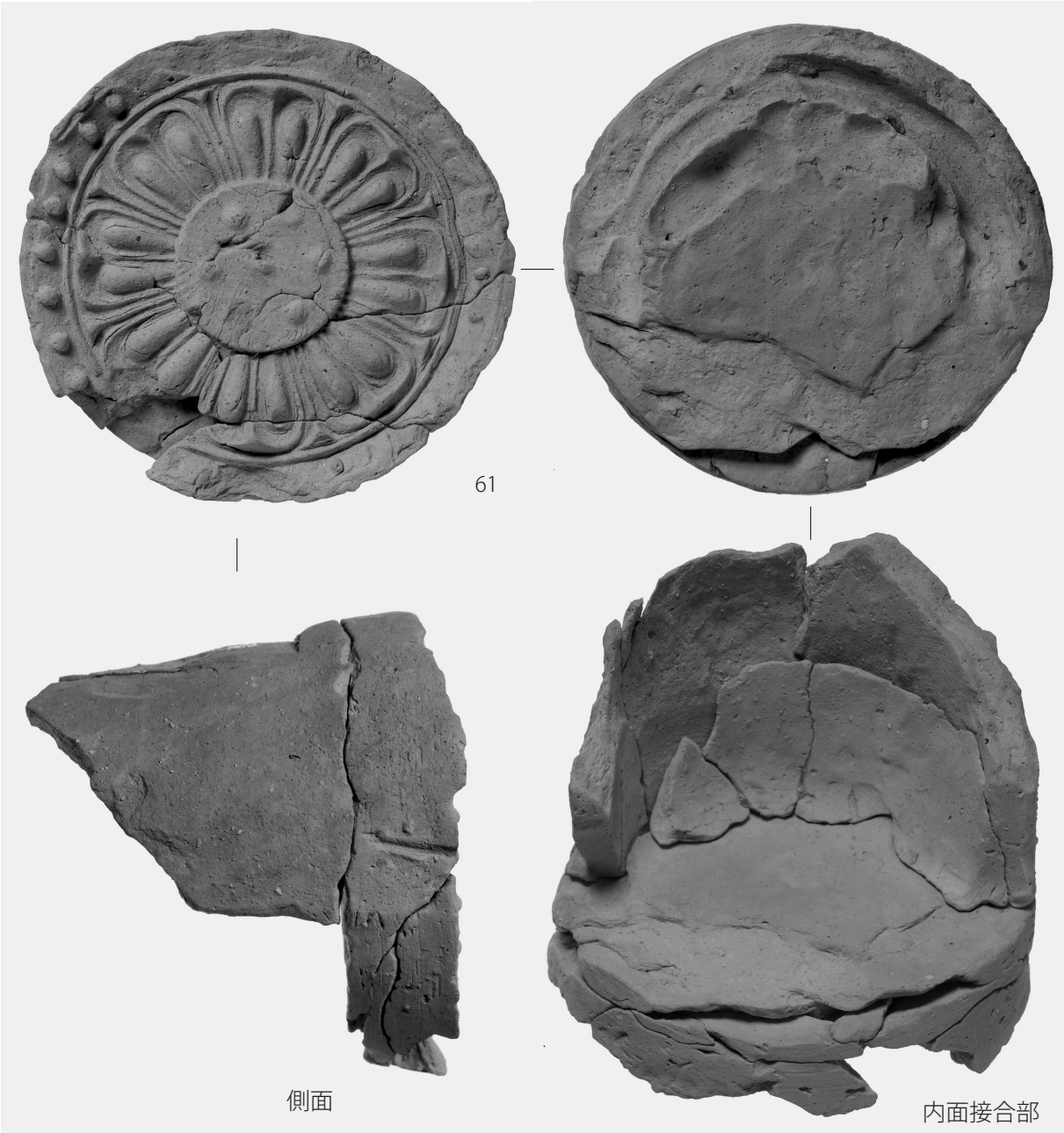


055 - SD 軒丸瓦出土状況（東から）

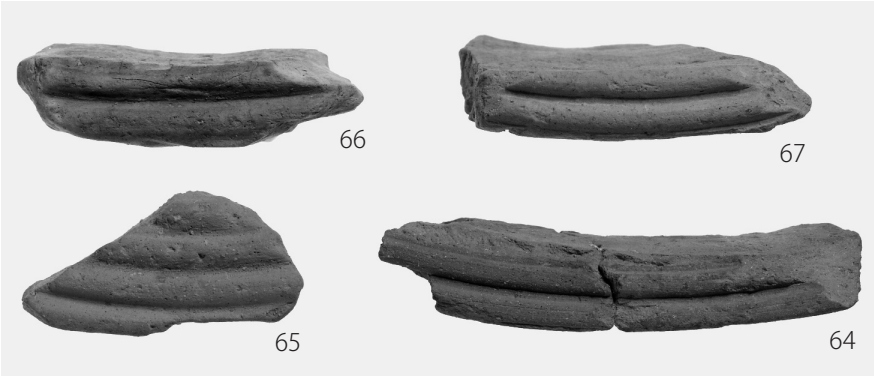
036 - SD 土器出土状況（西から）



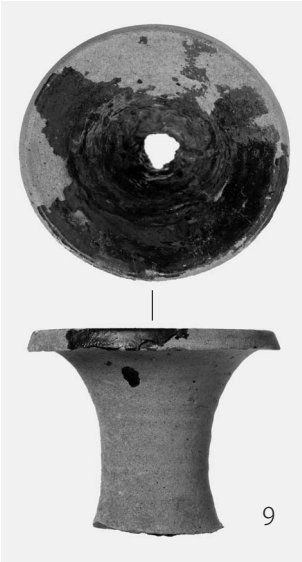
023 - SD 出土 軒丸瓦



055 - SK 出土 軒丸瓦



整地層出土 軒平瓦



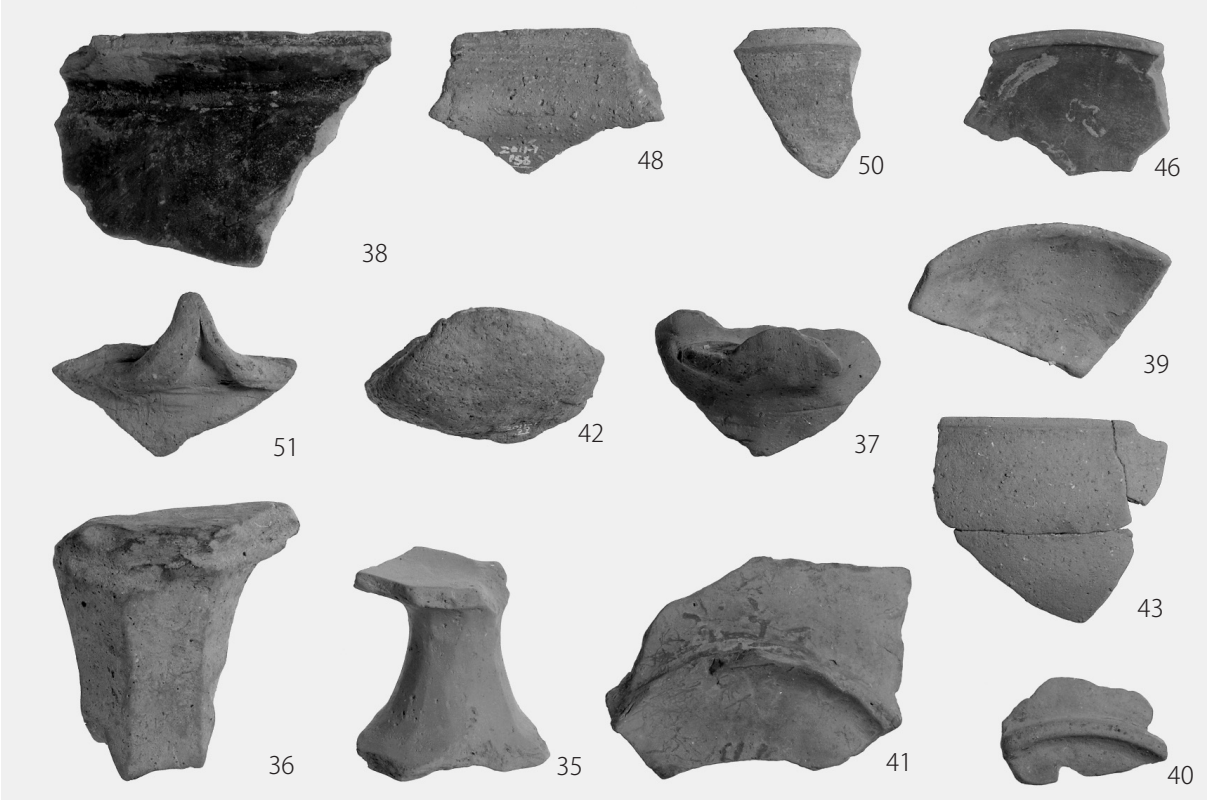
整地層出土 須恵器

046 - SD 出土 須恵器

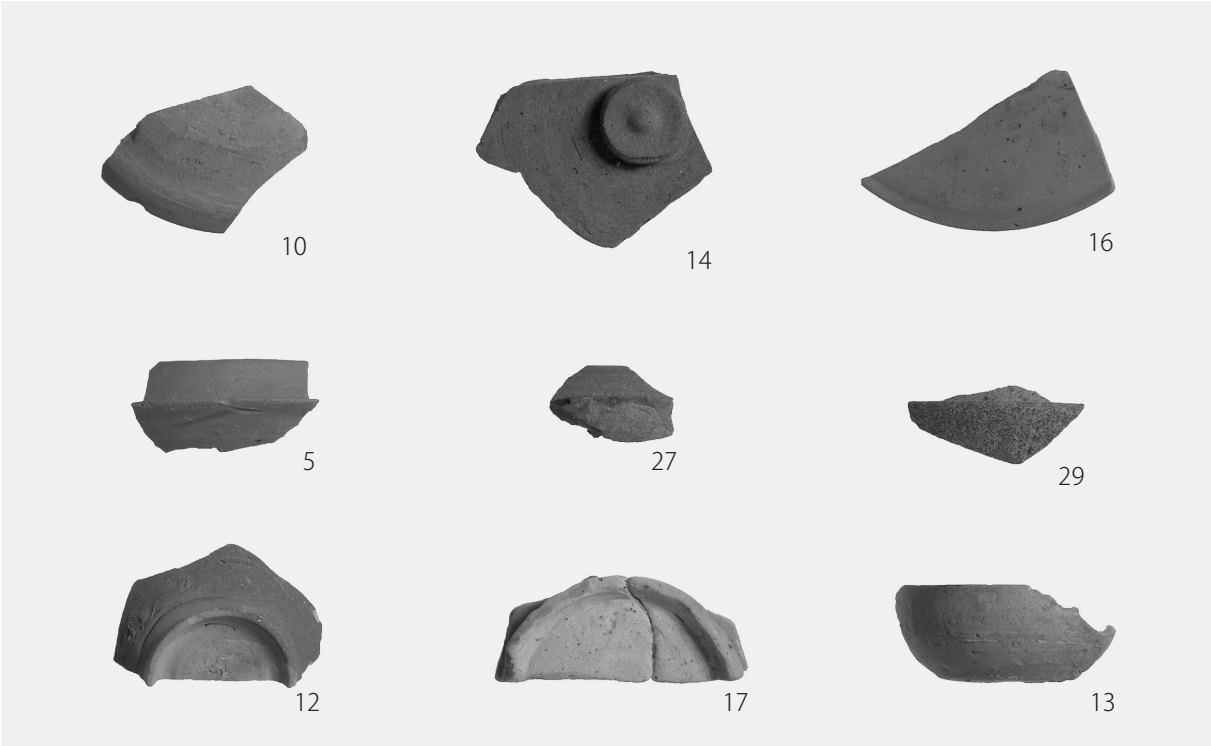
028 - SD 出土 須恵器

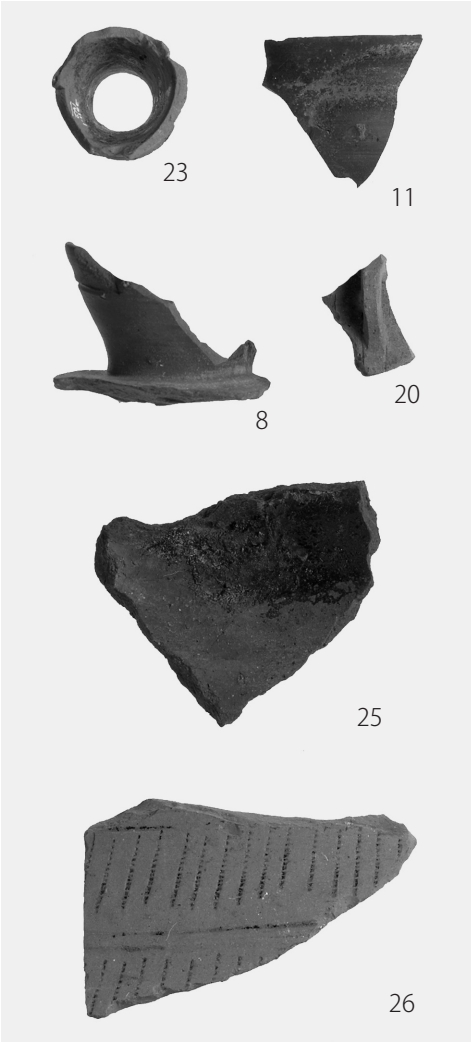
036 - SD 出土 土師器

整地層出土 土馬

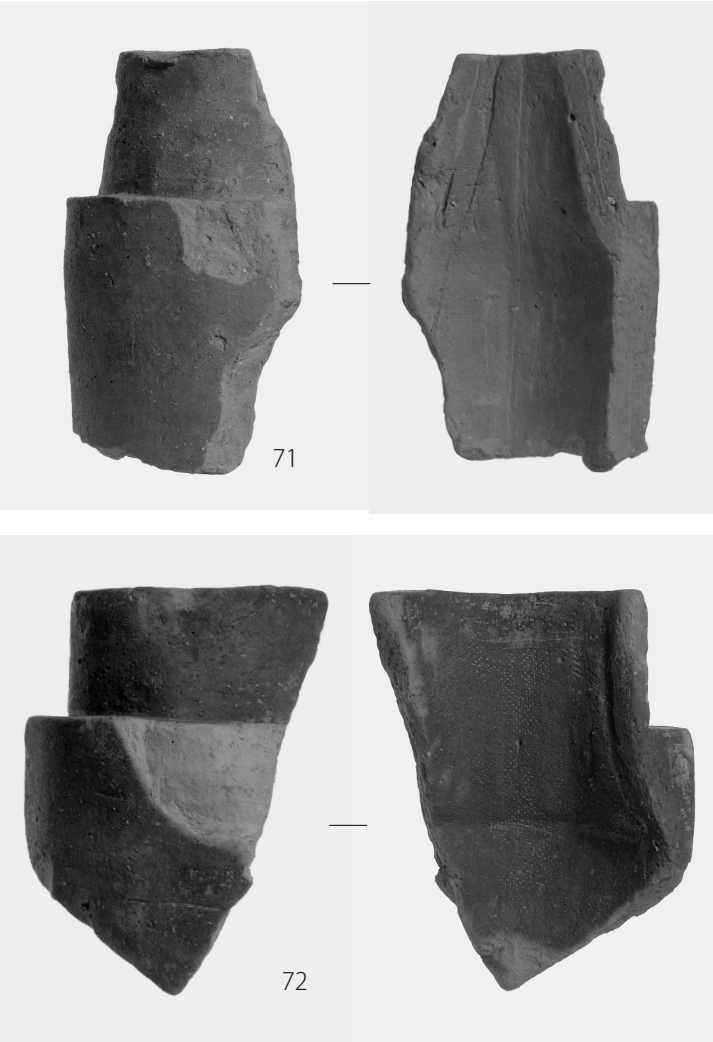


整地層出土 土師器

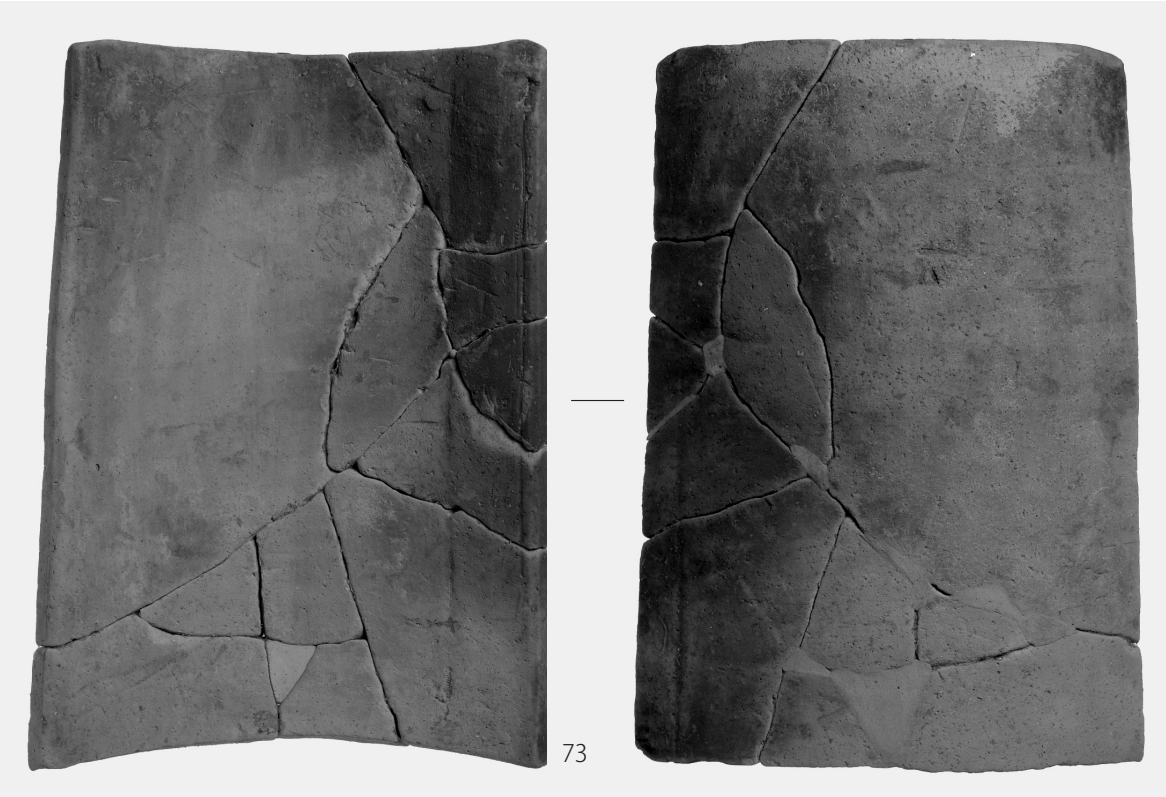




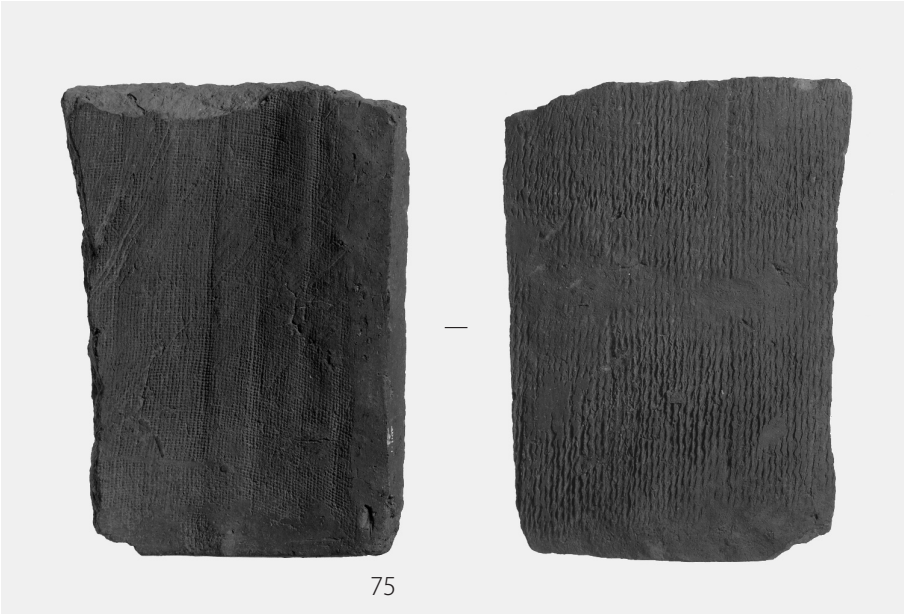
整地層出土 須恵器

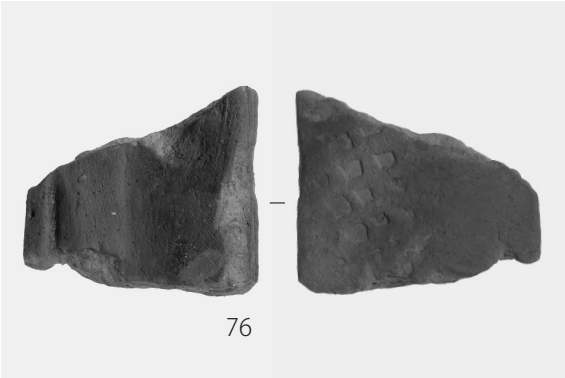


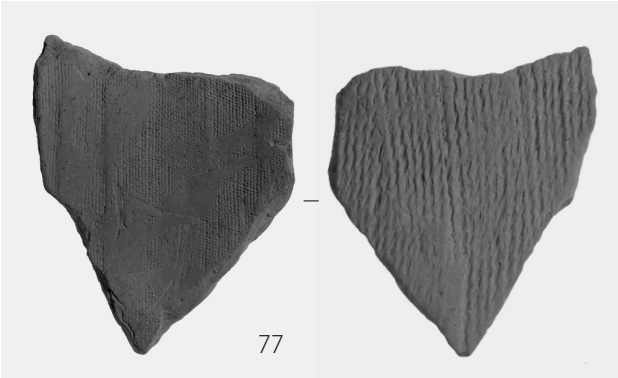
整地層出土 丸瓦

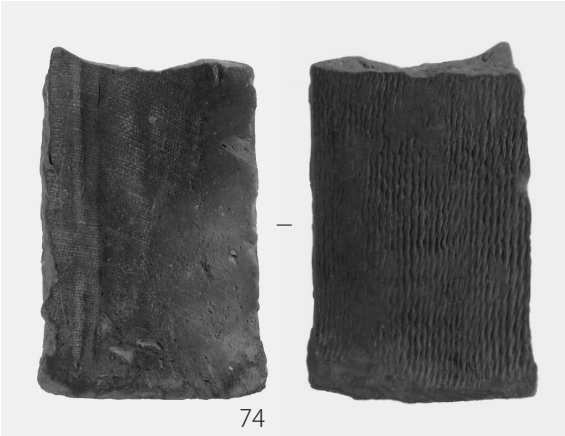


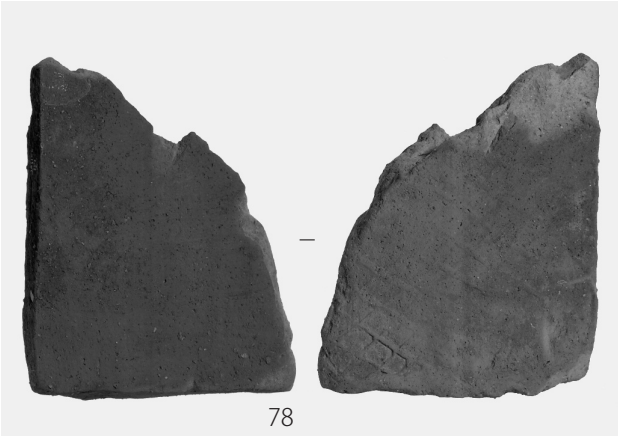
整地層出土　丸瓦・平瓦


75


76


77


74


78

整地層出土 平瓦

北・南区全景　下層遺構完掘状況（西から）

南区全景　上層遺構完掘状況（西から）

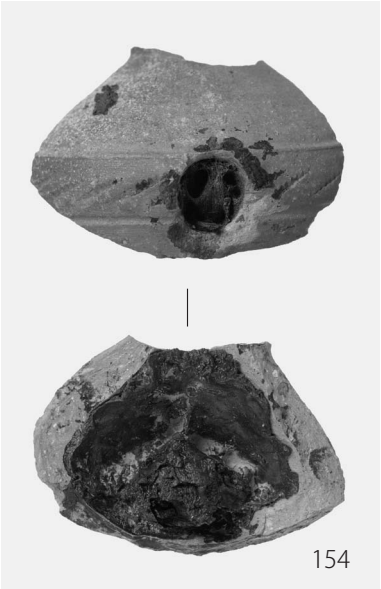
南区全景　下層遺構完掘状況（西から）

南区　落ち込み 035 - SX 完掘状況（南東から）

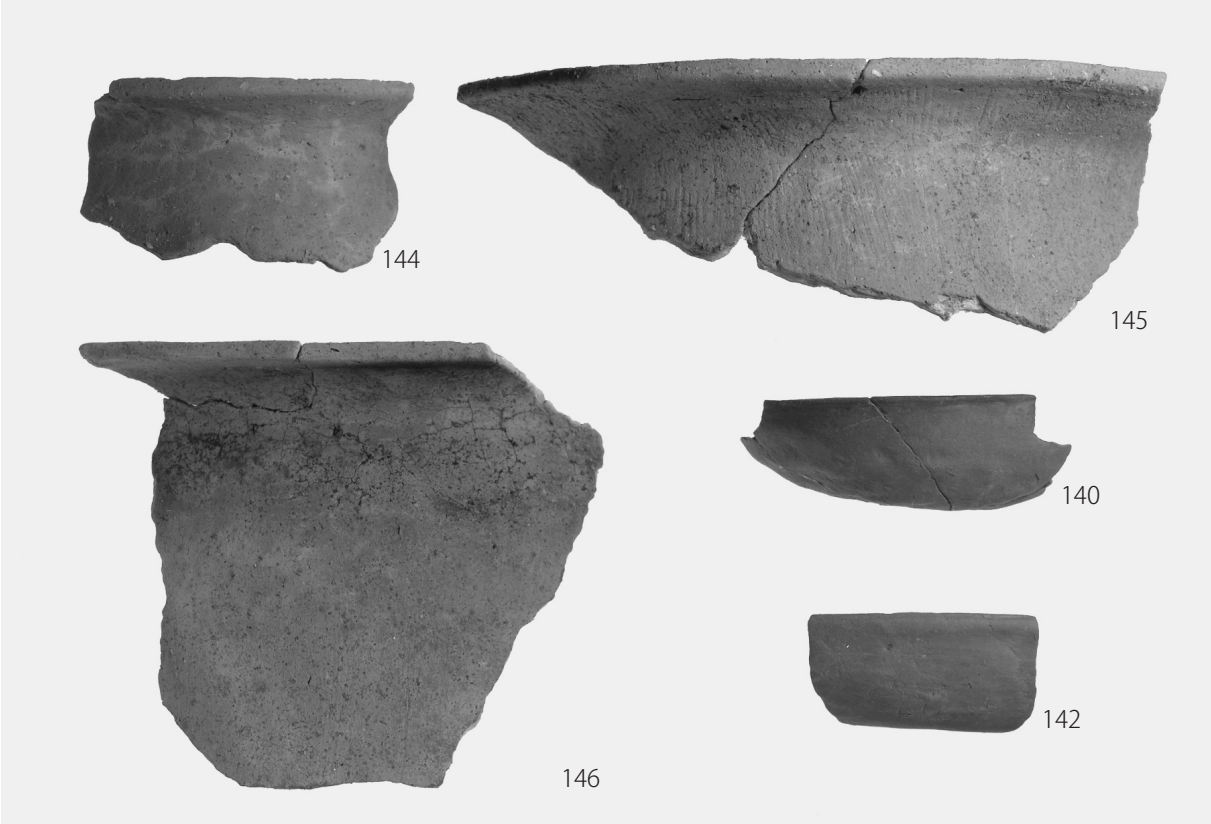
南区　落ち込み 035-SX 土層断面（北西から）

南区　土坑 028 - SX 完掘状況（南から）

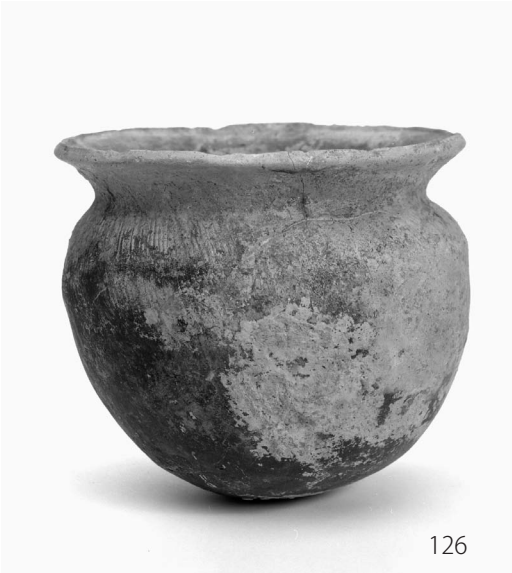
北区全景　下層遺構検出状況（東から）



032 - PIT 出土 須恵器



028 - SX 出土 土師器・須恵器


126

121

035 - SX 出土 土師器・須恵器

84

83

110

116

117

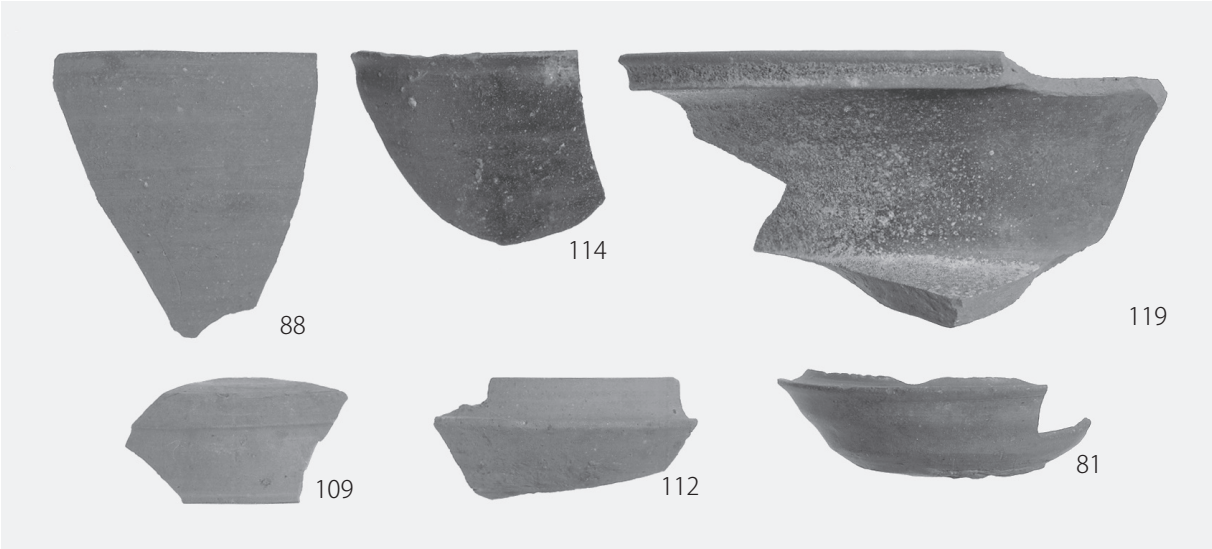
80

86

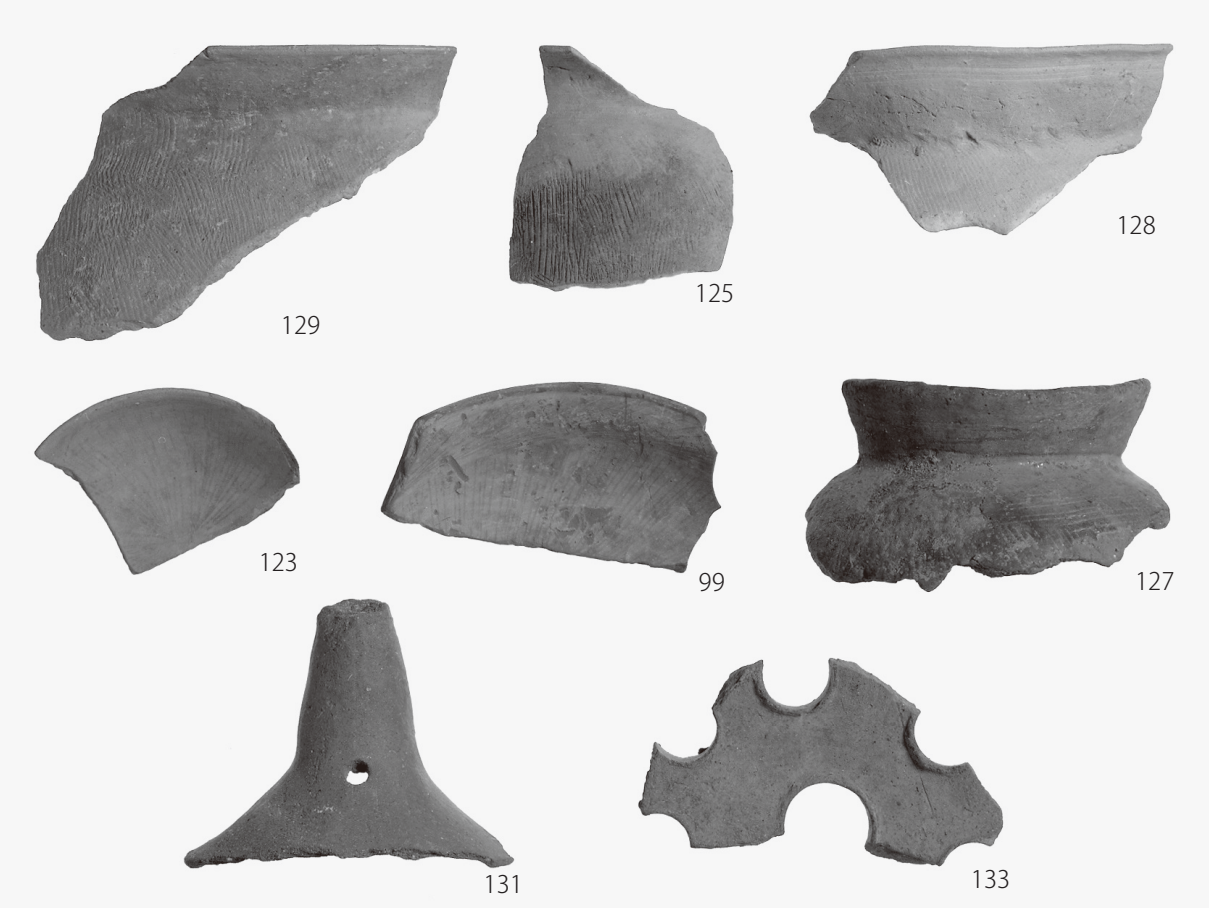
118

89

035 - SX 出土 須恵器



035 - SX 出土 須恵器



035 - SX 出土 土師器

報　告　書　抄　録

ふりがな	ふじわらきょうあと
書名	藤原京跡
副書名	右京十一・十二条三坊、右京十二条三・四坊
巻次	
シリーズ名	橿原市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第４冊
著作者名	橿原市教育委員会　平岩欣太・石坂泰士
編集機関	橿原市教育委員会事務局　文化財局　文化財課
所在地	〒634-0075　奈良県橿原市小房町11番5号　TEL 0744-22-4001　FAX 0744-24-9707
発行年月日	西暦2012年3月21日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
藤原京 右京十一・十二条三坊	奈良県 橿原市 石川町（いしかわ）地内	29205	14C576	34°29′05″	135°47′58″	2011/4/4 ～ 2011/5/2	183.0㎡	宅地造成
藤原京 右京十二条三・四坊	奈良県 橿原市 石川町（いしかわ）地内	29205	14C576	34°28′58″	135°47′56″	2011/5/10 ～ 2011/5/20	68.1㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
藤原京 右京十一・十二条三坊	都城跡	飛鳥時代 ～ 藤原京期	藤原京整地層、 西三坊大路東側溝、 溝、土坑、ピット	須恵器、土師器、瓦	橿教委 2011-1 次調査
藤原京 右京十二条三・四坊	都城跡	飛鳥時代 ～ 藤原京期	落ち込み、土坑、 溝、ピット	須恵器、土師器	橿教委 2011-2 次調査

要約

右京十一・十二条三坊の調査では、調査区全域で藤原京整地層の存在を確認した。整地層には７世紀後半の瓦が多量に含まれる。瓦は調査地周辺に存在していた石川廃寺に関わるものだと考えられる。整地層上面では西三坊大路東側溝をはじめとする藤原京期を中心とする遺構の存在を確認した。

右京十二条三・四坊の調査では、７世紀前半の落ち込みや藤原京期の土坑を確認した。当地域の開発が７世紀前半には行われていたことが明らかとなった。

橿原市埋蔵文化財調査報告　第４冊

藤原京跡

－右京十一・十二条三坊、右京十二条三・四坊－

発行年月日　平成24（2012）年３月21日

編集・発行　橿原市教育委員会
印　　刷　㈱アイプリコム
奈良県橿原市今井町３－２－５